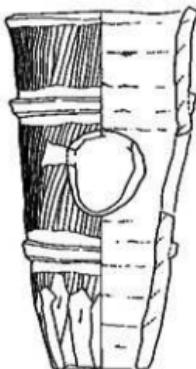


地田栗 III 遺跡



M-1号埴出し円筒埴輪

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



1 赤城山と地田栗田遺跡



2 地田栗田遺跡出土の土器群

序

関東平野の北西に位置する前橋市は、人口28万余人を有する群馬県の県都です。利根川の水や赤城山南麓の豊かな自然に恵まれた市域には、今から2万年以上も前の旧石器時代から現代に至るまで、人々が連續として暮らし続けてきた証としての多くの埋蔵文化財が残されています。

特に、地田栗田遺跡が所在する西大室地区は、市の東部の農耕地域に位置し、昔から遺跡の密集地として広く知られており、国・県・市の指定となっている史跡も數多く分布しています。

地田栗田遺跡は、この西大室地区を南北に貫く、前橋市が計画した市道246号線改良工事に先立つ発掘調査です。調査は、道路部分の全長400m、面積5,600m²の区域を実施しました。

調査の結果、古墳3基、古墳時代～平安時代の住居址23軒、溝址16条、井戸址4基等の遺構と円筒埴輪や住居址に伴う土器等の遺物を検出しました。

特筆されるのは、近世の遺構と比定される溝址から江戸時代中頃に使用されたと思われる陶磁器が多量に出土したことです。このことは、純農村地区としては大変特異のことで、今後の地域史を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が広く埋蔵文化財の保護普及に役立つと共に、調査より得られた資料が研究資料として活用されれば幸いです。

最後になりましたが、このたびの調査が円滑に進捗するよう御尽力いただいた前橋市土木部土木課の皆様はじめ、関係各位に衷心より感謝申し上げ、序といたします。

平成6年3月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 有坂 淳

例　　言

1. 本報告書は、前橋市市道246号線改良工事に係る地田栗III遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県前橋市西大室町1454-4外に所在する。
3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 有坂 淳が施工者 藤嶋清多と委託契約を締結し実施した。

調査担当者および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者 狩野吉弘・新井真典(前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係)

発掘調査期間 平成5年5月10日～平成5年10月8日

整理・報告書作成期間 平成5年10月12日～平成6年3月25日

4. 本書の原稿執筆・編集は狩野・新井が行った。整理作業をはじめ図版作成には、阿部シゲ子・桐谷秀子・鈴木民江・出口桂子・多田啓子・塚本富江・堀越晴子・柳井晶子の協力があった。
5. 石器石材の鑑定は飯島鈴男氏(群馬地質研究会員)、陶磁器の鑑定は大西雅広氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団)、埴輪の鑑定は南雲芳昭氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団)の手をわざらわせた。
6. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1. 採図中に使用した北は座標北である。
2. 採図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図(宇都宮)と1/2.5万地形図(大胡)を使用した。
3. 各遺跡の略称は5E29である。
4. 各遺構の略称は次の通りである。

M…古墳、H…土師器使用の住居址、D…土坑址、W…溝址・水路、O…落ち込み址、
I…井戸址

5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構 古墳…1/200、1/120 住居址…1/60 住居址窓…1/30 土坑址・溝址・井戸址

・落ち込み址…1/60 全体図…1/800

遺物 土器…1/3、1/4 墓輪…1/5

石器・石製品・その他の金属製品…2/3、1/2、1/3、1/6

6. スクリーントーンの使用は次の通りである。

遺構平面図 焼土…点

遺物実測図 石器使用痕…線、石器摩滅痕…淡点、須恵器断面…黒塗

目 次

序

I 調査に至る経緯 1

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地 1

2 歴史的環境 3

III 調査の経過

1 調査方針 5

2 調査経過 5

IV 履 序 7

V 遺構と遺物 10

VI ま と め 20

付 編

1. 地田栗III遺跡の地質調査 <御古環境研究所> 21

2. 地田栗III遺跡M-1号、M-2号墳の円筒埴輪観察表のまとめ 27

<群馬県埋蔵文化財調査事業団 南雲芳昭>

図 版

図版 1 赤城山と地田栗田遺跡

- P.L. 1 地田栗田遺跡A区全景
- 3 M-2号墳
- 5 B区住居址
- 7 C区住居址・遺物
- 9 近世の陶磁器類
- 11 古墳～奈良・平安時代の土器
- 13 古墳～奈良・平安時代の土器
- 15 古墳時代の埴輪
- 17 近世の陶磁器類

図版 2 地田栗田遺跡出土の土器群

- P.L. 2 M-1号墳
- 4 B区住居址
- 6 C区住居址・遺物
- 8 近世の陶磁器類
- 10 古墳～奈良・平安時代の土器
- 12 古墳～奈良・平安時代の土器
- 14 古墳～奈良・平安時代の土器
- 16 古墳時代の埴輪
- 18 石器・金属製品、墨書き土器

挿 図

頁

- Fig. 1 地田栗田遺跡の位置 vi
 3 グリッド設定図 4
 5 地田栗田遺跡標準土層図 7
 7 B・C区全体図 9
 9 M-2号墳墳丘図 33
 11 H-1～2号住居址 35
 13 H-5～6号住居址 37
 15 H-9～10号住居址 39
 17 H-12～14号住居址 41
 19 H-15号住居址 43
 21 H-17号住居址 45
 23 H-20～21号住居址 47
 25 I-1～4号井戸址0-1号落ち込み址 49
 27 D-13～21号土坑 51
 29 W-1～4・6・7・10～12・14～16号溝址 53
 31 古墳～奈良・平安時代の土器(2) 55
 33 古墳～奈良・平安時代の土器(4) 57

- Fig. 2 地田栗田遺跡周辺遺跡図 2
 4 発掘調査経過図 6
 6 A区全体図 8
 8 M-1号墳墳丘図 31・32
 10 M-3号墳全体図・H-1号住居址 34
 12 H-3～4号住居址 36
 14 H-7～8号住居址 38
 16 H-11～12号住居址 40
 18 H-14～15号住居址 42
 20 H-16号住居址 44
 22 H-18～19号住居址 46
 24 H-22～23号住居址 48
 26 D-1～12号土坑 50
 28 D-22～31号土坑 52
 30 古墳～奈良・平安時代の上器(1) 54
 32 古墳～奈良・平安時代の土器(3) 56
 34 古墳～奈良・平安時代の土器(5) 58

35 古墳～奈良・平安時代の土器(6).....59	36 古墳～奈良・平安時代の土器(7).....60
37 古墳～奈良・平安時代の土器(8).....61	38 古墳～奈良・平安時代の土器(9).....62
39 古墳～奈良・平安時代の土器(10).....63	40 古墳時代の埴輪(1).....64
41 古墳時代の埴輪(2).....65	42 石器・特殊遺物(1).....66
43 石器・特殊遺物(2).....67	44 石器・特殊遺物(3).....68

表

	頁		頁
Tab. 1 古墳、奈良・平安時代遺物観察表	23・24	Tab. 2 陶磁器類観察表	24・25
Tab. 3 塩輪観察表	26・27	Tab. 4 石器・特殊遺物観察表	30

調査参加者 青木英夫 阿部こう 阿部シゲ子 飯島民弥 大野京子 落合高男 北浦寛一 木村かね子
 喜楽トヨ 桐谷秀子 久保田海一郎 小沼豊子 小沼はつ 小峰 篤 鈴木民江 鈴木智明
 須藤か津ゑ 多田啓子 都丸主女作 都丸大雅 富沢彰之 長岡徳治 中村新太郎 原島なか
 福島逸司 堀越晴子 松倉りつ 村山ふで 柳井晶子

調査協力 群馬県教育委員会文化財保護課 群馬県埋蔵文化財調査事業団 飯島静男 大西雅広 早田
 勉 杉山秀宏 大工原豊 南雲芳昭 三浦茂三郎 茂木雅男 山下敬信 (株)イズミレス
 井上測量設計株式会社 (株)古環境研究所 サノヤ産業株式会社 篠原設備工業株式会社 (株)
 シン技術コンサル 鈴木電設 (株)青高館 たつみ写真スタジオ (株)前橋大気堂 (株)宮下工業

(五十音順敬称略)

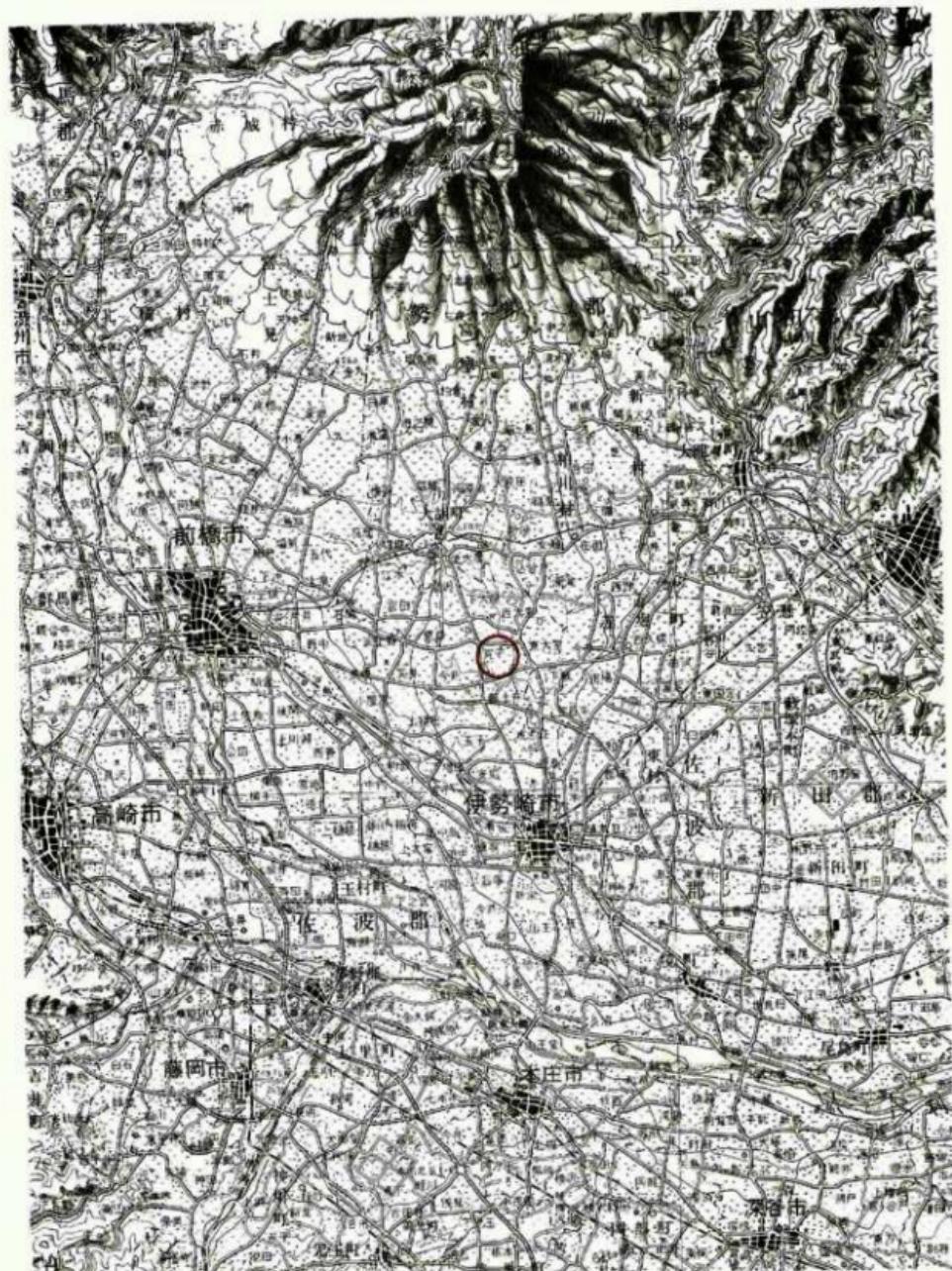


Fig. 1 地田栗III遺跡の位置
1:200,000

I 調査に至る経緯

本発掘調査に関しては、平成5年3月12日付けで土木課より西大室町地内の市道246号線改良工事に係わる埋蔵文化財試掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受け、同年3月16・17日教育委員会文化財保護課で試掘調査を実施したところ、本調査地は遺跡地であることが判明した。そこで、調査結果を回答するとともに遺跡の現状保存についても考慮願いたい旨を土木課へ伝達した。その後、土木課と協議・調整を行った結果、工事が回避できること等から工事に先立つ埋蔵文化財記録保存のための発掘調査を実施することが確認された。これに基づき同年3月29日、前橋市長より前橋市教育委員会あて本発掘調査の依頼がなされ、教育委員会の内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団がこれを受諾することとし、同年4月27日両者の間で本発掘調査の委託契約が締結された。そして、同年5月10日、現地での発掘調査を開始するに至った。なお、遺跡名称の『地田栗III遺跡』は、群馬県教育委員会が平成元年度に荒砥北部は場整備事業に伴う発掘調査を実施した際の遺跡の名称『地田栗I遺跡』および『地田栗II遺跡』を踏まえたものである。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

地田栗III遺跡が所在する西大室町は、前橋市街地(県庁付近)から東へ約11kmのところにある。今回の発掘調査は幅14m、総延長約400mの市道246号線の改良工事に伴うもので、ほぼ北西から南東に延びる発掘箇所の南端は、国道50号線と神沢川が交差する所から北へ約1kmの地点で、その北端は県道伊勢崎・深津線と市道10号線の交差点から西へ500mの地点にある。調査の原因である市道246号線は今回の調査箇所を含め、将来的には南は国道50号線から、北は新たに国道353号線に昇格した大間々・赤城・子持線にむける計画である。完成の時にはほぼ、赤城山の南斜面を裾野から中腹へ駆け登るルートとなる。この赤城山南麓の地形は関東ローム層を基盤とする洪積台地が発達し、一般に高燥な畑作地が広がっている。その台地は山麓を南下する中小の河川によって樹枝状に開析が進み、複雑な谷地が形成され、そこに狭隘ながら水田が開かれている。本遺跡地は赤城山南麓の最末端部に位置しており、また平成元年度に県営は場整備事業が終了しているため、上記のような起伏に富んだ複雑な地形は見られない。周囲は桑畠や水田が広がり、一見ほぼ平坦な地形を呈しているが実際には北から南へ傾斜するゆるやかな斜面上に本遺跡地は位置し、地田栗の集落を中心とした台地上から神沢川の形成した低地にかかる部分(標高113m~107m)に立地している。

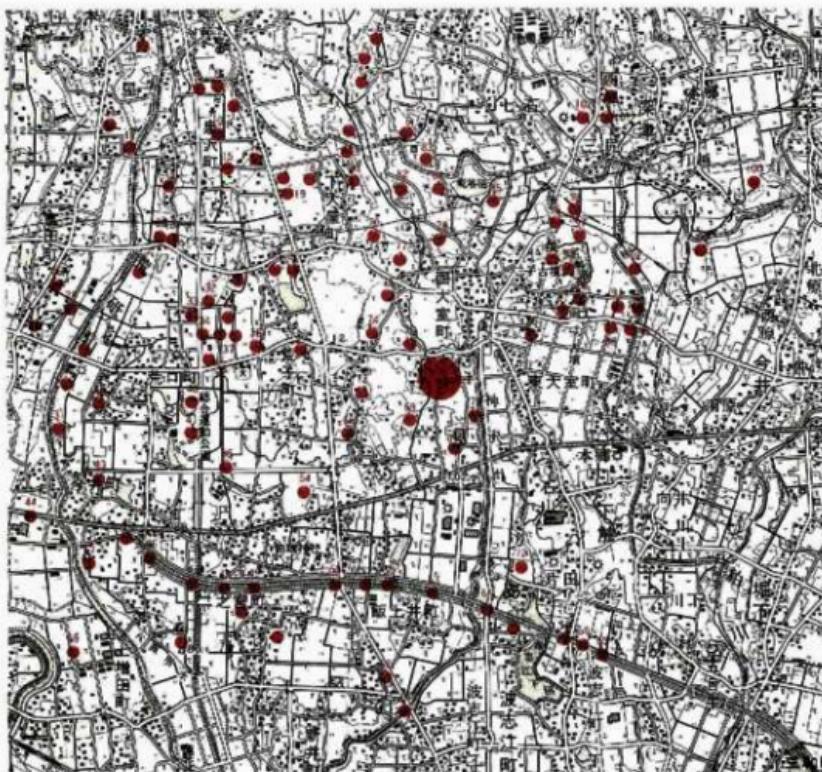


Fig. 2 地田栗III遺跡周辺遺跡図(周辺遺跡一覧)

- 1.地田栗III遺跡
- 2.上ノ山・茂木遺跡
- 3.猿の穴II遺跡
- 4.熊の穴II遺跡
- 5.上横街遺跡
- 6.大久保遺跡
- 7.大通遺跡
- 8.山崎遺跡
- 9.谷沖遺跡
- 10.寺東遺跡
- 11.三塚遺跡
- 12.荒畠355号墳
- 13.寺前遺跡
- 14.丸山遺跡
- 15.東前田北遺跡
- 16.東原西遺跡
- 17.東原B遺跡
- 18.中山A・B遺跡
- 19.村主遺跡
- 20.御殿山古墳
- 21.北原遺跡
- 22.坂東遺跡
- 23.川篠岩戸遺跡
- 24.荒子小学校校庭遺跡
- 25.荒畠源訪遺跡
- 26.東原古墳群
- 27.宮下遺跡
- 28.東原遺跡
- 29.荒砥川II遺跡
- 30.荒砥前田遺跡
- 31.荒砥北原遺跡
- 32.柳久保遺跡
- 33.麻訪遺跡
- 34.柳久保遺跡
- 35.中鶴谷遺跡
- 36.源無遺跡
- 37.柳久保水田社遺跡
- 38.下鶴谷遺跡
- 39.荒砥中郷遺跡
- 40.荒砥大日塚遺跡
- 41.鶴谷遺跡
- 42.荒口前原遺跡
- 43.荒砥北三木堂遺跡
- 44.今井白山遺跡
- 45.今井道上道下遺跡
- 46.二之吉谷池遺跡
- 47.二之宮先施遺跡
- 48.二之宮千足遺跡
- 49.二之宮宮下西遺跡
- 50.二之宮宮東遺跡
- 51.坂土井上組遺跡
- 52.坂土井中央遺跡
- 53.坂土井日本松遺跡
- 54.荒砥上ノ坊遺跡
- 55.波志江今宮遺跡
- 56.荒砥大日塚遺跡
- 57.宮見戸古墳群
- 58.波志江天神山遺跡
- 59.波志江六反田遺跡
- 60.波志江中峰遺跡
- 61.赤石城址遺跡
- 62.宿瀬古墳
- 63.青柳遺跡
- 64.荒砥天の宮遺跡
- 65.宮原遺跡
- 66.中原遺跡
- 67.今井神社古須群
- 68.荒砥菟子遺跡
- 69.立野古墳群
- 70.丸山古墳群
- 71.荒砥東原遺跡
- 72.伏牛遺跡
- 73.舞台遺跡
- 74.下境I遺跡
- 75.富士山I遺跡
- 76.阿久山古墳群
- 77.伊勢山遺跡
- 78.半島遺跡
- 79.明神山遺跡
- 80.王山遺跡
- 81.大道遺跡
- 82.水口山遺跡
- 83.小畠荷塩遺跡
- 84.大船荷遺跡
- 85.北山遺跡
- 86.大室小学校校庭遺跡
- 87.荒砥上課訪遺跡
- 88.荒砥五反田遺跡
- 89.荒砥五反田遺跡
- 90.荒砥上川久保遺跡
- 91.梅木遺跡
- 92.久保皆戸遺跡
- 93.前二子古墳
- 94.中二子古墳
- 95.後二子古墳
- 96.上純引遺跡
- 97.内堀遺跡
- 98.下純引遺跡
- 99.荒丘山古墳
- 100.程荷山遺跡
- 101.三ヶ尻遺跡
- 102.西原遺跡
- 103.亞迎遺跡

2 歴史的環境

地田栗III遺跡がある赤城山南麓に位置するこの地区は、古墳が多い群馬県下でも最も密な分布がみられる地域の一つとなっている。近年では土地改良事業や大規模な開発事業が極めて急激にかつ広範囲にわたって行われ、それらに伴う発掘調査によって検出された遺跡が今現在も爆発的に増え続けている。

歴史的な環境の説明として、まず旧石器時代では、周辺では柳久保遺跡群頭無遺跡(36)で網石刃やナイフ形石器等を伴う3枚の文化層が検出され、他に、尖頭器を中心に出土した北三木堂遺跡(43)、牛伏遺跡(72)、熊の穴II遺跡(4)等があげられるが、今後の調査によって遺跡の数はさらに増えるであろう。

縄文時代では、草創期から後期まで検出されている。草創期では、荒砥北原遺跡(31)、北三木堂遺跡(43)があげられる。早期は、荒砥北原遺跡(31)、柳久保遺跡(34)、前期は、鶴谷遺跡(41)、荒砥諏訪遺跡(25)、荒砥上ノ坊遺跡(54)、宮山遺跡(29)、東原遺跡(28)などがあり、中期では、荒砥諏訪遺跡(33)、荒砥北原遺跡(31)、二本松遺跡(53)、後期になると大道遺跡(7)がある。晩期の遺跡はまだ発見されていない。

弥生時代は、荒口前原遺跡(42)で中期末の住居址が調査されている。その他の中期の遺跡として、柳久保遺跡群頭無遺跡(36)があり、また、乾谷沼、五料沼周辺で、北山遺跡(85)、下緋引遺跡(98)、久保皆戸遺跡(92)、西原遺跡(102)、宮下遺跡(27)で後期の住居址が密集し検出されている。

古墳時代になると、この地域は古墳の宝庫とも言われるほど県下有数の古墳密集地となる。代表的なものとして、国指定史跡となっている西大室の3二子古墳(93・94・95)をはじめ、数多くの古墳が築造されている。6世紀初頭の箱式棺状石室を持つ上ノ山・茂木古墳(2)、その他として、熊の穴遺跡(3)、上横俵遺跡(5)、御殿山古墳(20)、東原古墳群(26)、宮見戸古墳群(57)、宿畠古墳(62)、今井神社古墳群(67)、立野古墳群(69)、丸山古墳群(70)、舞台遺跡(73)、阿久山古墳群(76)、伊勢山古墳群(77)、中島古墳群(78)、水口山遺跡(82)、小稻荷遺跡(83)、大稻荷遺跡(84)など枚挙にいとまがないほどの数である。一方、集落は急激な増加がみられる。前期のものは内堀遺跡群(97)、荒砥宮田遺跡(29)、荒砥東原遺跡(28)、大室小学校校庭遺跡(86)等で、中期は集落址のほかに荒砥荒子遺跡(68)、梅木遺跡(91)、丸山遺跡(14)で豪族居館址が発見されている。続く後期では、北山遺跡(85)で集落址が検出されている。

奈良・平安時代に至ると、近隣した台地上に多数の集落が出現する。集落跡は、中鶴谷遺跡(35)、頭無遺跡(36)、北山遺跡(85)、西迎遺跡(103)がそれにあたる。浅間B軽石によって埋没した水田跡としては、柳久保水田址(37)が知られ、818年(弘仁9年)の地震の際に埋没した水田址として中原遺跡(66)があげられる。

今回の調査は、古墳時代の古墳、住居址から奈良・平安時代の住居址そして中世・近世の溝、井戸などが調査の時代範囲であるが、本調査では江戸時代以降の陶磁器類が多數出土しており、その研究は今後に貴重な影響を及ぼすと思われる。

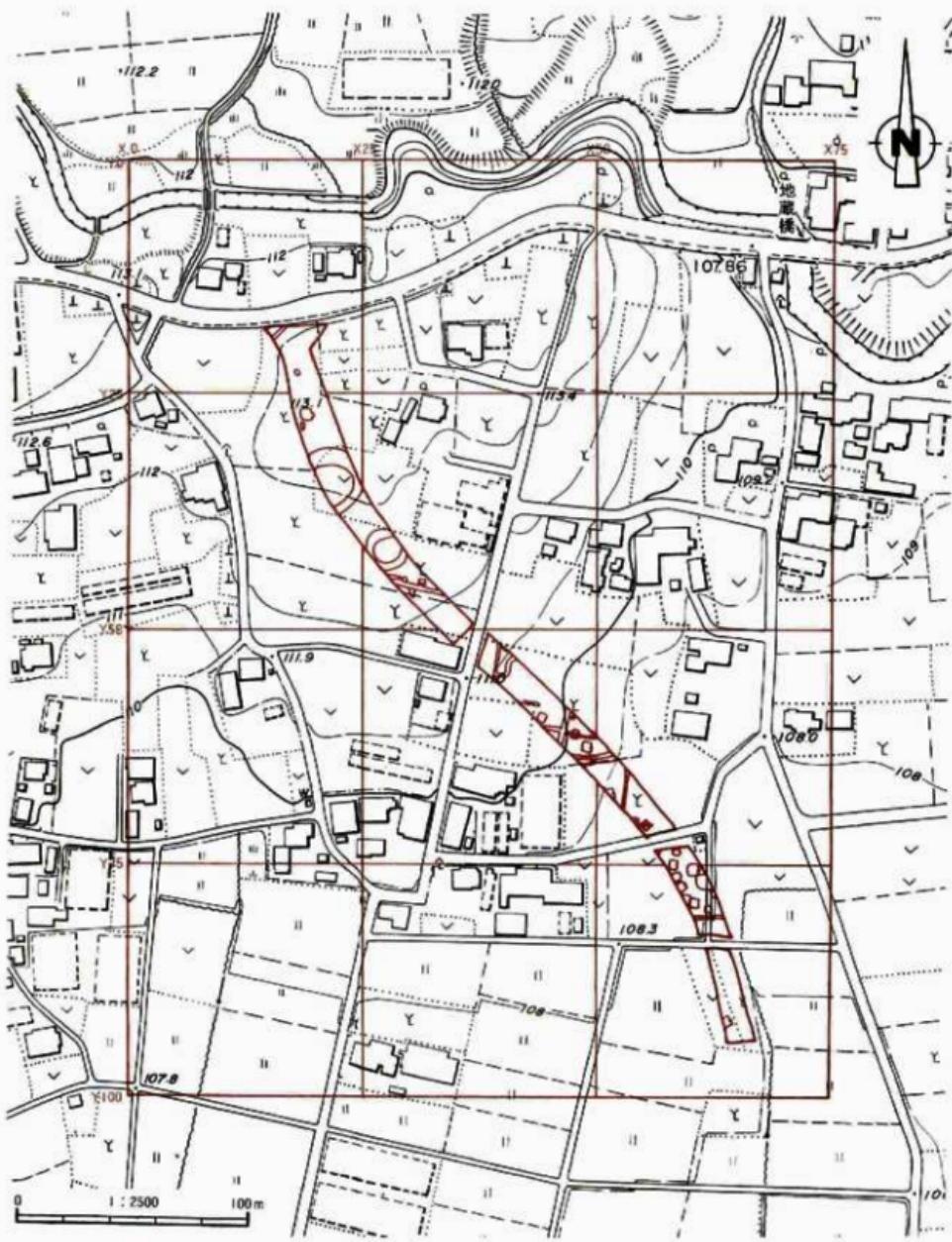


Fig. 3 グリッド設定図

III 調査の経過

1 調査方針

委託された調査箇所は幅14m、総延長約400mの市道改良工事予定地にあたり調査面積は5,600m²である。調査範囲の形状から全体をA区、B区、C区の3調査区に区分した。調査実施に際しては、発掘調査範囲の全域をカバーする4mグリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。

各グリッドの呼称方法は南北方向をY軸とし、北から南へY1、Y2、Y3……、東西方向をX軸とし西から東へX1、X2、X3……で表し、それぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下のとおりである。

1. 土層観察は遺構中央部で交差するセクションベルトを設けて行う。
 2. 10cm四方以上の遺物は縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作製し、取り上げに際しては遺物台帳に諸属性を記録する。
 3. カマドは原則として縮尺1/10で図化し、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて実施する。
- なお、測量の基準点はX25、Y40グリッドで公共座標は第IX系(X = +42,140m、Y = -58,000m)である。

2 調査経過

地田栗III遺跡の発掘調査は5月10日から始まった。まずA区から、重機(バックフォー0.7m³)を投入しての表土掘削が開始されたが、古墳時代から奈良・平安時代、近世にかけての遺構がほぼ均一に広がっていた。2基の円墳はその中心であり、特にM-1号古墳からは、円筒埴輪の破片が数にして3千数百出土し、5月はその遺物上げに大半を費やした。また、この月最初の住居址が検出された。

6月に入り、A区での最大級の遺構であるM-1号・M-2号古墳の掘り下げと遺物上げにかかり、当初の進行計画にしだい、しだい警笛を鳴らすようになった。残念ながら両古墳から石室を検出することはできなかった。古墳のほかに、いくつかの中・近世の溝から内耳土器・摺鉢・石臼・香炉・茶碗が数多く検出されたのだが、取り上げた時点では昨日まで使っていたのではないかと思われる程、現在使用しているものと似ていた。しかし、後日精査したところ、江戸時代中頃の「遺物」であることが判明した。

今年もまた異常気象か、調査が始まってから“青空”的日が数えるほどしかないままに、7月となる。どうしても中旬までにはA区の全体撮影をやり終えなければならない。天気予報とにらめっこした日々の中、明け切らぬ梅雨を恨めしく思いながら、祈るような気持ちで7月16日、撮影当日を待つ。どうにか成功。前日までの清掃を含めた復旧作業の労が癒された。A区の調査の

全てを終了させた後、直ちに埋め戻し、引き続きB・C区の表土剥ぎ(効率を考慮してB・C区は同時進行の計画を立てた。)となった。

8月はC区の調査が中心となった。ここは、付近を流れる神沢川の旧河道が調査区を縦断しており、部分的にローム以外の河川堆積物が地山を形成している。10数軒の住居址が検出されたが、多くが重複をなしており、床面・壁面を決定づけるのは今回の調査の中でも難しく苦労した。住居址は、4世紀から奈良・平安に至るまでの時代幅があったが、石田川式・鬼高式土器、煙道先端部に穴あきの壺を使用した竈や二重竈を持つ住居址など、調査の直前までトウモロコシ畑だったその下わずか数10センチの所にさほど損傷を受けていない歴史が静かに眠り続けていたことに少なからず感銘を抱く。

そして9月の声を聞く。舞台主役はB区へと移った。数軒の住居址と数条の溝の精査をする。今年の夏は、暑さに悩むことはなかったが、雨には悩ませられた。せっかく仕上げた遺構も一夜の雨で水浸しとなり、それを攝き出す繰り返しとなつた。が、9月28日、調査区上空をヘリコプターが飛んだ。撮影成功。こうして5カ月に及んだ発掘調査は、3基の古墳、23軒の住居址、16条の溝、4基の井戸、30基の土坑等の遺構を検出し、無事終了することができた。

そして10月8日には器材・出土品の運搬を行い、その後の整理作業と報告書の作成は10月12日から平成6年3月25日まで文化財保護課整理棟で行い、すべての作業を完成させる運びとなつた。

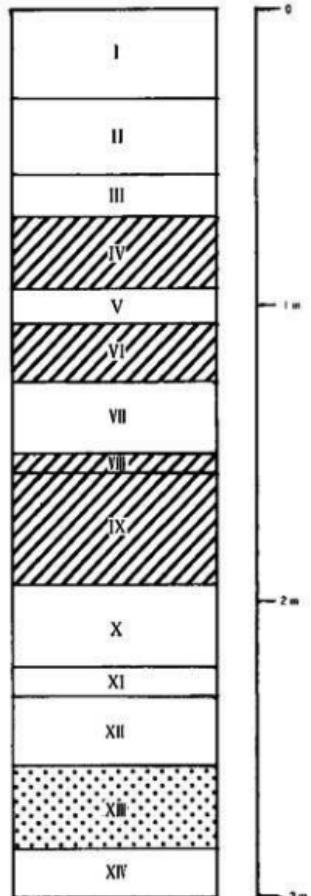


Fig. 4 発掘調査経過図

IV 層序

本遺跡は、赤城山南麓の荒砥川から神沢川にかけて広がる扇状地の先端部に位置している。この扇状地は、赤城山の新期成層火山の開析に伴って生産された岩屑や、大胡火砕流に伴って噴出したテフラが後の洪水などによって形成されたもので、その時期は更新世後期(約10万年～4万年前)の頃と思われる。その後、本遺跡地周辺では、この基盤上に完新世(約1万年)以降、新たに形成された小規模な扇状地が広がり、基本的に南北に緩やかに傾斜する地形を形成している。

しかし、遺跡地のほぼ中央部には神沢川の氾濫原と思われる粘土層や礫層の広がる部分があり、



- ここでは、ローム層の堆積はほとんど見られない。
- I 層：黒褐色粗砂層。一次堆積のAs-B(浅間Bテフラ；1108年)を若干含む。粘性、締りとともに無し。現在の耕作土層。
 - II 層：暗褐色細砂層。径10mmのHr-F P(ニツ岳軽石；6世紀中葉)、As-C(浅間Cテフラ；4世紀中頃)を若干含む。粘性なし、締りややあり。
 - III 層：暗灰黃褐色細砂層。粘性を少し有し、締りあり。
 - IV 層：暗褐色硬質ローム層。As-Y P(約1.3～1.4万年前)、As-S P(約1.5万年前)をブロック状に5～10%含む。粘性があり堅くしまる。
 - V 層：褐色硬質ローム層。粘性があり、堅く締まる。
 - VI 層：黄褐色硬質ローム層。下部にAs-B P(1.8～2.1万年前)をブロック状に20～30%含む。粘性があり、堅く締まる。
 - VII 層：暗褐色粘土層。薄い暗色帯。A T(2.1～2.4万年前)を含む。粘性が強く、締りが弱い。
 - VIII 層：灰黄褐色粘土層。薄い暗色帯。A Tを含む。
 - IX 層：灰褐色粘土層。顕著な暗色帯。上部にHr-H A(榛名一八崎火山灰；約2.8万年前)を含む。
 - X 層：黄褐色硬質ローム層。粘性があり、堅くしまる。
 - XI 層：明黄褐色硬質ローム層。粘性があり、堅くしまる。
 - XII 層：灰黄褐色硬質ローム層。粘性があり、堅くしまる。
 - XIII 層：黄白色軽石層。Hr-H P(榛名一八崎軽石層；4.1万年前)を主体とする。軽石の最大径13mm。
 - XIV 層：暗褐色粘土層。水成堆積で非常に粘性が強い。

Fig. 5 地図栗田遺跡標準土層図

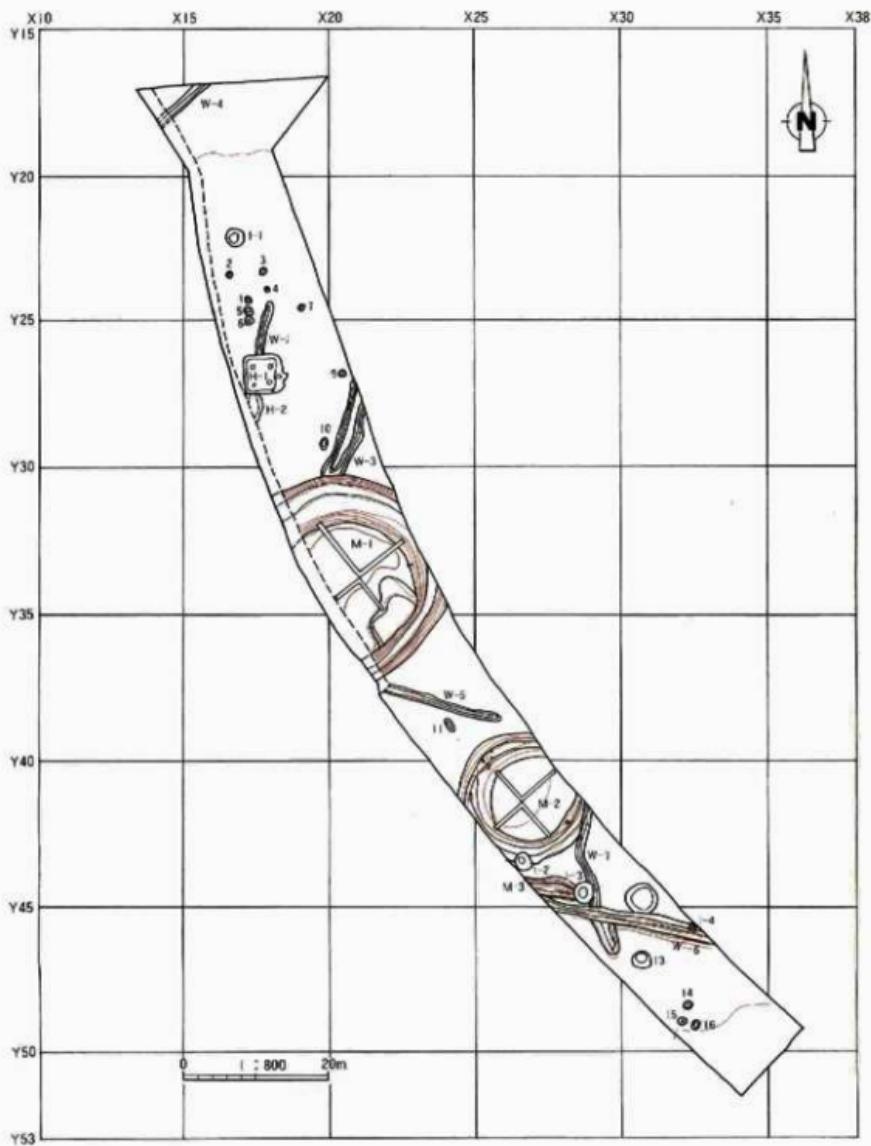


Fig. 6 A区全体図

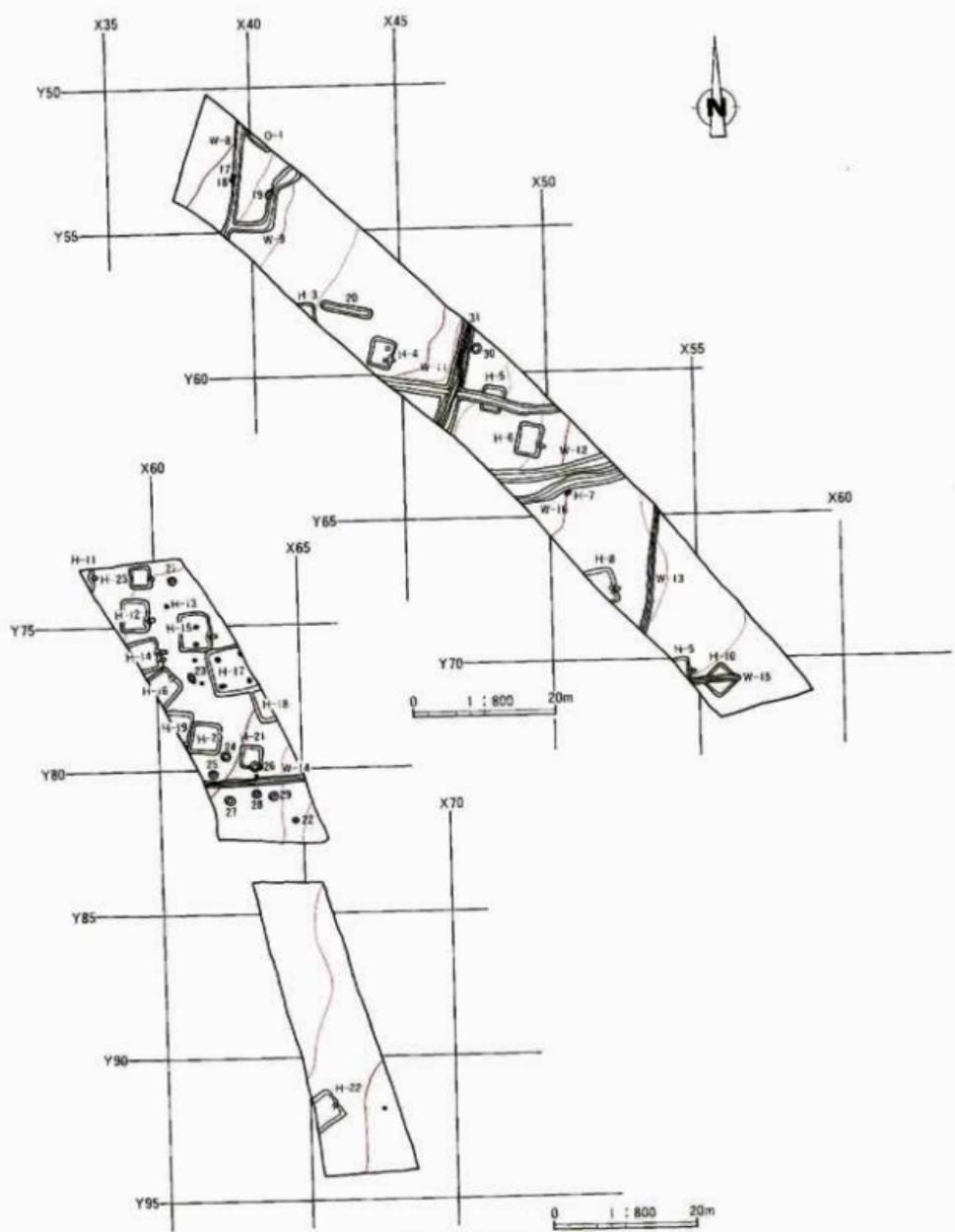


Fig. 7 B+C区全体図

V 遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は古墳3基、竪穴住居址23軒、井戸址4基、土坑30基、落ち込み1基、溝址16条である。これらの遺構は、ほとんどが表土下0.7~1mの基本層序の第IV層を掘りこむ形で容易に検出できた。3基の円墳のうち墳丘を伴うものはM-1、M-2号墳でM-3号墳は周堀のみである。竪穴住居址23軒の時代別内訳は古墳時代の石川式土器を伴う住居址4軒、鬼高式土器を伴う住居址3軒、奈良・平安時代の住居址16軒である。また遺物では、M-1、M-2号墳から総計3400点あまりの埴輪片が検出されたほか、W-6号溝址を中心に約1000点あまりの陶磁器類が出土した。これらの陶磁器類はほとんどが18~19世紀前半の江戸時代のもので、器種も陶磁器をはじめ、摺鉢、焰燈、土鍋、香炉、砥石、石臼、煙管など多岐にわたっている。なお、3基の古墳については、群馬県教育委員会が平成元年度に実施した荒砥北部遺跡群発掘調査(報告書名:「下境・天神J」)で本遺跡と隣接する地田栗I遺跡から3基の古墳が検出されているが、平面図および公共座標の照合などから、地田栗I遺跡1号墳は本遺跡のM-3号墳と、地田栗I遺跡2号墳はM-1号墳とそれぞれ接続する同一の古墳である可能性が高い。

1 古 墳

M-1号墳 (Fig. 8, P.L. 2)

◎位置 X18~24、Y30~37グリッド 標高113.0m ◎墳丘 墳丘長東西(13.6m)、南北17.9m。周堀を含めた総長東西(14.4m)m、南北23.60mの円墳と考えられる。全体に擾乱が著しいが南東部が窪んでおり、前庭部分と思われる。◎主体部 摭乱がひどく規模、形状とも不明。
◎遺物 総数は3500点を超えるが、うち90パーセント以上が埴輪が占める。図示できたものは朝顔型埴輪(埴輪No 1・2)、円筒埴輪(埴輪No 3~10)、須恵器壺(1)、須恵器壺蓋(2)、須恵器高壺(3)、須恵器壺(4)があるが、同時期の遺物は埴輪以外は皆無で流れ込みの可能性が高い。
◎備考 地田栗I遺跡2号墳と周堀が接続する。

M-2号墳 (Fig. 9, P.L. 3)

◎位置 X24~28、Y39~43グリッド 標高 112.4m ◎墳丘 墳丘長東西(11.90m)、南北12.10m。総長東西(12.98m)、南北18.16mの円墳と考えられる。◎主体部 摭乱がひどく規模、形状とも不明。
◎遺物 総数は埴輪を中心に327点を数えるが、図示できた遺物は円筒埴輪(埴輪No 11~16)6点である。

M-3号墳 (Fig. 10, P.L. 3)

◎位置 X27~30、Y44~46グリッド ◎備考 周堀の一部のみ調査。墳丘、主体部とも調査区外のため規模・形状とも不明であるが、隣接する地田栗I遺跡1号墳と周堀が接続する。また、

本遺構は近世陶磁器類が大量に検出されたW-6号溝址およびI-3号井戸址と重複するためか、埴輪類の出土は皆無だった。

2 住居址

H-1号住居址 (Fig. 10・11, PL. 1)

◎位置 X17・18、Y26・27グリッド ◎面積 24.8m² ◎方位 N-86°-E ◎形状 東西5.12m、南北5.22mのほぼ正方形を呈する。東壁のやや南よりに竈を有する。◎床面 ほぼ、平坦な床面をもち、竈を中心に堅織面が検出された。壁高は49.3cmを測る。周溝は竈部分を除き全周する。◎竈 全長181cm、全幅98cm、焚口部幅57cmを測り、燃焼部はほぼ壁面ラインにあったと思われる。◎重複 H-2→本遺構→W-1の順で重複する。◎遺物 遺物総数は2155点を数えるが、小破片が多くを占め、図示できたものは土師器壺(5・9)、土師器台付壺(6)、須恵器碗(7)、須恵器壺(8)の5点である。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-2号住居址 (Fig. 11, PL. 1)

◎位置 X17・18、Y28・29グリッド ◎面積 (5.0)m² ◎方位 N-63°-E ◎形状 西側部分が調査区外に延びるため、完掘はできなかったが、東西(1.78)m、南北(3.62)mのやや崩れた方形プランを呈する。壁高は39.7cmを測る。◎床面 よく踏み固められた平坦な床面が広がっており、竈付近は焼土面が見られる。◎竈 全長98cm、全幅109cm、焚口部幅29cmを測る。燃焼部はほぼ壁面ラインに設置されていたと思われる。◎重複 H-1と重複し、本遺構が先行する。◎遺物 出土総数は582点で、うち図示できたものは須恵器高台皿(10)、須恵器高台碗(11・13)、須恵器高台碗(12)、須恵器碗(14)、土師器壺(15・16)の7点である。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-3号住居址 (Fig. 12)

◎位置 X41、Y57・58グリッド ◎面積 (2.5)m² ◎方位 N-89°-E ◎形状 中心部が調査区外に延びるため完掘はできなかったが、東西(2.06)m、南北2.04mの方形プランを呈するものと思われる。壁高は12.8cmを測る。◎床面 よく踏み固められたやや凹凸ぎみの床面が広がっている。◎遺物 総数は10点で、図示できたものは須恵器高台碗(17)の1点のみである。◎備考 出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-4号住居址 (Fig. 12, PL. 4)

◎位置 X43・44、Y58・59グリッド ◎面積 12.3m² ◎方位 N-20°-E ◎形状 東西3.38m、南北3.84mのほぼ正方形。壁高は30.2cmを測る。◎床面 やや凹凸ぎみのよく踏み固められた床面が全面に広がっており、2本の柱穴は中心線よりやや東側に偏在する。また周溝はほ

ば全周する。◎竈 全長87cm、全幅93cm、焚口部幅25cmを測り、燃焼部は壁外に設置されている。◎遺物 総数は153点を数えるが、図示できたものは須恵器高台椀(18)の1点のみである。◎備考 出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-5号住居址 (Fig. 13)

◎位置 X47・48、Y60・61グリッド ◎面積 9.6m² ◎方位 N-76°-E ◎形状 東西2.94m、南北3.44mの方形。壁高は8.2cmを測る。◎床面 部分的に堅緻面が存在する。◎重複 近世の溝址W-10と重複。◎遺物 総数は102点を数えるが、流れ込みが多く図示できたものは床面上より検出された縁釉高台椀(19)の1点のみである。◎備考 竈施設は重複するW-10号溝址に切られているためか、検出できなかった。出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-6号住居址 (Fig. 13, P.L. 4)

◎位置 X48・49、Y61~63グリッド ◎面積 14.3m² ◎方位 N-10°-E ◎形状 東西2.94m、南北4.66m。壁高は41.9cmを測る。◎床面 よく踏み固められたやや凹凸ぎみの床面が広がっている。周溝は竈部分を除き全周する。2個のピット(P₁・P₂)を検出したがいずれも柱穴とは断定できなかった。◎竈 全長218cm、全幅50cm、焚口部幅80cmを測り、燃焼部は壁外に設置されている。◎遺物 総数は142点を数えるが、埋土の小破片が多く復元に至る遺物はなかった。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-7号住居址 (Fig. 14)

◎位置 X50、Y64グリッド ◎方位 N-89°-E ◎形状 竈のみ検出。住居址の東壁に付設された竈と推定できるが、遺存状態は極めて悪い。全長76cm、全幅44cm、深さ7.5cmを測る。

H-8号住居址 (Fig. 14, P.L. 4)

◎位置 X51・52、Y66・67グリッド ◎面積 (16.9)m² ◎方位 N-69°-E ◎形状 東西(3.06)m、南北5.06mのほぼ方形。壁高は55cmを測る。◎床面 よく踏み固められたやや凹凸ぎみの床面が広がっている。◎竈 全長98cm、全幅133cm、焚口部幅27cmを測る。燃焼部は東壁ライン上に位置している。遺存状況が良好である。◎遺物 総数は361点を数え、図示できた遺物は土師器長胴甕(20・21・23・24)、土師器甕(22)の5点である。竈周辺からの出土が多い。◎備考 出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-9号住居址 (Fig. 15, P.L. 5)

◎位置 X54、Y69・70グリッド ◎面積 (4.1)m² ◎方位 N-79°-E ◎形状 一部調査区外のため未確定ではあるが東西(2.24)m、南北(3.16)mのほぼ方形プランを呈する。壁高は

26.7cmを測る。◎床面 宛を中心に、よく踏み固められた平坦な床面が検出された。◎竈 全長94cm、全幅78cm、焚口部幅18cmを測り、燃焼部は壁外に出ている。◎遺物 総数は土師器、須恵器の小破片6点のみであり、復元には至らなかった。◎備考 出土遺物、住居の形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-10号住居址 (Fig. 15)

◎位置 X55・56、Y70・71グリッド ◎面積 12.1m² ◎方位 N-40°-E ◎形状 東西3.78m、南北3.60mのほぼ正方形のプランを呈する。壁高は15.4cmを測る。◎床面 よく踏み固められたやや凹凸ぎみの床面が広がっている。◎重複 近世溝跡W-15と重複し、竈は検出できなかった。◎遺物 総数は137点を数えるが、埋土遺物や流れ込みのものが多い。図示できた遺物は瓦塔(25)、カワラケ(26)の2点である。◎備考 出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-11号住居址 (Fig. 16, P.L. 5)

◎位置 X57、Y73グリッド ◎面積 (3.8)m² ◎方位 N-90°-E ◎形状 東西(2.16)m、南北(2.76)mの方形。壁高は25.1cmを測る。◎床面 田神沢川の氾濫原に位置するため、基本層序には見られない粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。◎竈 全長112cm、全幅39cm、焚口部幅24cmで、燃焼部は東壁ライン上に位置している。◎遺物 遺物総数は116点を数え、図示できたものは須恵器壺(27)、須恵器甕(28・29・30)の4点である。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。なお須恵器壺(27)は貯蔵穴からの出土である。

H-12号住居址 (Fig. 16・17, P.L. 5)

◎位置 X58・59、Y74・75グリッド ◎面積 17.7m² ◎方位 N-90°-E ◎形状 東西4.08m、南北4.74mの正方形。壁高は43.6cm。◎床面 H-11号住居址と同様粘性の強い極暗赤褐色のシルト層を掘り込み床面を形成している。◎竈 全長118cm、全幅112cm、焚口部幅は19.5cmを測る。燃焼部は東壁ライン上に設置されている。◎遺物 総数は164点であるが、小破片が多く図示できたものは土師器壺(31)、須恵器壺(32)の2点である。◎備考 出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-13号住居址 (Fig. 17)

◎位置 X60、Y75グリッド ◎方位 N-48°-W ◎形状 本遺構は竈のみの検出である。◎竈 全長154cm、全幅50cm、深さ38cmを測る。

H-14号住居址 (Fig. 17・18, P.L. 6)

◎位置 X58~60、Y75・76グリッド ◎面積 (14.4)m² ◎方位 N-71°-W ◎形状 一部調査区外に延びるが、東西(3.92)m、南北4.58mの方形。壁高は27.6cm。◎床面 粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。やや凹凸の目立つ床面である。◎竈 2つの竈を有する。全長174cm、全幅61cm、焚口部幅30cm(No 1)、全長143cm、全幅71cm、焚口部幅31cm(No 2)。いずれも壁外に燃焼部を持ち、煙道部分には土師器壺を利用してある。新旧関係は不明。◎遺物 遺物総数は2372点を数え、図示できたものは土師器高台壺(33)、土師器壺(34・35・36・37)の5点である。(34)は竈No 2の、(36)は竈No 1の煙道部分に利用されていた。◎備考 出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-15号住居址 (Fig. 18・19、P.L. 6)

◎位置 X60・61、Y74・75グリッド ◎面積 23.3m² ◎方位 N-89°-E ◎形状 東西4.72m、南北5.46mの長方形。壁高は51.4cm。◎床面 粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。住居址中央のほぼ南北ライン上に2基の柱穴を持つ。◎竈 全長133cm、全幅123cm、焚口部幅35cmで、燃焼部は東壁ラインに設置されている。◎遺物 遺物総数4689点で、図示できたものは土師器壺(38)、須恵器壺蓋(39)、須恵器壺(40・41・42・43・44・45)の8点である。◎備考 出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-16号住居址 (Fig. 20、P.L. 6・7)

◎位置 X59・60、Y76・77グリッド ◎面積 (14.8)m² ◎方位 N-42°-E ◎形状 東西4.72m、南北(4.22m)の長方形。壁高は36.1cm。◎床面 粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。竈を中心に堅緻面が広がっている。やや凹凸が目立つ。◎竈 全長100cm、全幅82cm、焚口部幅54cmで両袖が張り出し燃焼部は、壁内にある。竈支柱として土師器高壺(51)を倒立して利用している。◎貯蔵穴 長軸70cm、短軸54cm、深さ46cmを測る。◎遺物 総数は288点で、図示できた遺物は土師器壺(46・47・49・50)、土師器小鉢(48)、土師器高壺(51)土師器壺(52・53・54・55・56)の11点である。なお(48)(52)(53)は貯蔵穴内の出土である。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構は鬼高@式土器を伴う6世紀前半の住居址と考えられる。

H-17号住居址 (Fig. 21、P.L. 7)

◎位置 X61~63、Y75~77グリッド ◎面積 (35.0)m² ◎方位 N-76°-E ◎形状 東西(6.92)m、南北7.16mの正方形。壁高は27.1cmを測る。◎床面 粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。竈を中心に堅緻面が広がっている。やや凹凸が目立つ。◎炉址 2個検出。長径87cm、短径58cm、深さ12cm(F₁)、長径44cm、短径36cm、深さ6cm(F₂)でいずれも地床炉。◎貯蔵穴 長軸70cm、短軸62cm、深さ51cmを測る。◎重複 本遺構→H-18号住居址の順に構築。◎遺物 総数は201点で、図示できたものは土師器高壺(57)、土師器小鉢

(58)、土師器壺(59)、土師器台付甕(60)、土師器小甕(61)の5点である。なお(58)は貯蔵穴内の出土である。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構は石川式土器を伴う4世紀後半の住居址と考えられる。

H-18号住居址 (Fig. 22)

◎位置 X 63・64、Y 76~78グリッド ◎面積 (8.6)m² ◎方位 N-63°-E ◎形状 中心部が調査区外に延びるが、東西(1.84)m、南北5.70mの方形プランを呈する。壁高は16.6cmを測る。◎床面 粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。特に堅緻面等は見られない。◎重複 H-17→本遺構の順で重複。◎遺物 総数は66点を数え、図示できたものは土師器甕(62)、勾玉(石器・特殊遺物：番号25)の2点である。◎備考 出土遺物から本遺構は鬼高I式土器を伴う6世紀前半の住居址と考えられる。

H-19号住居址 (Fig. 22)

◎位置 X 60・61、Y 78・79グリッド ◎面積 (10.1)m² ◎方位 N-90°-E ◎形状 一部調査区外に延びるが、東西(3.40)m、南北4.50mの方形。壁高は15.7cmを測る。◎床面 粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。特に堅緻面等は見られない。◎炉址 検出できなかった。◎貯蔵穴 長軸86cm、短軸66cm、深さ48cmを測る。◎重複 本遺構→H-20の順に構築 ◎遺物 総数は46点であるが、土師器小破片が多く、重複するH-20号住居址と接合できた遺物も含まれていた。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構は石川式土器を伴う4世紀後半の住居址と考えられる。

H-20号住居址 (Fig. 23, PL. 7)

◎位置 X 61・62、Y 78・79グリッド ◎面積 16.3m² ◎方位 N-90°-E ◎形状 東西4.28m、南北4.10mの正方形。壁高は12.3cmを測る。◎床面 粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。特に堅緻面等は見られない。◎炉址 検出できなかった。◎重複 H-19→本遺構の順に構築。◎遺物 遺物総数は88点で、図示できた遺物は土師器高壺(63)、土師器壺(64)、土師器小甕(65)、土師器台付甕(66)の4点である。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構は石川式土器を伴う4世紀後半の住居址と考えられる。

H-21号住居址 (Fig. 23)

◎位置 X 62・63、Y 79グリッド ◎面積 8.8m² ◎方位 N-3°-E ◎形状 東西3.03m、南北3.14mの正方形。壁高は3.8cmと浅い。◎床面 粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。住居址中央部に若干堅緻面が残る。◎炉址 1個検出。長径72cm、短径68cm、深さ6cmで地床炉。◎重複 D-26と重複。本遺構が先行する。◎遺物 総数は11点であるが、土師器小破片が多く、復元には至らなかった。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構

は石田川式土器を伴う4世紀後半の住居址と考えられる。

H-22号住居址 (Fig. 24, P.L. 7)

◎位置 X65・66、Y91・92グリッド ◎面積 (11.4)m² ◎方位 N-54°-E ◎形状 一部調査区外に延びるが、東西3.70m、南北4.26mのほぼ長方形。壁高は8.5cmと浅い。◎床面 旧神沢川の氾濫原に位置するため、粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。◎竈 全長68cm、全幅66cm、焚口部幅14cmを測る。燃焼部は完全に住居内にある。竈支柱として土師器高坏(68)を倒立させ利用している。◎遺物 総数は10点で、図示できたものは土師器甌(67・70)、土師器高坏(68)、土師器小甌(69)、土師器甌(71)、勾玉(石器・特殊遺物: No26)の6点である。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構は鬼高I式土器を伴う6世紀前半の住居址と考えられる。

H-23号住居址 (Fig. 24, P.L. 7)

◎位置 X58~60、Y72・73グリッド ◎面積 8.2m² ◎方位 N-80°-E ◎形状 東西2.88m、南北3.06mの長方形。壁高は22.7cmを測る。◎床面 粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成し、凹凸の目立つ繊維面がほぼ全面に広がっている。◎竈 全長76cm、全幅70cm、焚口部幅22cmを測る。燃焼部は壁外に設置されている。◎遺物 総数は143点であるが、小破片が多く図示できたものは土師器台付甌(72)の1点のみである。◎備考 出土遺物、住居形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

3 井戸址

I-1号井戸址 (Fig. 25)

◎位置 X16・17、Y22グリッド ◎形状 長軸2.26m、短軸2.16m、深さ(2.98)mの摺鉢状。◎遺物 総点数6点。図示できたものは石臼(石器・特殊遺物No47・48)、肥磁陶器(陶磁器No48・49)の4点である。◎備考 出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

I-2号井戸址 (Fig. 25)

◎位置 X26、Y43グリッド ◎形状 長軸2.08m、短軸1.64m、深さ(2.77)mの不定形。◎遺物 なし。◎重複 M-2号墳→本遺構の順で重複。◎備考 近世以降の所産と考えられる。

I-3号井戸址 (Fig. 25)

◎位置 X29、Y44グリッド ◎形状 長軸3.06m、短軸2.68m、深さ(1.92)mの摺鉢状。◎遺物 総数は13点で、図示できたものは板碑(石器・特殊遺物No23)、瀬戸美濃陶器(陶磁器No50)の2点である。◎重複 M-3号墳→本遺構→W-7号溝址の順で重複する。◎備考 出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

I - 4号井戸址 (Fig. 25)

◎位置 X33、Y45グリッド ◎形状 長軸0.76m、短軸0.62m、深さ(1.92)mの円筒状。◎重複 W-6と重複。新旧関係は断定できない。◎遺物 総数6点でいずれも陶磁器の破片であり、図示するに至らなかった。◎備考 出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

4 落込み

0-1号落込み (Fig. 25)

◎位置 X39・40、Y51・52グリッド ◎形状 ほとんど調査区外に延びるが、東西(0.64)m、南北(2.7)m、面積(2.1)m²の隅丸方形。◎遺物 なし。◎備考 床面に当たる部分まで、なだらかに掘り込んでおり、住居址とは断定できなかった。

5 土坑

本遺跡から検出された土坑は総数30基である。D-8号土坑は欠番。

土坑名	Fig.	位置(グリッド)	形状等(長径×短径×深さ)cm	直 覆	備 考
D-1号土坑	26	X17, Y24	138×94×31 横 円 形	-	土瓶器、陶磁器の破片6点が出土。
D-2号土坑	26	X16, Y23	74×58×36 横 円 形	-	土瓶器、陶磁器の破片5点が出土。
D-3号土坑	26	X17・18, Y23	92×62×22 横 円 形	-	土瓶器の破片3点が出土。
D-4号土坑	26	X16, Y24	51×46×28 円 形	-	遺物なし。
D-5号土坑	26	X17, Y24	96×78×10 円 形	-	土瓶器の破片3点が出土。
D-6号土坑	26	X17, Y25	102×94×31 円 形	-	遺物なし。
D-7号土坑	26	X15, Y24	71×62×24 円 形	-	遺物なし。
D-8号土坑	26	X20, Y26・27	86×68×43 横 円 形	-	土瓶器、陶磁器の破片10点が出土。
D-10号土坑	26	X20, Y29	124×86×22 横 円 形	-	土瓶器、陶磁器の破片7点が出土。
D-11号土坑	26	X24, Y38・39	186×90×31 角丸扇形	-	遺物なし。
D-12号土坑	26	X31・32, Y44・45	416×388×32 円 形	W-6が後継	土瓶器、陶磁器の破片など半手袋1袋が出土。遺物は須磨郡高台院などを 表す・平安時代の特徴を示している。
D-13号地下式 土坑	27	X31, Y46・47	272×234×217 横 円 形	-	内部は壁面を北東方面に2m近く張り込み、ドーム状の空間を形成して いる。床面は断面を横円形を呈し、やや凸凹が目立つ。遺物数24点では、ほ んどのが陶磁器類の破片であり、天井櫛巻高台院の埋れ込みと思われる。同 示できたものは須磨郡高台院(陶磁器No5)、滑石(石器・特殊遺物No13)の2点 である。
D-14号土坑	27	X33, Y48	102×92×12 円 形	-	理層(石器・特殊遺物No29)1点の出土があった。
D-15号土坑	27	X32・33, Y48・49	104×98×41 不整 形	-	陶磁器片2点が出土。
D-16号土坑	27	X33, Y48・49	104×92×26 円 形	-	流れ込みの石版(石器・特殊遺物No 4)1点が出土。
D-17号土坑	27	X39, Y53	54×30×34 横 円 形	W-8が後行	遺物なし。
D-18号土坑	27	X39, Y53	54×39×28 横 円 形	W-8が後行	遺物なし。
D-19号土坑	27	X40, Y53	88×64×27 横 円 形	W-9が後行	遺物なし。
D-20号土坑	27	X42・43, Y57・58	690×84×28 楕 方 形	-	陶磁器片は計3点出土。
D-21号土坑	27	X60, Y73	95×87×16 円 形	-	奈良・平安時代の土師器、須磨郡の破片は計6点が出土。
D-22号土坑	28	X64, Y82	56×52×24 円 形	-	遺物なし。
D-23号土坑	28	X61, Y76	124×84×16 横 円 形	-	奈良・平安時代の土師器、須磨郡の破片は計22点が出土。
D-24号土坑	28	X62, Y79	106×102×6 円 形	-	遺物なし。
D-25号土坑	28	X62, Y80	98×90×14 円 形	-	遺物なし。
D-26号土坑	28	X63, Y79	122×112×17 円 形	EJ-216が後行	遺物なし。
D-27号土坑	28	X62, Y80・81	116×102×24 円 形	-	土師器破片2点が出土。
D-28号土坑	28	X63, Y80	116×98×16 円 形	-	土師器破片など2点が出土。
D-29号土坑	28	X63・64, Y80	106×94×26 円 形	-	土師器破片など4点が出土。
D-30号土坑	28	X47, Y59	131×114×36 円 形	-	土師器破片など7点が出土。
D-31号土坑	28	X47, Y58	132×126×52 円 形	-	遺物なし。

6 溝 址

W-1号溝址 (Fig. 29)

◎位置 X17・18、Y24～27グリッド ◎形状 総延長(13.82)m、幅78～104cm、深さ30～36cm。断面は緩やかなV字形。◎重複 H-1を切る。◎遺物 総数180点。瀬戸・美濃陶器(陶磁器No.2)、磁石(石器・特殊遺物No.16)の2点を図示。◎備考 出土遺物から平安時代以降の所産。

W-2号溝址 (Fig. 29)

◎位置 X20・21、Y27～30グリッド ◎形状 総延長(14.02)m、幅42～94cm、深さ9～16cm。断面はU字形。◎重複 W-3と合流し、M-1を切る。◎遺物 総数はW-3と合わせて284点。土師、須恵と陶磁器類が混在。図示できたものは、肥前陶器(陶磁器No.3)の1点である。

W-3号溝址 (Fig. 29)

◎位置 X19～21、Y28～32グリッド ◎形状 総延長(19.18)m、幅64～254cm、深さ12～25cm。断面はU字形。◎重複 W-2と合流し、M-1を切る。◎遺物 W-2と合わせて284点。

W-4号溝址 (Fig. 29)

◎位置 X14・15、Y17・18グリッド ◎形状 総延長(6.68)m、幅110～132cm、深さ109～115cmを測る。断面は深い逆台形。◎遺物 総数は土師破片1点のみ。

W-5号溝址

◎位置 X22～26、Y37・38グリッド ◎形状 総延長は(16.54)m、幅68～134cm、深さは17～37cmを測る。断面は浅い逆台形。◎遺物 総数60点で陶磁器類が大半を占める。界・明石陶器(陶磁器No.4)が図示できた。◎備考 出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

W-6号溝址 (Fig. 29, PL. 2)

◎位置 X28～33、Y44～46グリッド ◎形状 総延長(24.98)m、幅46～202cm、深さ31～66cmを測る。断面は緩やかな逆台形。◎重複 M-3とW-7を切る。◎遺物 総数599点中、陶磁器類が大半を占める。遺物は完形に近いものが多く、出土状況から一括に投棄された可能性もある。◎備考 出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

W-7号溝址 (Fig. 29, PL. 3)

◎位置 X29・30、Y41～45グリッド ◎形状 総延長(14.36)m、幅58～102m、深さは42～59cm。断面はV字形。◎重複 M-2、M-3を切り、I-3、W-6に切られる。◎遺物 出土遺物19点全てを陶磁器類が占める。瀬戸・美濃陶器(陶磁器No.43)、肥前陶器(陶磁器No.44)、焰塔(陶磁器No.45)の3点が図示できた。◎備考 出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

W-8号溝址

◎位置 X38・39、Y51～55グリッド ◎形状 総延長(16.06)m、幅36～135cm、深さ25～34cm。断面は浅い逆台形。◎重複 W-9と合流。D-17、D-18が先行。◎遺物 土師片18点が出土。

W-9号溝址

◎位置 X39～41、Y52～55グリッド ◎形状 総延長(14.28)m、幅77～205cm、深さ10～32cm。断面は浅い逆台形。◎重複 W-8と合流。D-19が先行。◎遺物 総数24点で土師片が多い。

W-10号溝址 (Fig. 29)

◎位置 X44~48、Y60~61グリッド ◎形状 総延長(24.08)m、幅66~157cm、深さ20~58cm。
断面はU字形。◎重複 H-5を切り、W-11に切られる。◎遺物 総数107点で土師片が多い。

W-11号溝址 (Fig. 29)

◎位置 X45~47、Y58~62グリッド ◎形状 総延長(14.56)m、幅156~276cm、深さ48~102cm。
断面は壁が梢円を半分に切った形ですばり、底部で狭いU字状の溝を刻む。◎重複 W-10→本遺構→D-31の順に重複。◎遺物 総数549点で土師、須恵の破片が大半を占める。

W-12号溝址 (Fig. 29)

◎位置 X47~52、Y62~63グリッド ◎形状 総延長(15.68)m、幅148~202cm、深さ21~47cm。
断面は緩やかなV字形。◎遺物 土師、須恵の破片等97点が出土。

W-13号溝址

◎位置 X53、Y64~69グリッド ◎形状 総延長(16.42)m、幅42~76cm、深さは29~49cm。断面はU字形。◎遺物 土師片等20点が出土。

W-14号溝址 (Fig. 29)

◎位置 X61~64、Y80グリッド ◎形状 総延長(13.62)m、幅16~39cm、深さ7~23cmを測る。
断面は逆台形。◎遺物 土師片等23点が出土。

W-15号溝址 (Fig. 29)

◎位置 X54~56、Y69~71グリッド ◎形状 総延長(3.6)mで、幅58~82cm、深さ19~33cmを測る。断面はU字形。◎重複 H-9、H-10を切る。◎遺物 土師片等7点が出土。

W-16号溝址 (Fig. 29)

◎位置 X49~511、Y63~64グリッド ◎形状 総延長(9.94)m、幅66~162cm、深さ25~34cmを測る。断面はV字形。◎遺物 土師、須恵の破片等25点が出土。

7 グリッド出土遺物

縄文時代

縄文時代の遺構は検出できなかった。グリッド出土遺物も極少量で、古墳周溝や溝址などからわずかに石器類が出土したのみであった。

石 器 (Fig. 42・43, P.L. 18)

石器総点数32点の器種別内訳は石鏃5点、打製石斧4点、削器2点、磨石8点、敲石13点である。敲石や磨石は古墳時代や奈良・平安時代の住居址からの出土もあり、縄文石器を再利用したことも当然考えられる。

VI まとめ

西大室、荒砥地区においては、すでに数多くの遺跡が確認され調査が行われており、その結果しだいに周辺の歴史が解明されつつある。その中で、本遺跡は道路部分という限られた範囲の調査ではあったが、この地で生活を営んできた先人の足跡を知るうえで貴重な資料が得られた。以下、若干の所見を述べ本報告書のまとめとしたい。

◎古墳の所産時期について

本遺跡からは計3基の古墳が検出されたが、このうち、M-1号墳とM-2号墳は調査区内に墳丘部をもつ円墳であり、規模はM-1で周溝を含む全長が約24m、M-2で約18mを測る。残念ながら墳丘部分は過去の耕作による削平や破壊を受けたようで、石室などの主体部はどちらの古墳からも検出できなかった。しかし、円筒埴輪を中心とする遺物は両古墳とも墳丘部分から多数出土し、遺存状態も良好なものが多い。所産時期は両古墳とも墳丘下の地山部分にAs-C(浅間山起源:4世紀中頃)とHr-F A(榛名山起源:6世紀初頭)およびHr-F P(榛名山起源:6世紀中頃)などの火山噴出物がほぼ純層で認められることから基本的には6世紀後半の時期と思われる。また両古墳の構築順については、埴輪の大量生産と省略化を物語る簾削りによる底部調整がM-1出土円筒埴輪に多く見受けられるのに対して、M-2の円筒埴輪からはほとんど見られないことなどから、M-2→M-1の構築順序が推定できる。なお両古墳出土の円筒埴輪の詳細な分析についてはTab. 3を参照されたい。また、主体部が調査区外にあり周囲の一部のみの調査となつたM-3号墳については、県教委調査の地田栗I遺跡「1号墳」と周囲が接続することが判明し、同一の古墳と推定できる。「1号墳」では全長4.4mの両袖型横穴式石室を持つ主体部が検出されているが、埴輪類は出土していない。本遺跡M-3も同様に埴輪類の出土がなかったことと考え合わせると、M-3の所産時期は埴輪消滅後の7世紀前半代と考えられる。

◎近世陶磁器類について()内の数字はTab. 2およびPL. 8~10・17の陶磁器Noを示す。

今回の調査ではA、B区から陶磁器類を中心とした近世(江戸時代)の遺物が数多く出土し、破片も含め総数は約1000点に達した。おもな遺物は碗、皿、猪口、灯明皿、鉢、すり鉢、火鉢、香炉、土鍋、焙烙、硯、砥石、石臼等で、金属製品では古錢、煙管などがある。そのうち陶磁器は約650点に達するが、これらの生産地は磁器が肥前系、陶器が瀬戸・美濃系に大別され、他に堺・明石系陶器(36)がわずかに見受けられる。肥前系の磁器は江戸時代中期(18世紀)以降大増生産されるようになった厚手粗製の「くらわんか手」と呼ばれる碗(34)、コンニャク印判で装飾を施した碗(28~31)、見込み中央に五弁花の施文がある碗(35・51)などが中心である。瀬戸・美濃系陶器は18~19世紀初頭頃のものが大半を占め、外面を灰釉と鉄釉で掛け分けた腰錦碗(9~11・51別名「こふく茶碗」)や灰釉の地に梅文を染付けた碗(7・8)のほか御深井置絵皿(15・16)、香炉(18・19)、すり鉢など器種が多様なことも本遺跡の特色である。なお、堺・明石系すり鉢(36)は比較的硬質であるところから、それまで主流であった瀬戸・美濃系すり鉢に代わって18世紀後半以降販路を拡大していったものと思われる。

付編. 1 地田栗III遺跡の地質調査

古環境研究所

1. はじめに

地田栗III遺跡の発掘調査では、火山灰土の良好な土層断面が作成された。そこで地質調査を行い、テフラ層序に関する調査を行った。

2. 地質層序

地質層序の対象とした地点は深掘りトレンチである。ここでは、下位より風化の進んだ暗褐色粘土質ローム層(14層、層厚12cm以上)、風化した黄白色軽石層(13層、層厚28cm、軽石の最大径13mm、石質岩片の最大径4mm)、褐色ローム層(12層、層厚24cm)、赤褐色スコリア混じり褐色ローム層(11層、層厚10cm、スコリアの最大径2mm)、褐色ローム層(10層、層厚28cm)、灰褐色暗色帶(9層下部、層厚10cm)、灰色岩片混じりで顕著な暗色帶(9層上部、層厚28cm、石質岩片の最大径12mm)、灰褐色暗色帶(8層、層厚)、暗褐色ローム層(7層、層厚25cm)、黒色粗粒火山灰混じり橙色粗粒火山灰層(6'層、層厚6cm、軽石の最大径4mm)、黄褐色砂質ローム層(6層、層厚19cm)、暗褐色ローム層(5層、層厚11cm)、白色軽石混じり褐色ローム層(4層、層厚26cm)、褐色土(3層、層厚15cm)、暗褐色土(2層、層厚27cm)、表土(1層、層厚29cm)の連続が認められる(図1)。

これらの土層のうち、13層および6'層は層相から各々約4.1-4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名-八崎軽石層(Hr-HP、新井、1962、鈴木、1976、大島、1986)および約1.8-2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間-板鼻褐色軽石群(As-BP Group、新井、1962、早田、1991)のうちの1層に同定される。9層上部に含まれる灰色岩片は、その層位や岩相などから約2.8万年前に榛名火山から噴出した榛名-八崎火山灰(Hr-HA、早田、1990)に由来すると考えられる。4層中に混在する白色の軽石は、層位などから約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間-白糸軽石(As-Sr、町田・新井、1992、早田、未公表資料)または約1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間-大窟沢第1軽石(As-OP1、中沢ほか、1984、町田・新井、1992、早田、未公表資料)に由来する可能性が考えられる。なおHr-HPの上位にある11層中のスコリアの詳細については不明な点が多い。その岩相や層位などから浅間火山起源の可能性が多いと考えられるが、今後の調査を必要としている。

従来の研究ではAs-BP Groupの下位に約2.1-2.5万年前に南九州姶良カルデラから噴出した広域テフラ姶良Tn火山灰(AT、町田・新井、1976)の層位のあることが知られている。地田栗III遺跡では、土層の層相から8層あるいは7層基底付近にATの降灰層準のあら可能性が大きいと推定される。降灰層準をより明確に把握するためには、火山ガラス比分析などをを行う必要がある。

3.まとめ

地田栗III遺跡深掘トレンチの土層断面を対象に地質調査を行った結果、ローム層中に下位より
様名一八崎軽石層(Hr-HP、約4.1-4.4万年前)、給源不明の赤褐色スコリア、様名一八崎火山
灰(Hr-HP、約2.8万年前)、浅間一板鼻褐色軽石群(As-BP Group、約1.8-2.1万年前)のうちの
1層、浅間一白糸軽石(As-Sr、約1.8万年前)または浅間一大窪沢第1軽石(As-OP1、約1.7万年
前)に由来する軽石などのテフラを認めることができた。

文 献

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年、群馬大学紀要自然科学編、10、p.1-79.
町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会、1992.
中沢英俊・新井房夫・達藤邦彦(1984)浅間火山、黒斑～前掛削のテフラ層序。
日本第四紀学会講演要旨集、No.14、p.69-70.
大島 治(1986)様名火山、日本の地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」、p.222-224
早田 魁(1990)群馬県の自然と風土、群馬県史通史編、1、p.35-129.
早田 魁(1991) 浅間火山の生い立ち、佐久考古通報、no.53、p.2-7.
鈴木政男(1976) Fission Track年代測定法の人類遺跡への2、3の応用例、日本第四紀学会講演 要旨集、No.5.

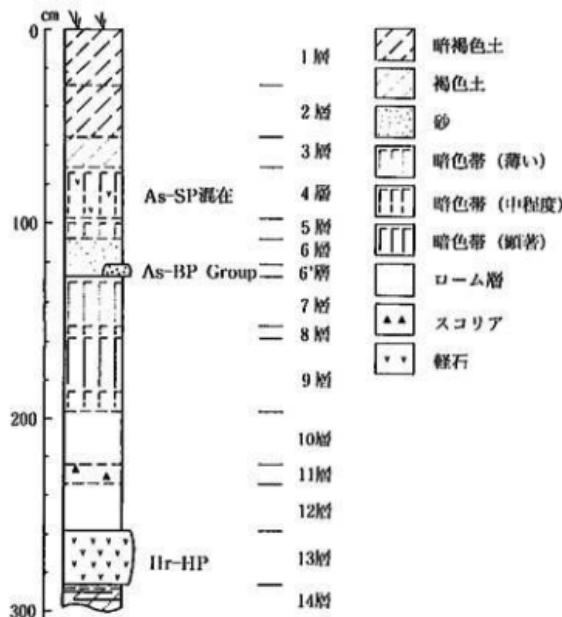


図1 地田栗III遺跡深掘トレンチの地質柱状図

Tab. 1 古墳、奈良・平安時代 土器観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径 容積	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・變形方法		備考	測定 Fig
					□ 線・網部	窓部		
1	M-1	須恵壺	- - -	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	外周斜め方向に網状で平行な切口。内面擦り剥し。			26
2	M-1	須恵環壺	- [4.2]	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	口部削り出し。天井部に網状剥離。			26
3	M-1	須恵壺	- [9.6]	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	窓状部から腹部へ緩やかに外反。窓部ナギ剥離。			26
4	M-1	須恵壺	[11.8] 3.9	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	体部下部にゆるやかな傾きを有す。右側面あ切り底。			26
5	H-1	土師壺	19.7 26.8	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	「コ」の字状口縁。窓割り。	平底。	側部上部に最大径を有す。	26
6	H-1	土師台付壺	- [10.9]	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	壓力的の剥離を呈す。窓部複合網状ナギ。		側部内面の剥離が顯著。	26
7	H-1	須恵壺	12.9 3.9	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	わざかに外反。窓部削り底。	右側面あ切り底。	全周に斜板を含む。	26
8	H-1	須恵壺	12.5 3.6	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	外側、窓部削り底。	右側面あ切り底。		26
9	H-1	土師壺	21. [22.3]	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	「コ」の字状口縁。窓割り。	丸底。	側部上部に最大径を有す。	26
10	H-2	須恵高台壺	12.6 2.3	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	口部後外反。窓部横ナギ。		四面あ切り底。高台部欠損。高台後付け。	31
11	H-2	須恵高台壺	13.4 4.2	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	体部から右縁部に外傾。	右側面あ切り底。	高台後付け。	31
12	H-2	須恵高台壺	- [3.5]	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	口部後外反。窓部横ナギ。底部のみ	右側面削り底。被破。	高台後付け。	31
13	H-2	須恵高台壺	14.4 4.9	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	窓部外反。窓部横ナギ。	右側面あ切り底。	高台後付け。	31
14	H-2	須恵壺	12.6 4.5	①地土 ②焼成 ③色調 ④リップ⑤	窓部後外反。窓部横ナギ。	右側面あ切り底。	全面に白色の粉を含む。	31
15	H-2	土師壺	12.6 3.5	①地土 ②焼成 ③色調 ④窓部充てん	外傾。窓部ナギ。	窓割り。	わずかに傾きを有す。	31
16	H-2	土師壺	12.6 4.0	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	やや中央高ぎみに立ち上がる。	窓割り。	底部内面、窓底。	31
17	H-3	須恵高台壺	13.4 6.1	①地土 ②焼成 ③色調 ④リップ⑤	側部わざかに外反。被破。	右側面欠損。	内面に「レ」の墨書き。	31
18	H-4	須恵高台壺	14.8 5.0	①地土 ②焼成 ③色調 ④窓部充てん	直線的に外傾。被破。	右側面あ切り底。	内外面に手印の墨書き。	31
19	H-5	綠釉高台壺	10.8 6.1	①地土 ②焼成 ③色調 ④窓部充てん	外縁を有す。内面では凹線を有する。		内外面とも全周黒粉。	31
20	H-8	土師壺	25.5 [31.5]	①地土 ②焼成 ③色調 ④窓部欠損	大きさく外反。窓部削り底。肩削離。		口縁部に最大径をもつ。	31
21	H-8	土師壺	- [28.0]	①地土 ②焼成 ③色調 ④窓部欠損	窓部削り底。肩削離。	底部かすかに平底。	電支柱として再利用。	32
22	H-8	土師壺	21.7 26.5	①地土 ②焼成 ③色調 ④窓部欠損	「く」の字状口縁。窓割り。	丸底。		32
23	H-8	土師壺	23.3 [29.4]	①地土 ②焼成 ③色調 ④窓部欠損	窓部外反。窓部向左削離。	右側面。	口縁部に最大径を有す。	32
24	H-8	土師壺	22.9 34.3	①地土 ②焼成 ③色調 ④リップ	外反。窓部向左削離。火焚跡の窓割り。		口縁部に最大径を有す。	32
25	H-10	瓦塔	- -	①地土 ②焼成 ③色調 ④窓部の片片	表面瓦底の状態を有す(剥片から3枚の瓦)。裏面素木部に赤色着色。			33
26	H-10	カフラケ	8.3 1.8	①中空 ②不良品 ③にい黄 ④充てん	外傾。口部削離。被破。	右側面あ切り底。	白色粘物混入。	33
27	H-11	須恵壺	12.4 3.4	①地土 ②焼成 ③色調 ④窓部充てん	外傾。口部削離。被破。	右側面あ切り底。	窓部穴から出土。	33
28	H-11	土師壺	20.9 [24.1]	①地土 ②焼成 ③色調 ④リップ⑤	「コ」の字状口縁。窓割り。	底部欠損。	厚みがない。	33
29	H-11	土師壺	19.8 [22.2]	①地土 ②焼成 ③色調 ④窓部欠損	「コ」の字状口縁。窓割り。	底部欠損。	厚みがない。	33
30	H-11	土師壺	19.6 [20.3]	①地土 ②焼成 ③色調 ④口縁～剥離	「コ」の字状口縁。窓割り。	底部欠損。	厚みがない。	33
31	H-12	土師壺	10.6 4.2	①地土 ②焼成 ③にい黄 ④窓部充てん	口部先端が直立する。	窓割り。内面ナギ。		33
32	H-12	須恵壺	[11.8] 3.8	①地土 ②不良品 ③にい黄 ④火焚	直線的に外傾。被破。	内面、網織整形。	外縁の剥離が目立つ。	33
33	H-14	土師高台壺	16.6 4.5	①地土 ②焼成 ③にい黄 ④火焚	窓部わざかに外反。	内面黑色熱斑。		34
34	H-14	土師壺	20.1 [20.3]	①地土 ②焼成 ③にい黄 ④窓部充てん	「コ」の字状口縁。窓割り。	底部欠損。No.2窓の優選先端部に利用。		34
35	H-14	土師壺	[19.0] [17.3]	①地土 ②焼成 ③色調④リップ	「コ」の字状口縁。窓割り。	底部欠損。	側部上部に最大径を有す。	34
36	H-14	土師壺	19.4 [24.2]	①地土 ②焼成 ③色調④リップ	「コ」の字状口縁。窓割り。	底部欠損。	No.1窓の優選部に利用。	34
37	H-14	土師壺	18.7 [15.0]	①地土 ②焼成 ③にい黄 ④リップ	「コ」の字状口縁。窓割り。	底部欠損。	側部上部に最大径を有す。	34
38	H-15	土師壺	12.8 3.2	①地土 ②焼成 ③リップ ④窓部充てん	外傾。肩削れ。		内外面削正形。	34
39	H-15	須恵壺	15.9 4.0	①地土 ②焼成 ③色調④リップ	肩削れや外反。天井部を中央から1/2の範囲で斜板剥離。			34
40	H-15	須恵壺	12.2 3.5	①地土 ②焼成 ③色調④リップ	外傾。窓部削離ナギ。	右側面あ切り底。	全体に剥離が目立つ。	34
41	H-15	須恵壺	13.3 4.0	①地土 ②焼成 ③色調④リップ	外傾。窓部削離ナギ。	右側面あ切り底。		35
42	H-15	須恵壺	12.3 3.7	①地土 ②焼成 ③色調④リップ	外傾。窓部削離ナギ。	右側面あ切り底。		35
43	H-15	須恵壺	13.1 2.9	①地土 ②焼成 ③色調④リップ	外傾。窓部削離ナギ。	右側面あ切り底。		35
44	H-15	須恵壺	12.9 3.5	①地土 ②焼成 ③色調④窓部充てん	外傾。窓部削離ナギ。ハメ後ナギ。右側面あ切り底。			35
45	H-15	須恵壺	12.6 3.3	①地土 ②焼成 ③色調④リップ	外傾。窓部削離ナギ。			35
46	H-16	土師壺	16.0 29.0	①地土 ②焼成 ③にい黄 ④窓部充てん	「く」の字状口縁。窓割り。ハメ後ナギ。剖離中心に最大径を有す。丸削離。			35
47	H-16	土師壺	16.5 27.8	①地土 ②焼成 ③にい黄 ④窓部充てん	「く」の字状口縁。ハメ後ナギ。胴部中央に最大径を有す。丸削離。			35
48	H-16	土師小鉢	9.4 6.3	①地土 ②焼成 ③リップ ④窓部充てん	全体に半球形。		深底、横ナギ。底部・体部削離削り。剖離穴中央。	36
49	H-16	土師壺	24.3 35.8	①地土 ②焼成 ③明治系窓部充てん	内面ガミ。窓割り。窓底。	窓割り。剖離中心に最大径を有す。丸削離。		36
50	H-16	土師壺	[16.6] [13.5]	①地土 ②焼成 ③にい黄 ④リップ	「く」の字状口縁。窓割り。	底部欠損。		36

番号	出土位置	種類	大きさ 口径 蔵高	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法		番号	測定 Fig
					口縁	底部		
51	H-16	土器高环	15.7 12.0	①粘土 ②良好 ③明赤褐色 ④5	环部、内面底み、环部一柱状部へケメ、以下直腹。直支柱に利用。			36
52	H-16	土器环	13.8 5.5	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	内側口縁。	削削り、荒削り。抜制法焼成。挖起穴内出土。		36
53	H-16	土器环	12.4 5.5	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	直縁口。	削削り、荒削り。抜制法焼成。挖起穴内出土。		36
54	H-16	土器环	15.5 5.5	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	外板を有する口縁。	不定方向削磨き。		36
55	H-16	土器环	14.2 6.3	①粘土 ②赤褐色 ③明赤褐色 ④5	内側口縁。横ナギ。	不定方向削磨き。		36
56	H-16	土器环	15.9 7.3	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	内側口縁。横ナギ。	不定方向削磨り。		36
57	H-17	土器高环	- [6.4]	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	直縁口ラッパ型に削く。	外表面方向削磨き。透孔 4 孔 2 段。		36
58	H-17	土器小环	[10.8] 4.1	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④2	口縁がわらかに直立。	体積縮小方向削磨。直立状焼成。挖起穴内出土。		36
59	H-17	土器壁	15.5 23.0	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	底部から側縁削毛口縁ナギ。内側口縁部～底盤にかけて横方向削毛口。			37
60	H-17	土器台付壁	[17.6] [11.5]	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	S字状口縁。側縁～側縁削毛口。			37
61	H-17	土器小要	[15.8] [14.4]	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	外表面毛化口。	表面欠陥。		37
62	H-18	土器底	- [23.2]	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	側縁方向削磨り。	把手がつく。		37
63	H-20	土器高环	11.5 [9.0]	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	外縁は削磨ぎみに立ち上がり、内外面削磨。横削、縱方向削磨。			37
64	H-20	土器底	- [8.4]	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	削毛下端から底部にかけて横方向削毛口。	外表面削磨。		37
65	H-20	土器小要	[12.2] 11.4	①粘土 ②不良赤褐色 ③2	脱外輪、刷毛、荒削り。	底部平底。		38
66	H-20	土器台付壁	- [16.0]	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	外表面方向削毛口。			38
67	H-22	土器底	21.8 26.8	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	口縁に通し口縁の縁をアマと削りで整形。			38
68	H-22	土器高环	17.4 12.3	①粘土 ②良好 ③明赤褐色 ④5	内側口縁。耳部に沈線。斜削、縱方向削磨り。抜制法焼成。直支柱に利用。			38
69	H-22	土器小要	[12.8] 12.1	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	外縁、削削り。			38
70	H-22	土器底	[23.0] 21.7	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	粗大外輪、荒削り。	側縁上部に最大径をもつ。		38
71	H-22	土器底	16.6 28.3	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	外縁、側縁外側方向削毛口。底部附近で削毛口。内側削毛口。			39
72	H-23	土器台付壁	- [12.3]	①粘土 ②良好 ③赤褐色 ④5	外表面方向削磨り。内側横方向削削り。	底部内部ヘラダ。		39

註1. 粘土は粗粒 (0.9mm 以下)、半径 (1.0~1.9mm)、蔵高 (2.0mm 以上) とした。

2. 焼成は極度・良好・不良の 3 段階評価。

3. 色調は土器外輪の斬削し、色名は新版標準土色名 (小山・竹村 1976) によった。

4. 大きさ、重さの単位はそれそれぞれ cm と kg であり、現状値を []、復元値を () で示した。

Tab. 1-2 陶磁器類観察表

番号	出土位置	種類	大きさ 口径 蔵高	特徴	寸法		備考	写真 PL
					口縁	底部		
1	H-4	製作地不詳陶器	不詳	- [0.8]	内面灰化。外表面「ロムヌ」系認。			H-4-1 時代時代。
2	W-1	瀬戸・美濃陶器	瓶	[10.0] [5.3]	粗粒、口縁部のみフラット化。内側底部下位無釉、尾部無釉。			18C 後。
3	W-2-3	肥前陶器	舟	- [4.0]	粗粒下位。内外側面白土削毛並み、内面透明感。			不詳・古須系。
4	W-5	柳明石・御置	ナリ舟	- [4.7]	粗粒口。体部外側面へナリ削り。			18C 後~19C 初。
5	W-6	瀬戸・美濃陶器	灰 扇 瓶	6.5 3.8	高台瓶下部無釉。背面に底部以下へナリ削り。			18C 後。
6	W-6	瀬戸・美濃陶器	灰 扇 瓶	(9.0) 5.3	買入あり。腹は内溝し、高台は小さく、高台瓶以下無釉。			18C 後~19C 初。
7	W-6	瀬戸・美濃陶器	梅 文 瓶	(8.0) 5.8	高台瓶まで買入の入った灰瓶。外表面 2 個の捺壓梅花。			18C 後。
8	W-6	瀬戸・美濃陶器	梅 文 瓶	(9.0) 5.8	高台瓶まで買入の入った灰瓶。外表面 2 個の捺壓梅花。			18C 後。
9	W-6	瀬戸・美濃陶器	腰 扇 瓶	[10.0] 6.8	腹線上 2 ド所を削まる。腹は浅く、体部下方から高台内蔵物、その他の灰。			18C 後。
10	W-6	瀬戸・美濃陶器	腰 扇 瓶	[10.0] 6.3	体部外側無釉。外側口縁部下部無釉。その他の灰。			18C 中~後。
11	W-6	瀬戸・美濃陶器	腰 扇 瓶	[9.0] 5.9	体部外側無釉。外側口縁部下部無釉。その他の灰。			18C 後~19C 初。
12	W-6	瀬戸・美濃陶器	腰 扇 瓶	- [2.5]	美底部に多く認められる幾筋の鉛垂線。外表面無釉、内面無釉。			18C 後~19C 初。
13	W-6	瀬戸・美濃陶器	腰 扇 瓶	- 5.8	高台瓶以下を除き灰瓶。既存部に鉛垂線が一部残る。			18C 後~19C 初。
14	W-6	瀬戸・美濃陶器	灰 怪 瓶	[16.0] 3.9	口縁部と見込みに施釉。器軸、脚軸、脚上共に灰瓶陶器に似る。美底部も、不明原器あり。			18C 後。
15	W-6	瀬戸・美濃陶器	腰 扇 瓶	[12.0] 2.9	口縁部外側から内蔵物軸、内底鉛垂線による塑壓痕。腰深井。内面底部 3 ヵ所。			18C。
16	W-6	瀬戸・美濃陶器	腰 扇 瓶	- [1.4]	内面灰化。内底鉛垂線による塑壓痕。腰深井。			18C。
17	W-6	瀬戸・美濃陶器	灯 明 罐	[11.0] 2.9	納鉢を施した後、還返外側の輪を拭う。			18C 後~19C 初。
18	W-6	瀬戸・美濃陶器	香 甕	[9.0] 4.0	輪高台の小香甕。口縁部内蔵から体部外側まで灰瓶。			18C 中。
19	W-6	瀬戸・美濃陶器	香 甕	[6.0] 4.0	輪高台の小香甕。口縁部内蔵から体部外側まで灰瓶。			18C 後~19C 初。
20	W-6	瀬戸・美濃陶器	盖	7.7 2.9	高底部のみ買入の入った灰瓶。			不詳 18C 後~19C 初。

番号	出土位置	種別	器種	大きさ 口径×深さ	特徴	参考	写真 P.L.
							18C後～19C前。17
21	W-6	越戸・美濃陶器	施 料	- [7.9]	外輪輪、体部上位ウラマツ輪。		
22	W-6	越戸・美濃陶器	三耳 罐	(12.0) [16.1]	口内面から外輪輪、底部周辺丸く肥厚。	18C。	8
23	W-6	越戸・美濃陶器	すり 瓢	- [6.0]	全面輪輪、底部外輪輪を試しない。外輪輪下端から底部にかけて目模様3ヶ所。	18C後。	17
24	W-6	肥前 陶 器	瓶	- [2.5]	呑手側。	17C末～18C初。	8
25	W-6	肥前 陶 器	施付茶碗	(6.9)	買込み、外輪輪状の文様。見込み簡略化した五角花。	18C後～19C初。	8
26	W-6	肥前 陶 器	施付茶碗	-	外輪輪状の文様。見込みや簡略化した昆虫文。	18C後～19C初。	8
27	W-6	肥前 陶 器	施付茶碗	(8.0)	31.3に比べ質感の質色良し。高台部と底の側縁は2条。外輪輪に輪郭文。	18C後～19C初。	8
28	W-6	肥前 陶 器	施付 瓶	-	内輪輪口縁端部に輪郭。外輪は鳥と波模様の文様をコンニャク印判で施し、後者のみ買込みを入れる。窓内尚品。波紋見系。	18C中～後。	8
29	W-6	肥前 陶 器	施付 瓶	(9.2)	内輪輪口縁端部に輪郭。外輪は鳥と波模様の文様をコンニャク印判で施し、後者のみ買込みを入れる。窓内尚品。波紋見系。	18C中～後。	9
30	W-6	肥前 陶 器	施付 瓶	(9.7)	外輪にコンニャク印判による鳥と草による折枝文を交互に施す。波紋見系。	18C中～後。	9
31	W-6	肥前 陶 器	施付 瓶	(12.2)	内輪輪は口縁端部と底部に輪郭。外輪茎葉文と円文中にコンニャク印判による鳥文。波紋見系。	17C末～18C中。	9
32	W-6	肥前 陶 器	施付 瓶	(9.3)	外輪に華麗な側模の文様。波紋見系。	18C中～後。	9
33	W-6	肥前 陶 器	施付 瓶	(8.4)	外輪に華麗な井形と土文。波紋見系。	18C中～後。	9
34	W-6	肥前 陶 器	施付 瓶	(10.5)	外輪輪輪輪文。窓内内縁明瞭。波紋見系。	17C末～18C中。	9
35	W-6	肥前 陶 器	施付 瓶	(14.2)	内輪花唐草文。側縁の口輪郭が、見込み五角花コンニャク印判。波紋見系。	18C中～後。	9
36	W-6	碧玉 瓷 盆	すり 鉢	(34.2) [8.1]	口縁部内縁部に波紋。外輪輪下端部下へラブリ。	18C末～19C初。	17
37	W-6	在 地	かわらけ	(8.1)	浅舟型(18T404)ロクロを使用しない。口縁部から内底コナデ。	江戸時代。	9
38	W-6	在 地	堀 坂	-	口縁部外方に輪郭。器壁厚い。耳の跡と取り付けは複数。	江戸時代。	9
39	W-6	在 地	鍋	(38.2) [13.1]	身を厚する。器高約19cm。外輪輪に厚唇。	江戸時代。	10
40	W-6	在 地	火 鍋	29.3	浅舟型(18T404)。体部へ口縁部内縁。口縁部外縁に押振しの菊花文1つ残存。貼り付け高台に一対の円形透し。外輪輪は鋭い比摩。	江戸時代。	10
41	W-6	在 地	甕	27.2	[21.5] 平成時代の新規窯に似た器形。体部外縁浅い比摩。胎土色調はSTに似る。	江戸時代。	10
42	W-6	不詳	-	[5.3]	[5.3] ぶい 俗名YR7/4。ロクロ左回転。外底未切り無調動。口縁部欠損。外輪器表剥離。底部中央と体部下位4カ所後成後に穿孔。体部下位の上方のみ買通している。	時期不明。	9
43	W-7	越戸・美濃陶器	菊 瓶	- [1.9]	輪郭輪郭。高台部以下輪郭。	17C。	17
44	W-7	肥前 陶 器	青緑釉皿	- [2.8]	見込み底の口輪郭が、内之山窓。	17C後～18C初。	17
45	W-7	在 地	焼 皿	(37.0)	口縁部わずかに内窓。体部外縁付着。	江戸時代。	9
46	W-9	在 地	手 烧 皿	- [6.3]	表面黑色。胎土浅黄緑。体部外縁には押振しの文様。	江戸時代。	17
47	W-10	肥前 陶 器	青 瓶	(33.0) [4.2]	三足脚。輪郭輪郭上に刷毛色で白土を撒く。青洋系。	17C末～18C初。	17
48	I-1	肥前 陶 器	青 瓶	(8.0) [4.6]	口縁へ口縁部下段片。	18C後～19C初。	17
49	I-1	肥前 陶 器	青 瓶	(9.2) [4.9]	外輪輪文。	18C。	9
50	I-3	越戸・美濃陶器	灰 釉 瓶	(12.0)	8.1 伏輪。高台輪郭。	18C前～中。	9
51	D-13	肥前 陶 器	青 瓶	(7.0)	見込み底な五角花。	18C後～19C初。	9
52	X16Y19	製作所 不詳	おろし 盆	-	1.5 内輪輪高周の鉄輪。胎土は青で灰青色。	19C。	17
53	X27Y34	越戸・美濃陶器	片 口 瓶	(16.6)	高台輪以下を垂き底物。内底口直径3.5cm。	19C前～中。	9
54	X29Y44	在 地	焼 皿	(36.0)	5.1 体部輪郭的外縁。外縁理付着。	江戸時代。	9
55	X32Y46	越戸・美濃陶器	灰 釉 瓶	(14.0)	2.9 削り出し高台。全輪輪郭。底部内外面各3ヶ所。	17C。	9
56	A区埋土	越戸・美濃陶器	青 瓶	-	高台輪以下を垂き底物。口縁部に削痕。	17C。	17
57	A区埋土	越戸・美濃陶器	灯 明 瓶	(9.0)	2.1 菊輪。底部外縁輪を払い取る。見込み底ね底。	18C後～19C初。	9
58	A区埋土	肥前 陶 器	小 丸 瓶	-	5.4 平茎文。	18C後～19C初。	9
59	B区埋土	越戸・美濃陶器	接 端 瓶	(9.0)	5.3 高台輪小さく基盤低い。	19C末。	10

注)表の記載で大きさの単位はcmで、軽量は()、現存は〔 〕で示した。

Tab. 3 塗 輪 説 明 表

No	形態	法 量 (cm)	実 俗		透 孔		地 土 焼 成 色 調	ハ ク メ タ ム	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考 (注上古店)
			形狀	形狀	透 孔 テ ク ス ト ロ フ	透 孔			成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
1	高[12.1] 口33.8 底 -	-	① -	-	-	- × -	粘 C	10	約1/3成形し頭部製作→上部焼成→頭部焼成→尖頂付。 外 下半部擬似ナダ→上半部斜めハケ→口縁部焼成ナダ。 内 下半部ナダ+全体弱めハケ+頭ハケ→口縁部焼成ナダ。	1/3残る。尖頂削除 (M-1)
		-	② -	-	-	-	燒 良好	11	約1/3成形し頭部製作→上部焼成→頭部焼成→尖頂付。 外 下半部擬似ナダ→上半部斜めハケ→口縁部焼成ナダ。 内 下半部ナダ+全体弱めハケ+頭ハケ→口縁部焼成ナダ。	1/2残る。尖頂削除 (M-1)
		-	③ -	-	-	-	色 電			
2	高[14.0] 口30.5 底 -	-	① -	-	-	- × -	粘 B	10	約1/3成形し頭部製作→上部焼成→頭部焼成→尖頂付。 外 下半部擬似ナダ→上半部斜めハケ→口縁部焼成ナダ。 内 下半部ナダ+全体弱めハケ+頭ハケ→口縁部焼成ナダ。	1/2残る。尖頂削除 (M-1)
		-	② -	-	-	-	燒 良好	11	約1/3成形し頭部製作→上部焼成→頭部焼成→尖頂付。 外 下半部擬似ナダ→上半部斜めハケ→口縁部焼成ナダ。 内 下半部ナダ+全体弱めハケ+頭ハケ→口縁部焼成ナダ。	1/2残る。尖頂削除 (M-1)
		-	③ -	-	-	-	色 電			
3	高[22.7] 口17.2 底 -	A ① -	-	円筒形	(5.0) × (5.0)	-	粘 A	4	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。 内 弱い指ナダ+口縁部焼成ナダ。粘土組合焼成。	基底部の一部→側部 片割り→口縁部焼成。 底部削除(M-1)
		B ② -	-	-	-	-	燒 良好	5	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。	充てん、追加調整。
		C ③ -	-	-	-	-	色 電	6	内 弱い指ナダ+口縁部焼成ナダ。粘土組合焼成。	充てん、追加調整。
4	高 32.6 口 36.3 底 8.3	A ① 12.0	円筒形	-	5.1 × 6.3	-	粘 A	3	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。 内 通孔中央まで擬似ナダ+通孔から上部焼成ナダ。基底部下 端に横ケズリ。上部焼成部陥入。通孔位置に断層な接合部。	充てん、追加調整。
		B ② 12.7	円 形	-	-	-	燒 良好	4	内 通孔中央まで擬似ナダ+通孔から上部焼成ナダ。基底部下 端に横ケズリ。上部焼成部陥入。通孔位置に断層な接合部。	(M-1)
		C ③ 7.5	-	-	-	-	色 電	5	内 通孔中央まで擬似ナダ+通孔から上部焼成ナダ。基底部下 端に横ケズリ。上部焼成部陥入。通孔位置に断層な接合部。	(M-1)
5	高[29.0] 口 21.6 底 -	B ① -	-	円 形	-	6.7 × 7.6	粘 A	10	外 縫ハケ→尖頂付。	基底部下平欠損(M-1)
		B ② 11.2	-	-	-	-	燒 良好	11	内 縫ハケ→上部焼成部ハケ→口縁部焼成ナダ(外側まで 及ばない)。	基底部上平欠損(M-1)
		C ③ 10.5	-	-	-	-	色 明赤	12	内 通孔中央まで擬似ナダ+通孔から上部焼成ナダ。基底部下 端に横ケズリ。	基底部上平欠損(M-1)
6	高 29.4 口 17.3 底 8.6	A ① 9.6	円 形	(6.1) × (6.3)	-	-	粘 A	3	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。	基底部上平→口縁部 片割れ存。底部削除 (M-1)
		B ② 13.1	-	-	-	-	燒 良好	4	内 縫ハケ→口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。口縁部焼成ナダ。	
		C ③ 6.7	-	-	-	-	色 電	5	内 ナダ+口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。口縁部焼成ナダ。	
7	高 30.6 口 18.3 底 8.2	A ① 10.1	円筒形	-	7.2 × 6.5	-	粘 A	3	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。 内 縫部ナダ+通孔上端から一部縫ハケ後弱い横ヘラナダ+ 口縁部焼成ナダ。基底部下端焼成ケズリ。	一部欠損。底部削除 (M-1)
		B ② 12.2	円 形	-	-	-	燒 良好	4	内 縫部ナダ+通孔上端から一部縫ハケ後弱い横ヘラナダ+ 口縁部焼成ナダ。基底部下端焼成ケズリ。	
		C ③ 8.3	-	-	-	-	色 電	5	内 縫部ナダ+通孔上端から一部縫ハケ後弱い横ヘラナダ+ 口縁部焼成ナダ。基底部下端焼成ケズリ。	
8	高 29.9 口 18.0 底 8.4	A ① 12.1	円 形	(5.8) × (5.7)	-	-	粘 A	3	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。 内 ナダ+基底部下端焼成ケズリ。口縁部焼成ナダ。	基底部上口縁部1/2 欠損。底部削除。 (M-1)
		B ② 10.6	-	-	-	-	燒 良好	4	内 縫部ナダ+通孔上端から一部縫ハケ後弱い横ヘラナダ+ 口縁部焼成ナダ。基底部下端焼成ケズリ。	
		C ③ 7.2	-	-	-	-	色 電	5	内 縫部ナダ+通孔上端から一部縫ハケ後弱い横ヘラナダ+ 口縁部焼成ナダ。基底部下端焼成ケズリ。	
9	高 30.0 口 16.4 底 8.0	A ① 10.8	円 形	(5.6) × 5.7	-	-	粘 A	3	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。	基底部上口縁部1/2 欠損。底部削除。 (M-1)
		B ② 12.1	-	-	-	-	燒 良好	4	内 ナダ+口縁部焼成ナダ。口縁部焼成ナダ。	
		C ③ 7.1	-	-	-	-	色 電	5	内 ナダ+口縁部焼成ナダ。口縁部焼成ナダ。	
10	高 30.4 口 17.0 底 8.2	A ① 12.7	円 形	6.6 × (6.0)	-	-	粘 A	3	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。 内 ナダ+口縁部焼成ナダ。口縁部焼成ナダ。	脚部上口縁部1/3欠 損。底部削除。 (M-1)
		B ② 10.4	-	-	-	-	燒 良好	4	内 ナダ+口縁部焼成ナダ。口縁部焼成ナダ。	
		C ③ 7.3	-	-	-	-	色 電	5	内 ナダ+口縁部焼成ナダ。口縁部焼成ナダ。	
11	高 27.9 口 15.6 底 9.0	A ① 10.2	円 形	5.7 × 5.6	-	-	粘 A	3	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。	口縁部上口縁部1/3欠 損。底部削除。 (M-1)
		B ② 10.9	-	-	-	-	燒 良好	4	内 ナダ+口縁部焼成ナダ。口縁部焼成ナダ。	
		C ③ 6.8	-	-	-	-	色 電	5	内 ナダ+口縁部焼成ナダ。口縁部焼成ナダ。	
12	高 27.0 口 15.9 底 7.6	A ① 9.3	円 形	5.7 × 6.2	-	-	粘 A	3	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。	口縁部上口縁部1/2欠 損。底部削除。 (M-1)
		B ② 10.8	-	-	-	-	燒 良好	4	内 ナダ+口縁部焼成ナダ。口縁部焼成ナダ。	
		C ③ 7.3	-	-	-	-	色 明赤	5	内 ナダ+口縁部焼成ナダ。口縁部焼成ナダ。	
13	高 29.3 口 20.1 底 -	A ① -	円 形	(6.0) × 5.5	-	-	粘 B*	10	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。基底部ケズリ。	基底部下端欠損。内 面へ記号。(M-2)
		B ② 10.1	-	-	-	-	燒 良好	11	内 ナダ。	
		C ③ 8.7	-	-	-	-	色 明赤	14	内 縫ハケ+口縁部焼成ナダ。	
14	高 33.6 口 19.9 底 11.1	B ① 12.1	円 形	(6.0) × (5.3)	-	-	粘 B	9	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。	口縁部上口縁部1/2欠 損。基部重ね合わせ (M-2)
		B ② 13.0	-	-	-	-	燒 良好	10	内 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。	
		C ③ 8.5	-	-	-	-	色 電	11	内 縫ハケ+口縁部焼成ナダ。	
15	高 35.2 口 19.6 底 11.6	A ① 14.0	円 形	5.7 × (5.5)	-	-	粘 B	10	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。	脚部1/2欠損。内面へ テ記号。基部重ね合 わせ(M-2)
		B ② 10.3	-	-	-	-	燒 良好	11	内 縫ハケ+口縁部焼成ナダ。	
		C ③ 10.9	-	-	-	-	色 電	12	内 縫ハケ+口縁部焼成ナダ。	
16	高 34.1 口 19.2 底 13.1	B ① 11.0	円筒形	-	6.7 × 7.1	-	粘 B	8	外 縫ハケ→尖頂付。口縁部焼成ナダ。	基底部上口縁部1/2欠 損。
		B ② 12.6	円 形	-	-	-	燒 良好	9	内 縫ナダ→通孔まで縫ハケ→口縁部斜めハケ+縫ハケ→口縁部焼成ナダ。	
		C ③ 10.5	-	-	-	-	色 明赤	10	内 縫ナダ+口縁部焼成ナダ。	

註 1. 大きさの単位(cm)で表し、現状供試を[]、復元能を()で示した。

2. No 1~8はFig.40, No 9~16はFig.41に因示す。

埴輪観察表凡例

No.	形態	法算 (cm)	突 带		透 孔		粘土・構成 色調	ハケメ
			形狀	番号	形狀	テナ×ヨコ		
1	A	高[12.1] □ 33.8 底 -	A ① - ② - ③ -	-	- × -	-	粘 C 施 真好 色 10	10

野地 A - 朝顔形円筒埴輪

突形 B - 背通円筒埴輪

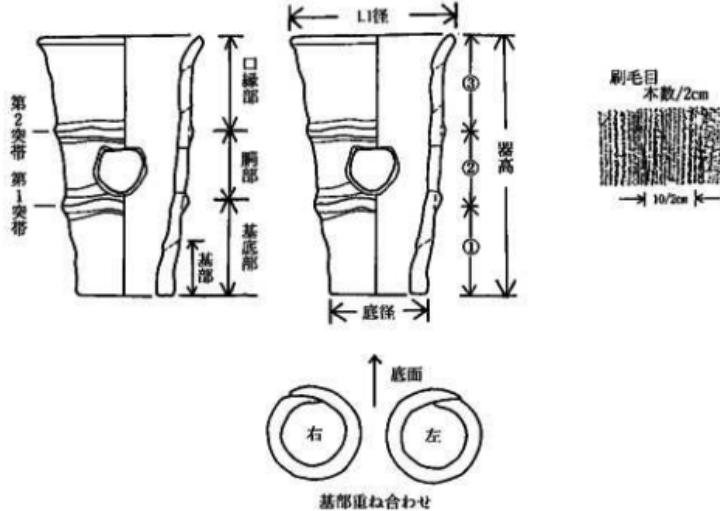
突形 C - 上縁がやや突出する断面形状M字形

B - 上縁がやや突出する断面形状

粘土 A - チャート粒・鰐石を多く含み、石英を含む。

B - チャート粒・鰐石を少く含む。 C - チャート粒・砂粒を含む。

ハケメ 2 cm間の作んだ条線(工具の本数)



付編. 2 地田栗III遺跡M-1号墳、M-2号墳の円筒埴輪観察表のまとめ

筆者に与えられた地田栗III遺跡M-1号墳、M-2号墳の円筒埴輪16個体の観察表作成の結果以下の事項が認められた。

M-1号墳 円筒埴輪は次のように大別することができる。

① a. №3、4、6、7、8、9、10

b. №11、12

c. 写真I、II

② №5

③ №1

④No.2

①類はM-1号墳出土埴輪の大多数を占める資料で、非常に規格性が強い埴輪である。器高もほぼ同一であり、基底部長に対して胴部長が同等あるいはやや長く、口縁部長がそれらの1/2強という割合が看取される。他例よりも小さいために①bに小分類したNo11、12もこの原則を守っている。

突帯は上稜が下稜よりも突出する断面「M」字型であり、幅広に作られている。透孔は基本的には円形でNo.3に代表されるような上部が直線的な例がごく少數存在する。上部が明確な直線を描かず半円形とするに躊躇する例が認められ、多くの資料についてはすでに半円形透孔の意識は失われていたと思われる。ハケメ工具は他類と異なりすべての個体でスギ等の針葉樹材⁽¹⁾を用いている。内面調整も類似しているが、口縁部にハケメを用いた後ナデを施している例などがあり、さらに細分が可能である。胎土、焼成についてはすべて同様でありわずかに白色軽石の粗密がみられる程度である。また、①a、①b類すべてに底部調整⁽²⁾が施されている。外面縦ヶズリ、内面横ヶズリである。特に外面の痕跡からは刀子のような鋭利な工具が想定される。

①c類は写真I、IIである。口縁部まで残っている資料はないが突帯形状とハケメの類似性、規格性から①類に含めたものである。①a、①b類と異なり底部調整は施されないが、基底部下端の歪みが著しく底部調整の必要性が実感される。

②類は胴部と口縁部の長さがほぼ等しく、基底部の残存部分からは底部調整の痕跡は認められない資料である。胎土は①類と似通っているが、作りはむしろM-2号墳に類似する。内面にハケメを施している。

③類は緻密な胎土でぶい橙色(5YR7/4)を呈する資料である。④類も緻密な胎土で橙色(5YR7/6)を呈する。ヘラナデで仕上げている資料もみられる(写真III)。

形象埴輪は未実測資料中に小破片ながら確認できる。下場幅4cmの突帯がつく板状で端部が屈曲すると思われる破片や先細りで太い方は中空の部分がある棒状の破片などがある。前者は家の可能性が、後者は人物に附属する大刀の可能性も考えられる。他には幅4~5cmほど帶状に肥厚する資料、縦に直線的に切り込まれている破片がある。

M-2号墳 墓輪はNo.13、14、15、16である。基底部下半を欠損するNo.13を除くすべての底部に基部の重ね合わせの痕跡がみられる。底部調整は認められない。M-1号墳①c類と比較すると基底部下端の歪みはないに等しく、明らかに成形技法の相違が認められる。他にも突帯形態、ハケメ、胎土、色調などM-1号墳①類とは大きく異なる。透孔は円形のほか上辺が直線で明確な角をなす例があり、半円形の存在が推定される。

突帯については、No.13にみられる断続ナデ技法⁽³⁾の存在が特筆される。突帯粘土を粗くナデつけたのち横ナデを施しているが、最初の跳ね上げるようなナデの痕跡が看取できるものである。第1、第2突帯両方に認められる。

これらの埴輪はNo.13、15が内面において縦ハケの多用と横方向一直線に伸びるヘラ記号を有する点で類似するほかはそれぞれ個々の特徴を持っている。No.15は残存状態が悪く断続ナデ技法の

存在を判断できなかった。未実測資料では内面にハケメを多用する例が多く見受けられる。

形象埴輪は一片のみであるが未実測資料中に認められる。内外面ハケメで板状を呈する資料で、突帯が横方向に位置するが剥落している。家の可能性が考えられる。

結 M-1号墳資料を特徴づけるのは底部調整であろう。上野地域では底部調整の明確な出現はTK10併行の須恵器を出土した富岡5号墳である⁽¹⁾。また、半円形透孔が6世紀前半で消滅するという研究成果⁽²⁾を援用すればM-1号墳の半円形のかなり崩れたような形は半円形透孔が消滅した直後の時期が考えられる。したがってM-1号墳の埴輪は6世紀中～後半の早い時期があたえられよう。M-2号墳の埴輪には前述のように底部調整が全く認められない。また、M-1号墳①類とは成形方法において相異がみられ、基部を形づくって工程を踏んでいく方法と推定できる。透孔ではM-2号墳の方に明確な半円形がみられ、M-1号墳には崩れた形が認められる程度であった。M-1号墳とM-2号墳の資料は同一古墳群中であり同一系統の埴輪制作集団であると仮定すれば、これらの要素からM-2号墳の方が先行する可能性が大きいと考えられる。半円形透孔の消滅以前で底部調整導入以前という時期であり、ここでは6世紀前半～中葉という時期を与えておきたい。M-2号墳にみられる断続ナデ技法はTK23～TK47の時期には古市古墳群中に出現したとされている技法である。現段階では畿内周辺に多く分布し、関東では茨城県馬渡埴輪制作址に例がある⁽³⁾。上野地域における類例は、管見では藤岡市七興山古墳出土円筒埴輪⁽⁴⁾の「斜線による凸帯割り付け痕」とされるものが本例と同様と思われる。断続ナデ技法Aは地域性や伝播の問題において重要な位置を占めることになる。この技法の存在が持野地域でも認識されたことで、今後類例の増加は必至と思われる。その上で再論したい。

(文責 群馬県埋蔵文化財調査事業團 南雲芳昭)

註

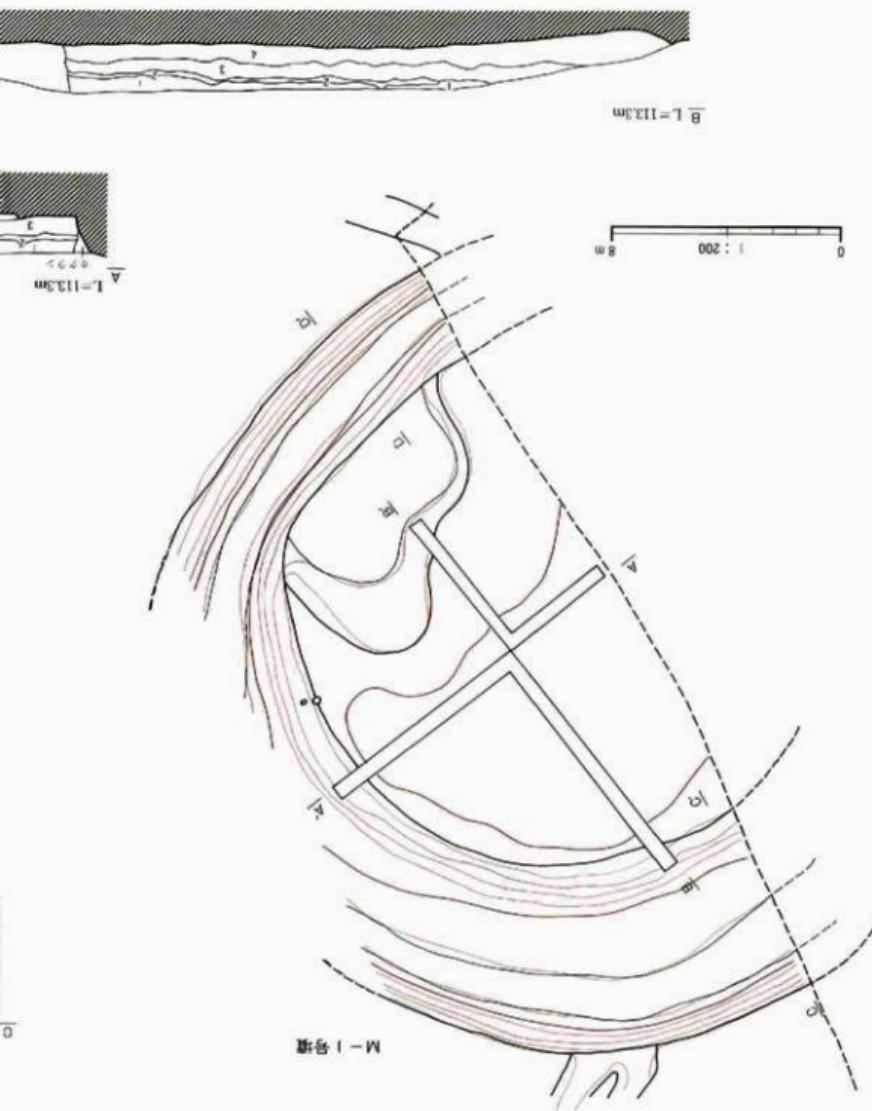
- (1) 横山浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号 1978 九州文化史研究施設
- (2) 川西宏幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 1978・1979
『古墳時代政治史序説』 1988 墓内房に再録
- (3) 鎌方正樹・中島和彦・安井宣也「管原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』 1991 奈良市教育委員会
- (4) a 富岡市教育委員会『富岡5号古墳』 1972
b 有勝寺北墓遺跡調査会『有勝寺北墓遺跡』 1980
- (5) 加那二生「IV 成果と問題点」『塙ノ久保遺跡』 1991 安中市教育委員会
- (6) 前掲註(3)の指摘による。
- (7) 藤岡市教育委員会『七興山古墳範囲確認調査報告書V』 1991

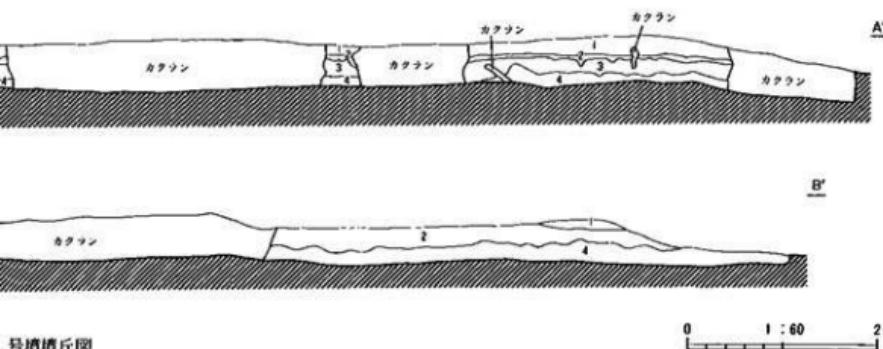
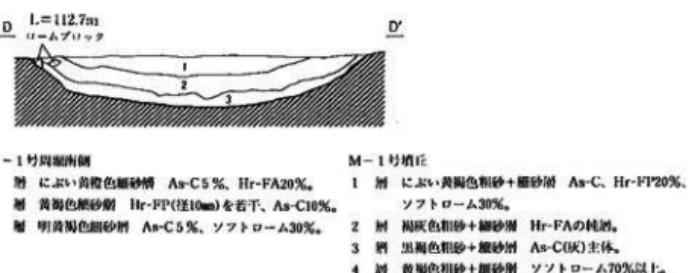
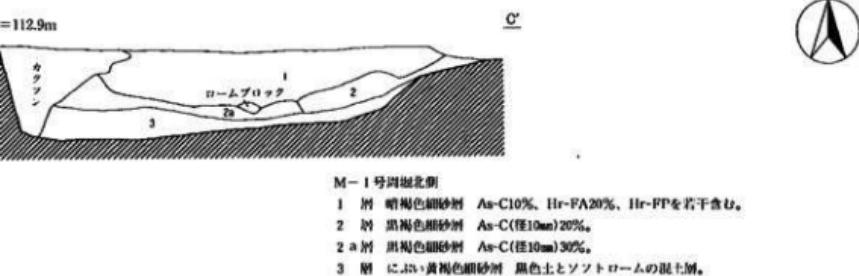
Tab. 4 石器・特殊遺物観察表

番号	出土位置	種類	長	幅	厚	重さ	石材	特 考	Fig.
1	W-11	石 砕	2.7	1.3	0.4	1.2	黒色 石岩	先端、表面とも丁寧な削磨で仕上げられる。	42
2	W-11	石 砕	3.9	1.3	0.6	2.0	黒色 石岩	先端、側面とも鋸状に仕上げられる。	42
3	W-11	石 砕	3.2	1.7	0.7	2.4	黄褐色珪質岩	基部をむすかに欠損。表面とも斜面削磨で仕上げられる。	42
4	D-16	石 砕	[1.9] [1.4]	0.3	0.4	0.4	黒 花崗岩	左側面部を欠失。丁寧な削磨で仕上げられる。	42
5	XBY19	石 砕	[2.6]	1.6	0.4	1.4	チャート	先端部をむすかに欠損。表面に大きく主要削磨面を残す。	42
6	H-23	打削石斧	6.5	4.9	2.1	52.0	粗粒安山岩	刃部を残す。表面に自然面を残している。	42
7	W-6	打削石斧	12.8	6.1	2.6	216.0	黒色 石岩	刃部をむすかに欠損するが、刃部再生がなされる。	42
8	XBY44	打削石斧	6.8	4.9	1.3	43.0	粗粒安山岩	基部を欠損する。刃部に使用痕が認められる。	42
9	C区復原	打削石斧	6.6	3.9	1.7	36.0	黒色 石岩	小形の打削石斧。表面面に大きな主要削磨面を残す。	文 42
10	ZYU24	石 砕	7.5	6.6	1.1	62.0	黒色 石岩	表面に大きく自然面を残す。表面に丁寧な削磨が認められる。	42
11	XBY38	刮 刀	8.9	6.5	1.9	38.0	黒色 石岩	表面面とも主要削磨面を残し、一側に刃部が形成される。	42
12	W-11	刮 刀	9.8	7.9	3.0	329.0	粗粒安山岩	やや大形の磨石の一部と考えられる。	42
13	D-13	刮 刀	12.1	10.4	3.2	554.0	粗粒安山岩	表面面とも摩耗痕が認められ、側面には刃痕がみられる。	42
14	M-1	敲 石	12.2	5.4	4.6	417.0	粗粒安山岩	棒状の棒の両端及び側縁に打痕が認められる。	石 42
15	M-2	敲 石	12.1	9.7	4.4	632.0	石英閃长岩	横円形の穂の先端品。端部と両側縁に打痕が認められる。	42
16	W-1	敲 石	16.8	5.8	4.0	533.0	粗粒安山岩	棒状の穂の両端及び側縁に打痕が認められる。	42
17	M-1	敲 石	13.7	7.7	5.4	757.0	粗粒安山岩	横円形の穂の両端及び側縁に打痕が認められる。	43
18	M-1	敲 石	10.8	9.7	8.6	900.0	粗粒安山岩	丸い形の両端に打痕が認められる。	43
19	H-5	敲 石	15.2	19.9	6.9	980.0	粗粒安山岩	横円形の穂の先端と左側面部に打痕が認められる。	43
20	H-10	敲 石	9.9	3.9	2.7	153.0	粗粒安山岩	棒状の穂の先端に打痕が認められる。	43
21	W-6	敲 石	8.9	3.1	2.4	79.0	黒色 石岩	棒状の穂の先端に大きな刃痕(削離)が認められる。	43
22	W-6	敲 石	13.5	5.3	2.6	269.0	碧玉石英岩	棒状の穂の先端及び右側縁に打痕が認められる。	43
23	I-3	板 破	22.4	11.8	2.2	678.0	滑石英片岩	板状の断片。	中 43
24	XBY43	板 破	8.0	4.9	1.5	67.0	綠色 石岩	板状の断片。	世 43
25	H-16	勾 玉	3.5	1.2	0.7	6.0	滑石質蛇紋岩	表面面とも主張の研磨で仕上げられる。側面は丸く、背面は棱が付く。	古 43
26	H-22	勾 玉	3.9	2.3	0.4	3.0	滑石質蛇紋岩	筒状勾玉。穿孔は片側から行われる。	43
27	H-15	鐵 鏟	[全周6.4] 斧頭部5.2 延9.0 重さ1.0 重さ[13.0]					有彎曲三角形頭。平面部では逆に深く屈屈が欠損している。	地 43
28	H-12	鐵 鏟	[長さ4.7] 幅10.0 重さ[3.0]					頭部欠損。本質の選ばはない。	44
29	H-12	鐵 鏟	[長さ8.2] 幅11.2 重さ[6.0]					やや長く細目の刃。木質、直角ではない。	平 44
30	B区復原	鐵 鏟	[長さ5.1] 幅10.0 重さ[3.0]					短け刃。木質一端付ける。小形の刃である。	安 44
31	H-15	鐵 鏟	[長さ7.2 内幅9.0 厚さ1.8 重さ44.7]					鐵鉈石。頭部の調整は丁寧に施されている。	44
32	XBY23	古 箭	[外径2.3 穿孔0.7 重さ2.0]					先端。刻銘。『寛永通宝』の文字はっきりと読み取れる。裏は粗面。	-
33	XBY44	古 箭	[外径 - 穿孔 - 重さ0.5]					1/2次鉄。刻銘。『寛』と『永』の左半分欠損。『通』のみ完全。裏は11道が現存。	-
34	A区復原	古 箭	[外径2.3 穿孔0.6 重さ1.0]					先端。刻銘。裏裏とも右音頭りびと『寛永通宝』の文字わずかに読める程度。	-
35	B区復原	古 箭	[外径2.8 穿孔0.7 重さ4.0]					先端。刻銘。寛永通宝。裏は11道。	-
36	H-3	埋 管	[長さ10.0 幅10.0 重さ54.0]					(36)～(40)は埋管で江戸時代初期以前のものであるが、時代は確定できない。	近 44
37	H-3	埋 管	[長さ8.5 幅10.0 重さ13 重さ46.0]					(36) (37) (40)は埋管部分で3点ともほぼ完形である。	44
38	A区復原	埋 管	[直径1.7 高さ9.0 厚さ0.2 重さ81.0]					(38) (39)は埋管部分で(38)は火面部と錆字結合部が欠損。(38)は火面部のみである。首管と瓶口の組み合せはできなかった。	44
39	D-14	埋 管	[長さ4.9] 直径1.0 重さ3.0]					44	
40	B区復原	埋 管	[長さ8.7 幅8.0 重さ55.0]					44	
41	W-6	鐵 砥	15.3	6.8	1.8	[271.0]	長方形。内側面。縁は欠損。反は、使用により講状に凹む。	44	
42	W-6	鐵 砥	[12.7] 5.9 [0.8] [59.8]				長方形。凸、凸、縁共に削離する。倒と落落の一部のみ達。	-	
43	H-12	鐵 砥	[16.2] 3.5	2.9	[165.2]		橢圓火鉗。曲接続。	44	
44	W-6	鐵 砥	[10.8] 2.9	1.8	[76.4]		橢圓火鉗。曲接続。前面にシラタガネ底。	44	
45	W-6	鐵 砥	[8.1] 3.1	1.8	[25.2]		2面使用。側面と上面にシラタガネ底。	44	
46	W-6	鐵 砥	[8.4] 2.7	1.8	[66.3]		橢圓火鉗。曲接続。前面にシラタガネ底。	44	
47	I-1	石 白	〔 長さ29.9 〕 幅12.4 重さ5.300]					粗粒安山岩質。上部のものばかり直角的。	44
48	I-1	石 白	〔 長さ35.4 〕 幅510.2 重さ6.050]					粗粒安山岩質。下部は片被りあり。	44

注) 表の記載で、大きさと重さについての単位はcm, gであり、重音値は〔 〕で示した。

Fig. 8 M-





号埴埴丘図

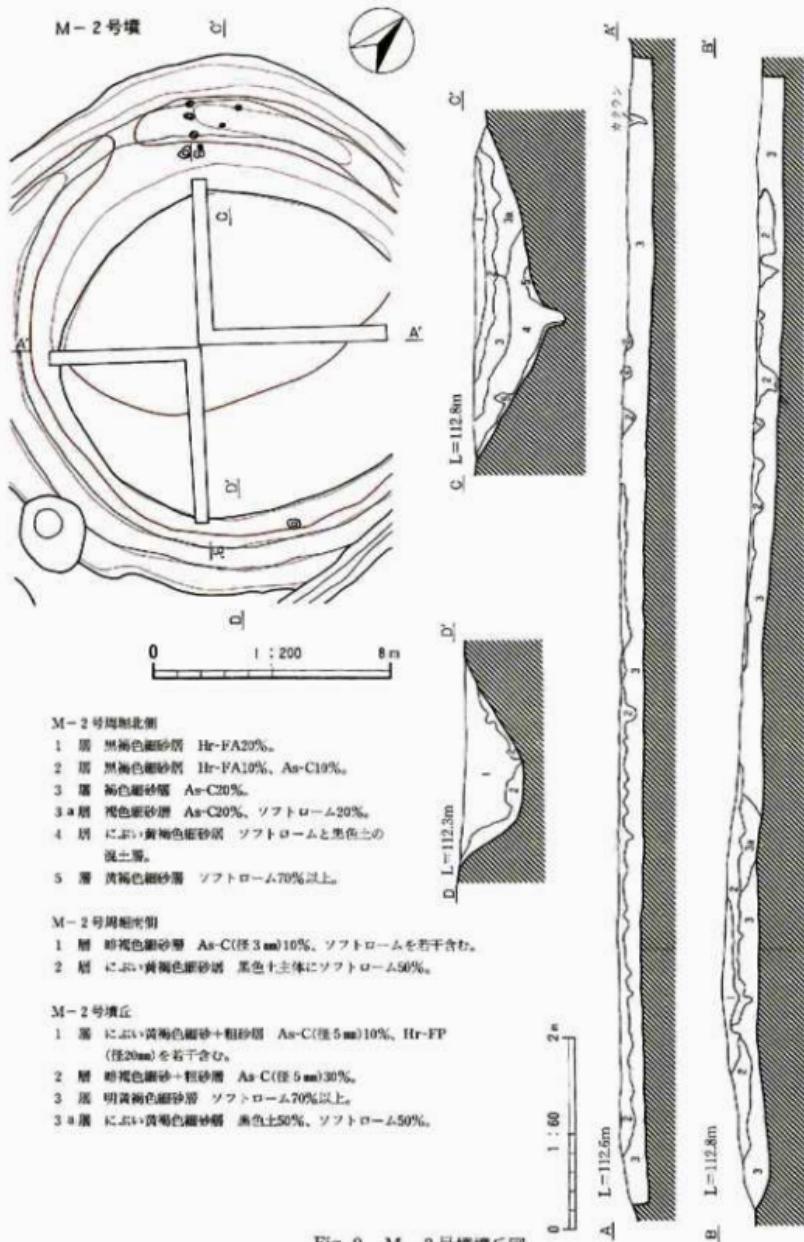
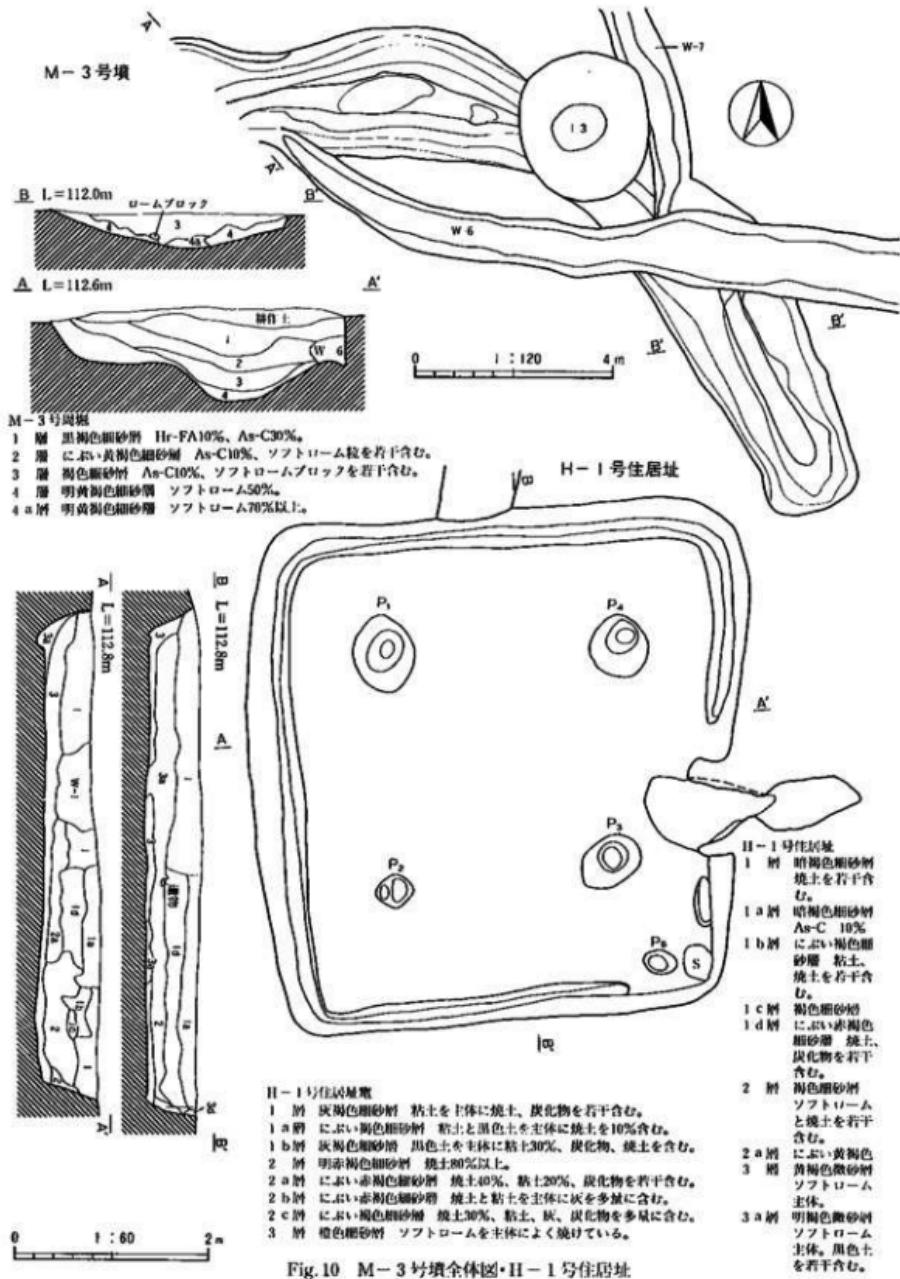


Fig. 9 M - 2 号墳墳丘図



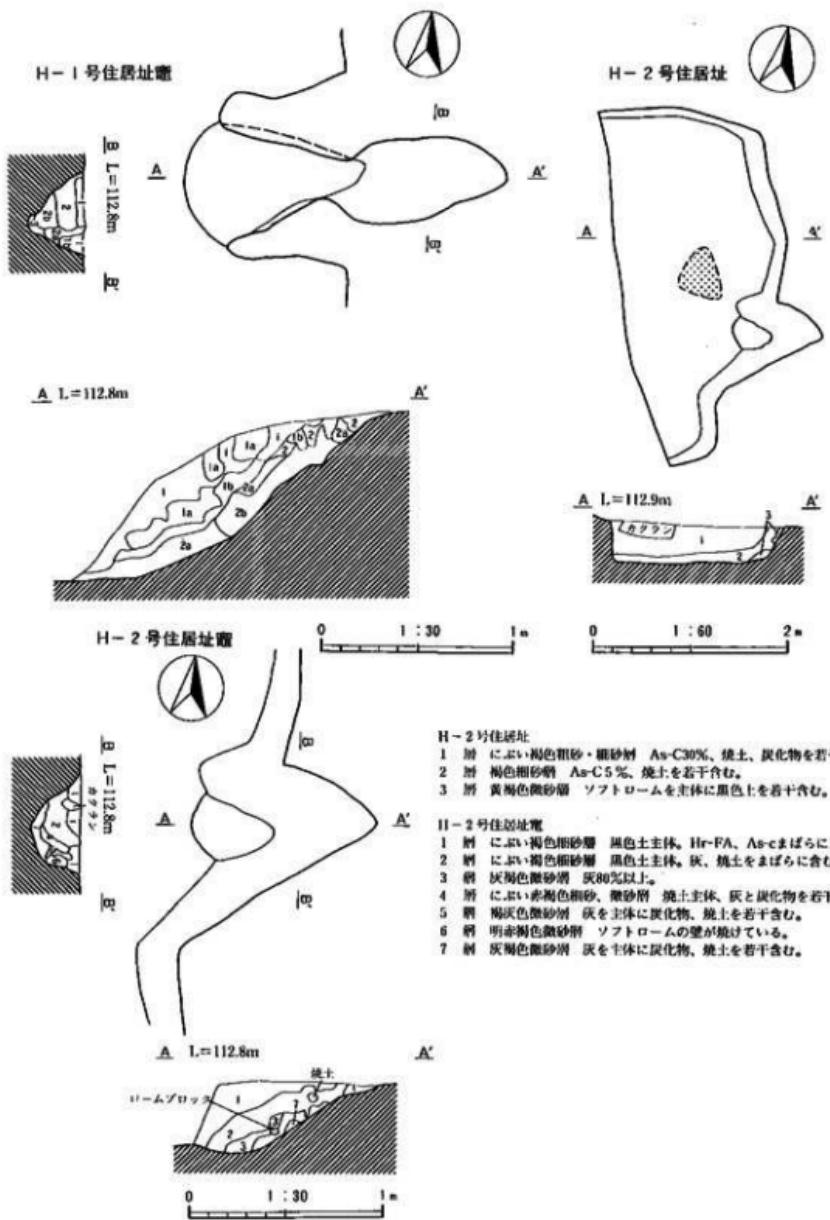


Fig. 11 H-1～2号住居址

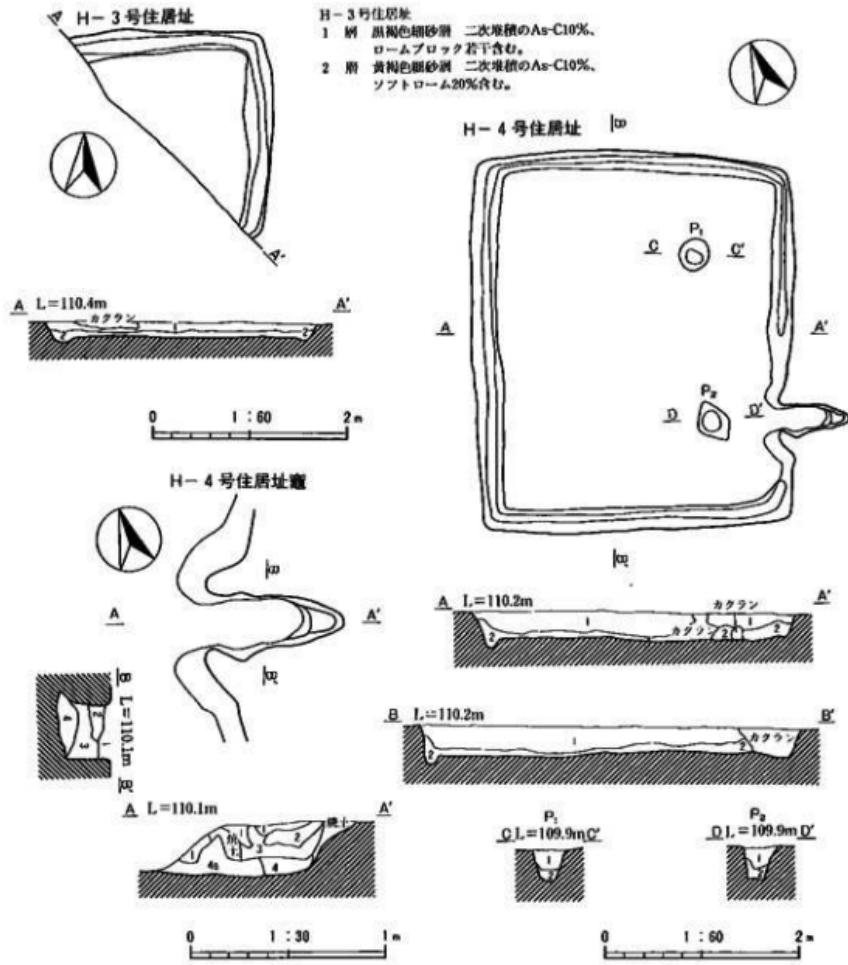


Fig. 12 H-3~4号住居址

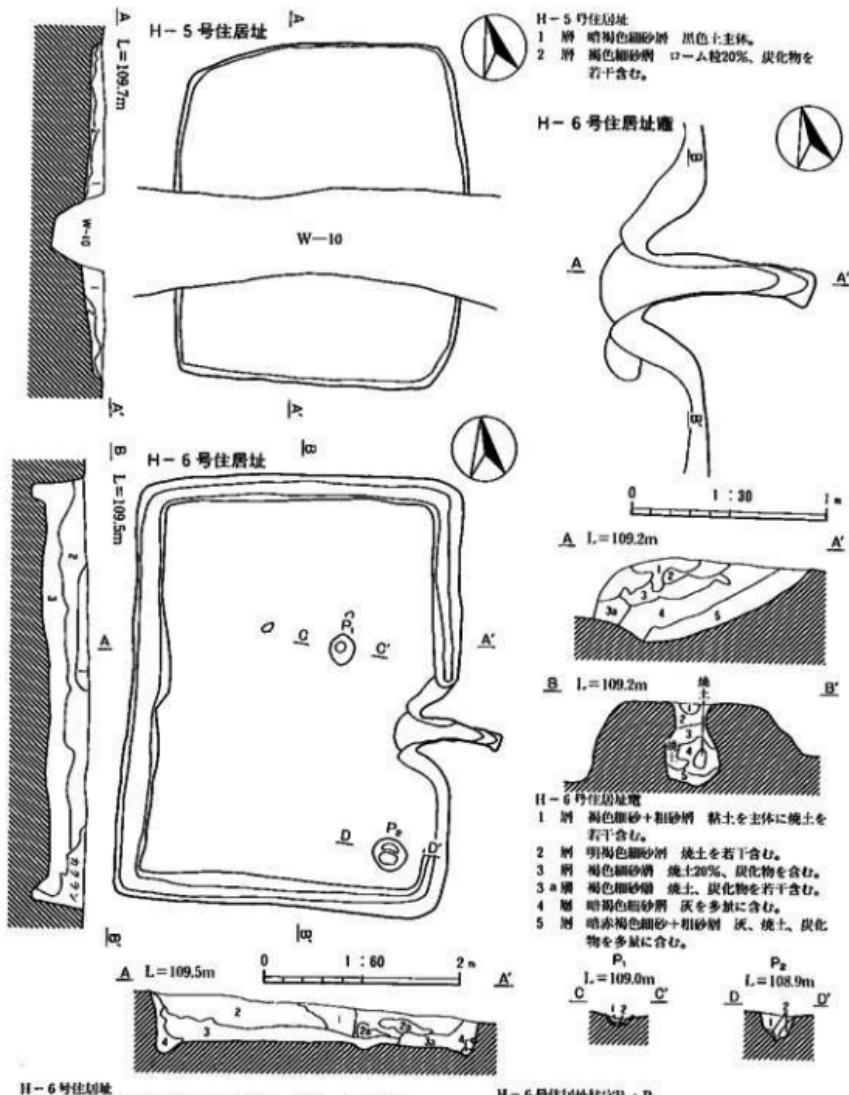


Fig. 13 H-5 ~ 6号住居址

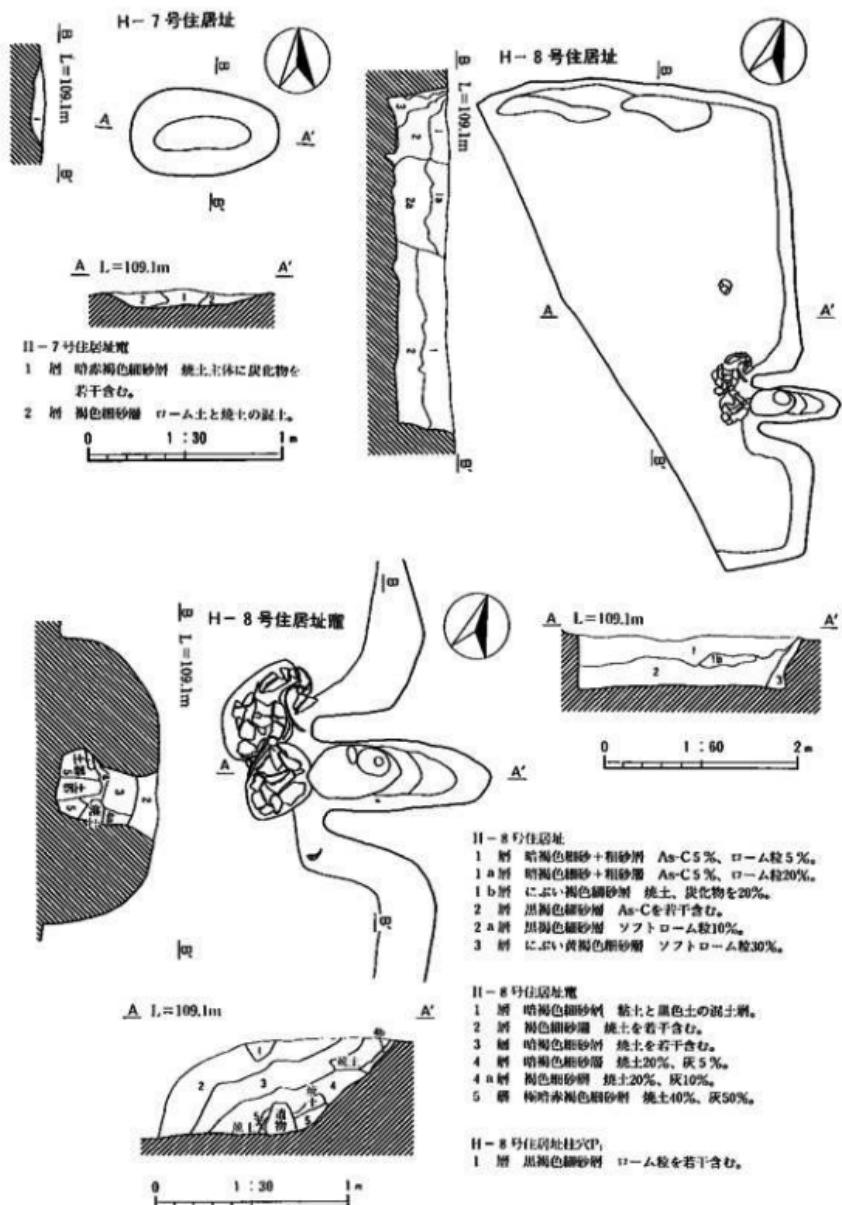


Fig. 14 H-7～8号住居址

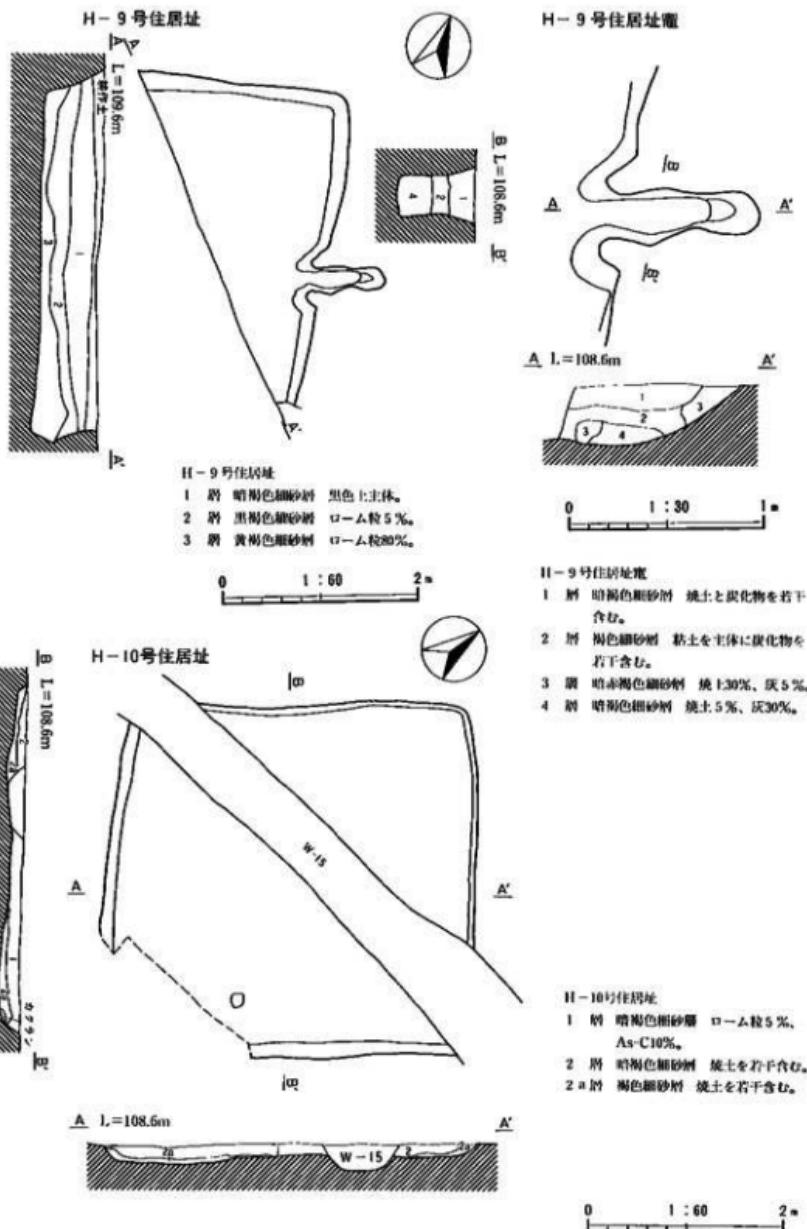


Fig. 15 H-9~10号住居址

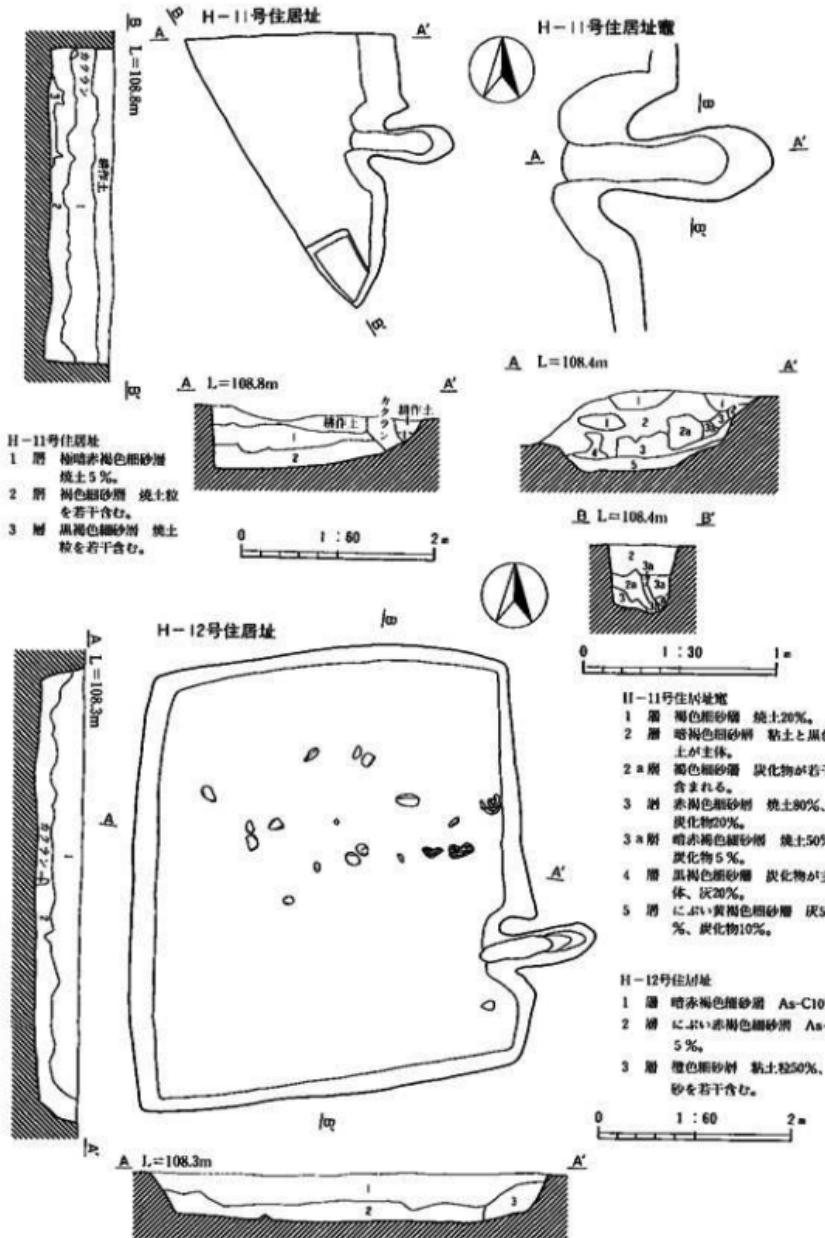


Fig. 16 H-11~12号住居址

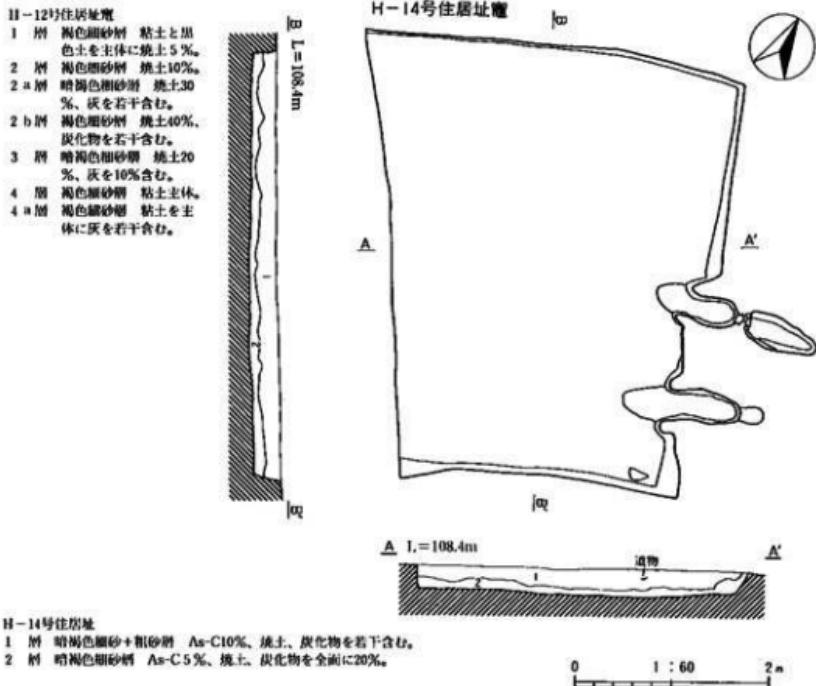


Fig. 17 H-12~14号住居址

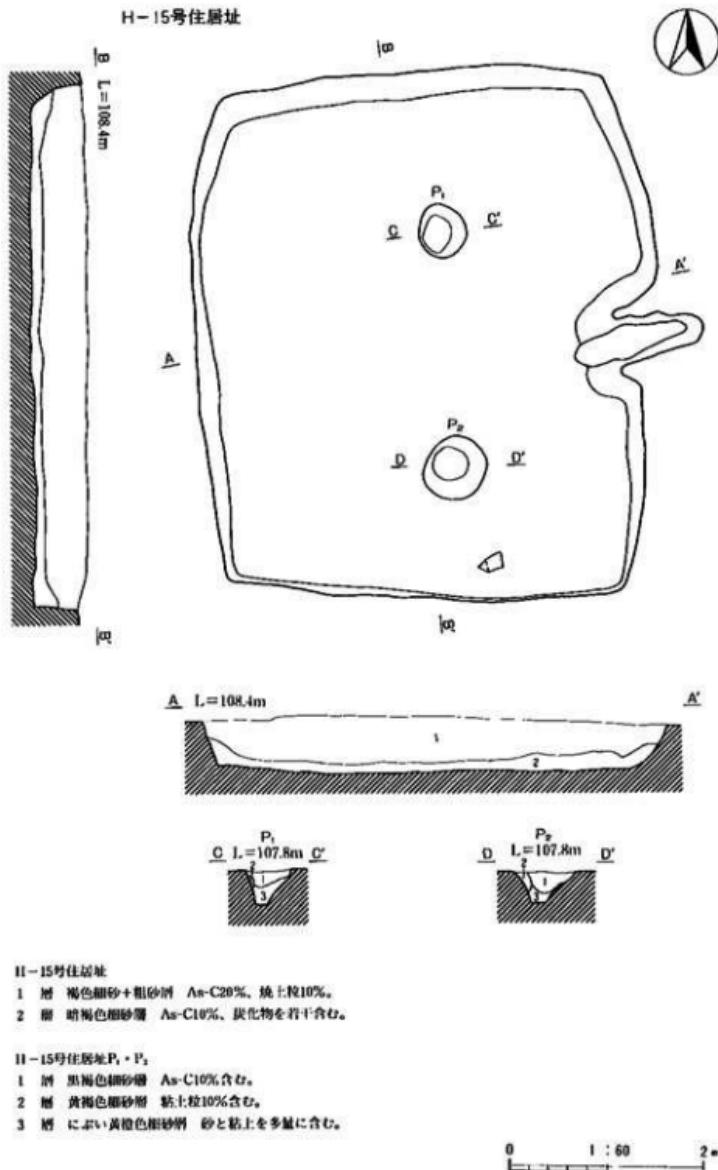


Fig. 19 H-15号住居址

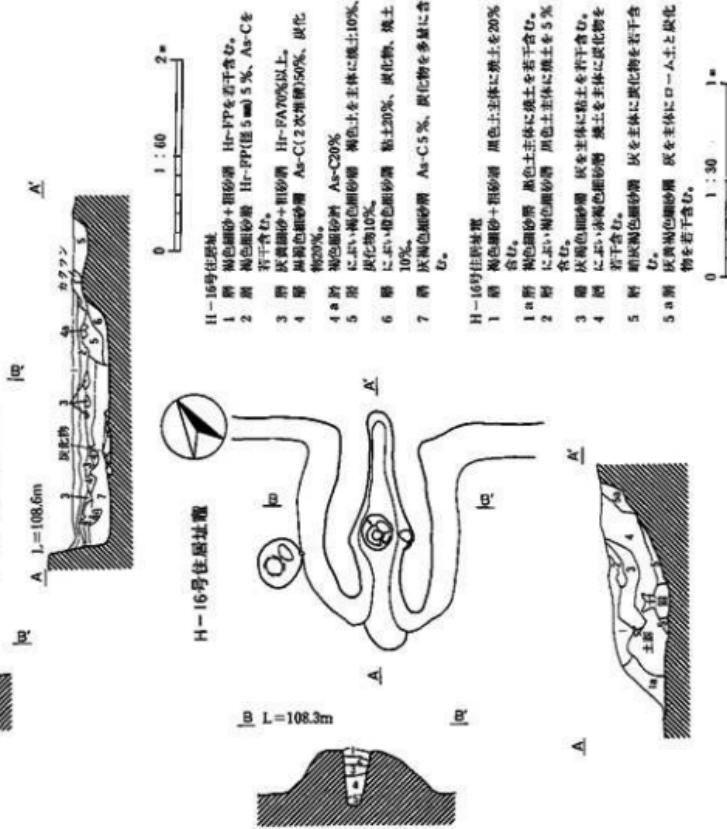
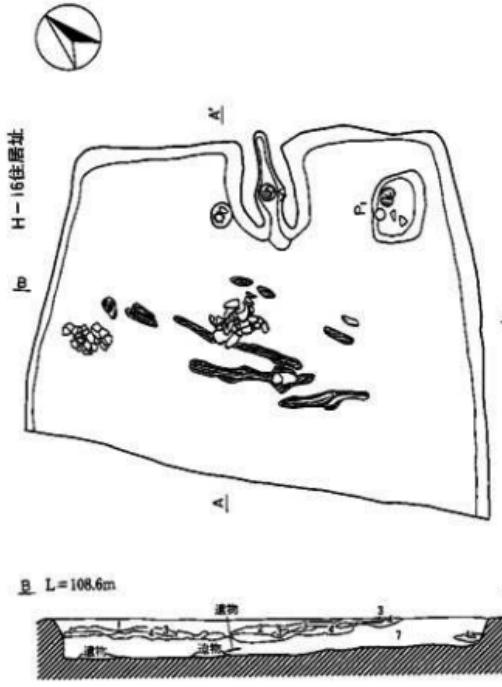


Fig. 20 H-16号住居址

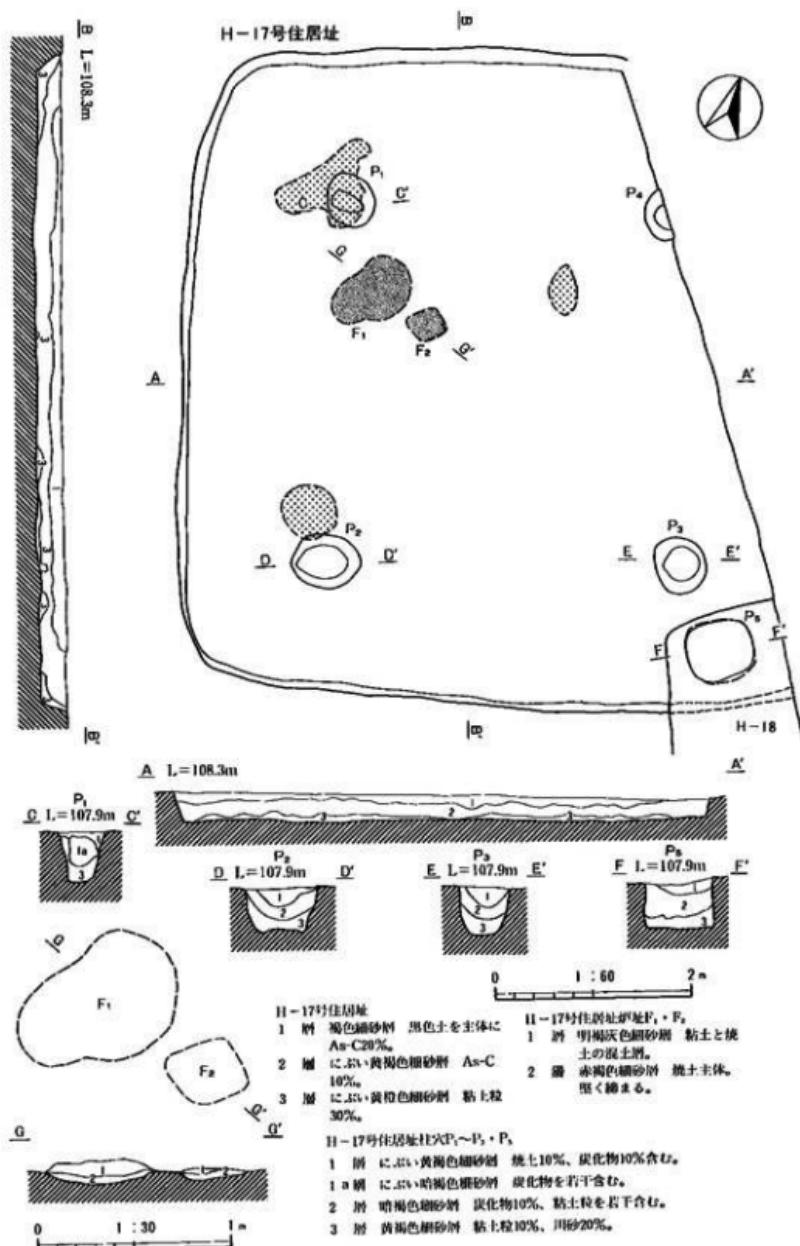


Fig. 21 H-17号住居址

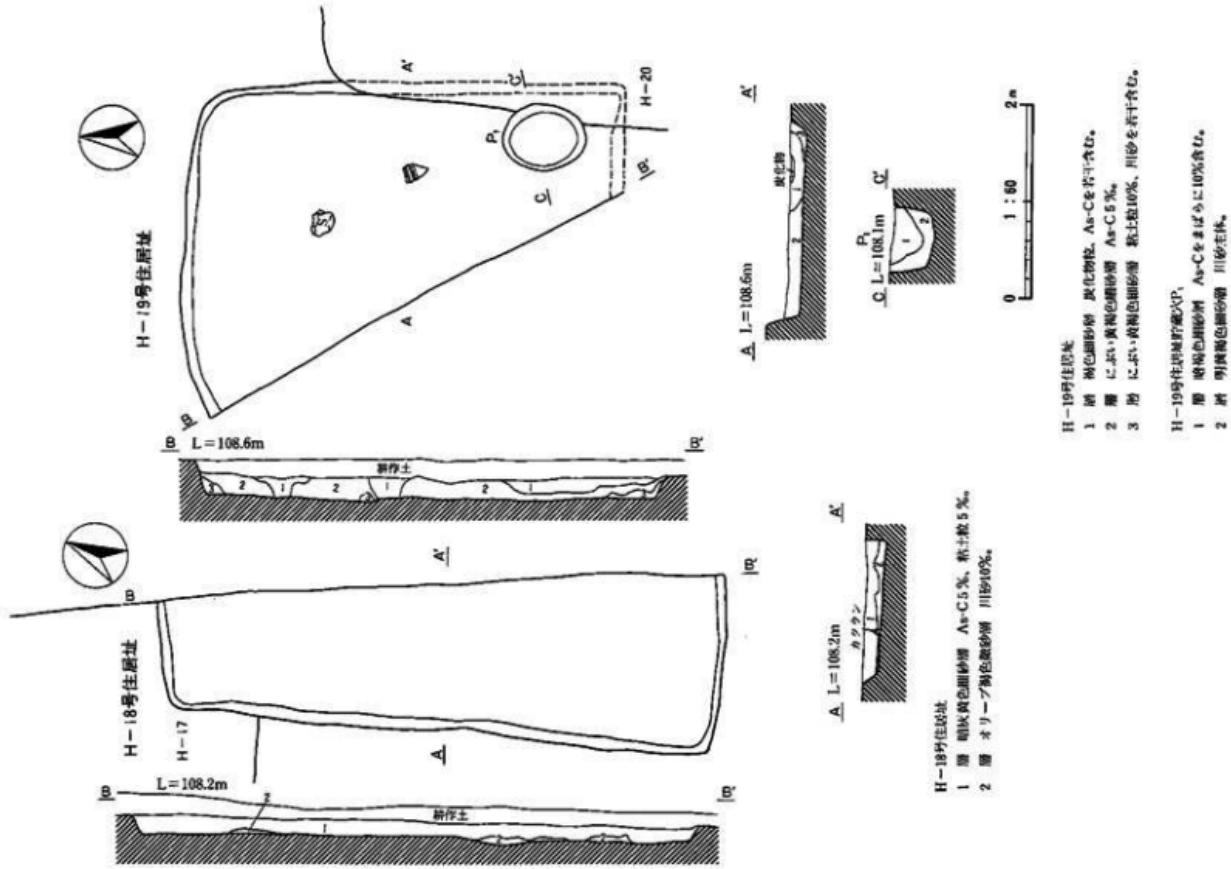


Fig. 22 H-18～19号住居跡

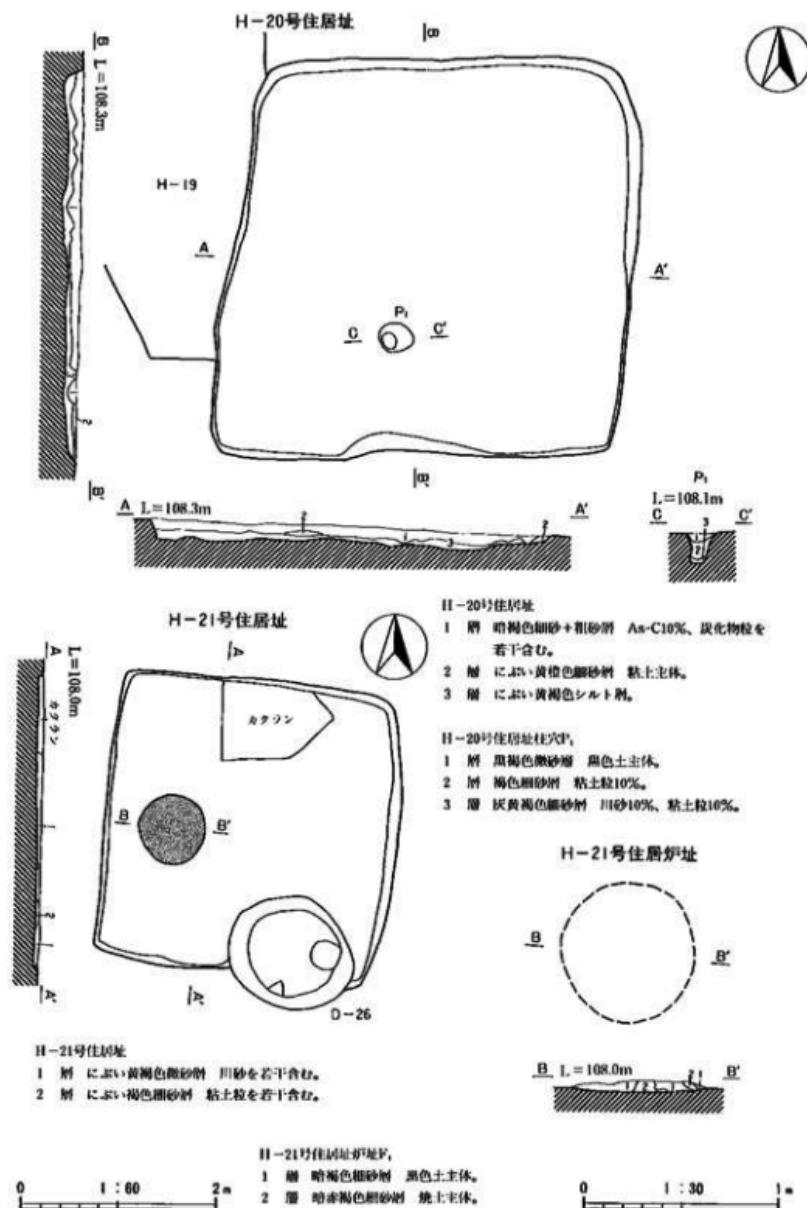


Fig. 23 H-20~21号住居址

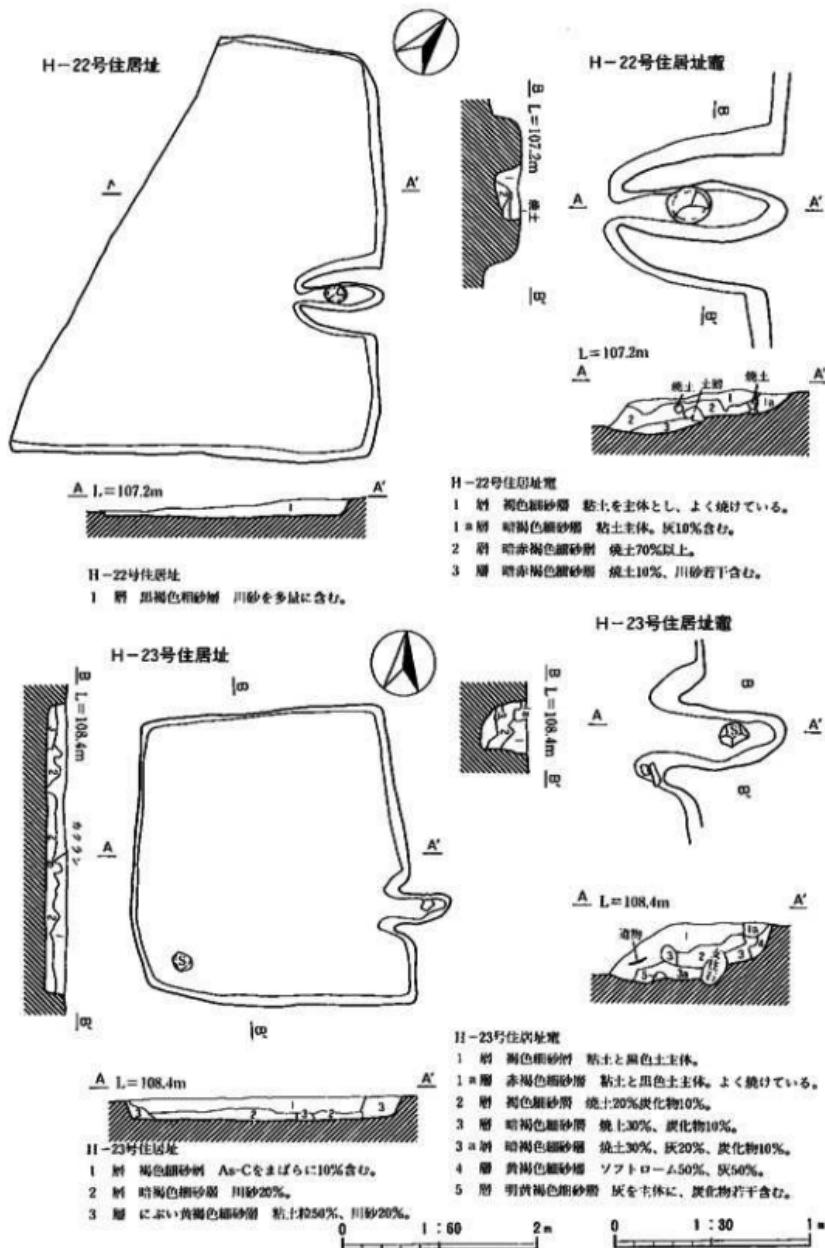


Fig. 24 H-22~23号住居址

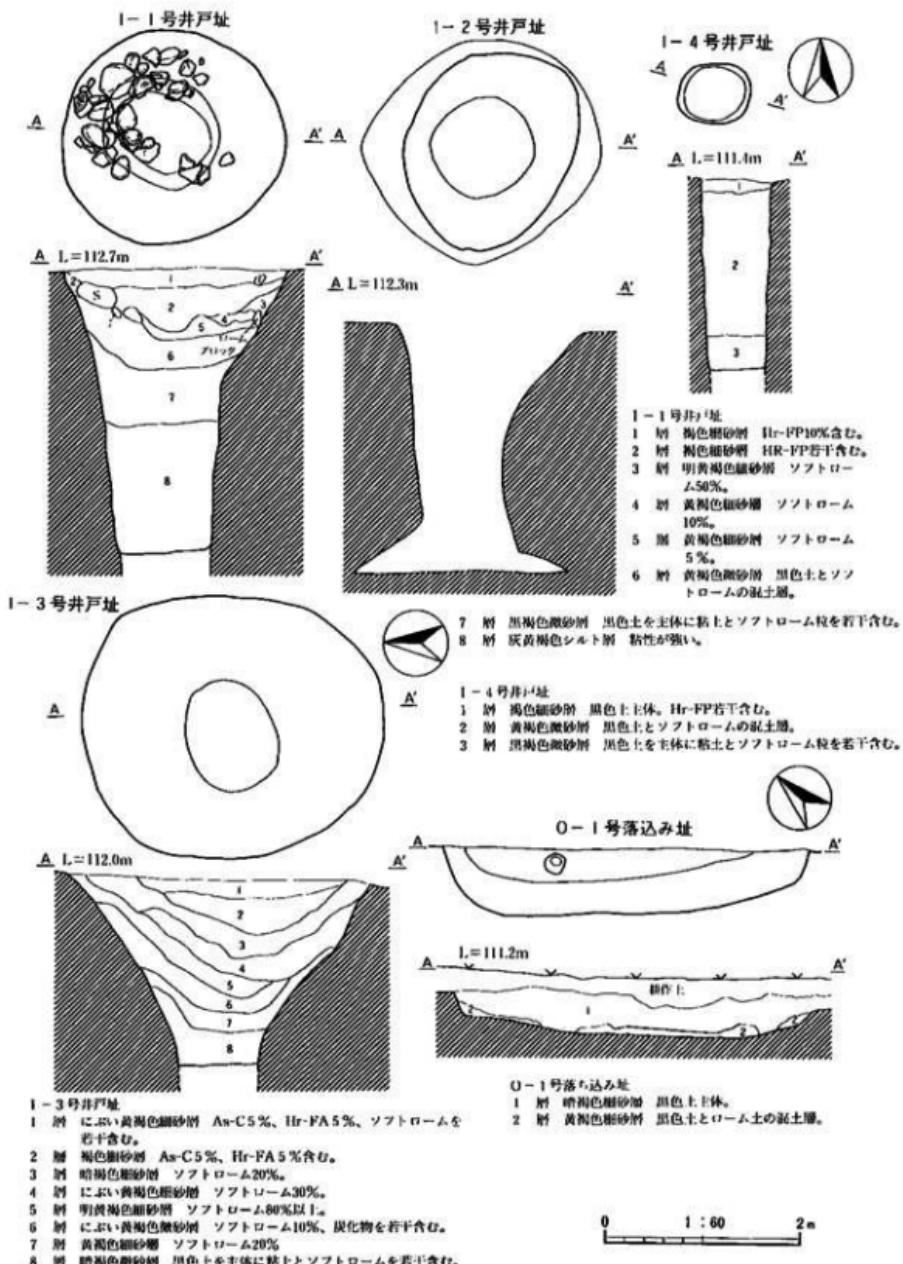


Fig. 25 I-1～4号井戸址 0-1号落ち込み址

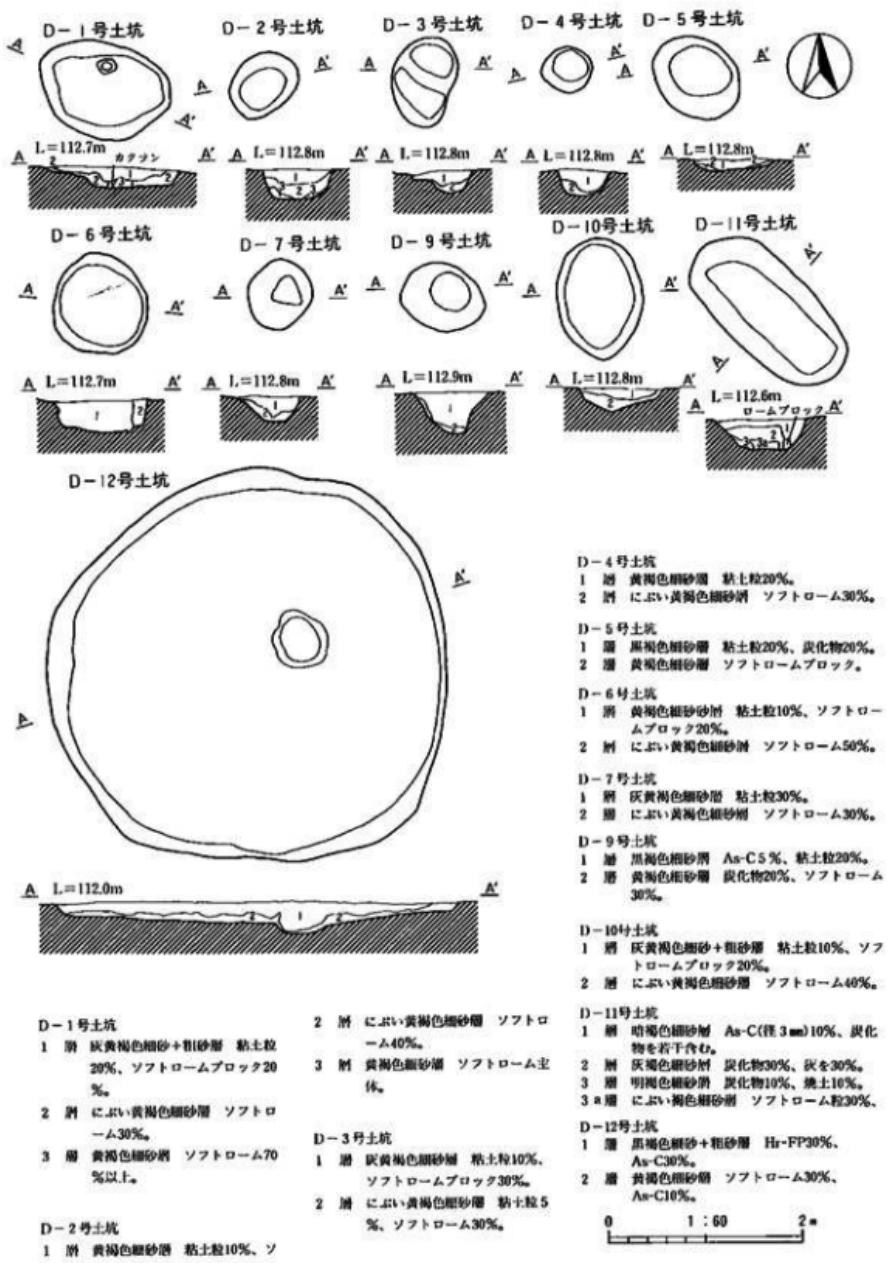


Fig. 26 D-1~12号土坑

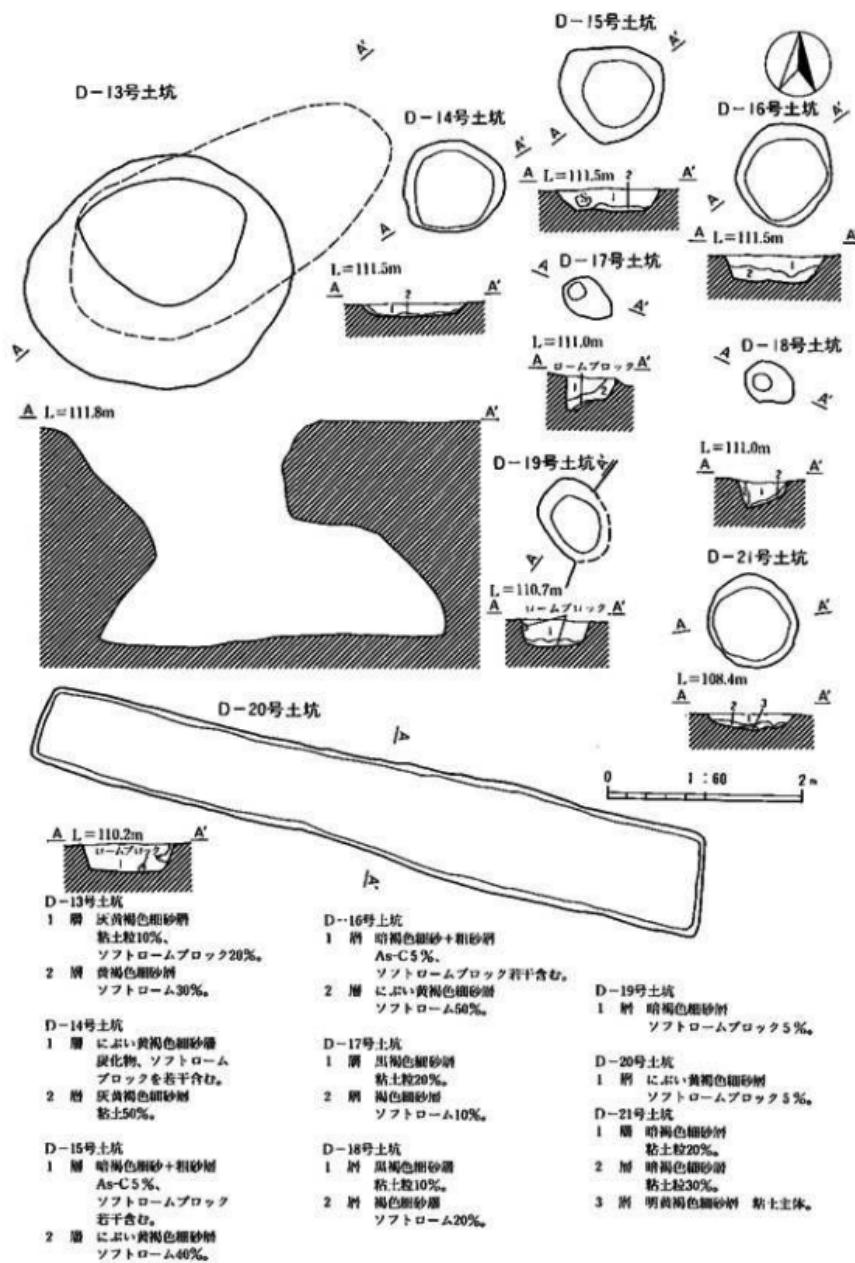


Fig. 27 D-13~21号土坑

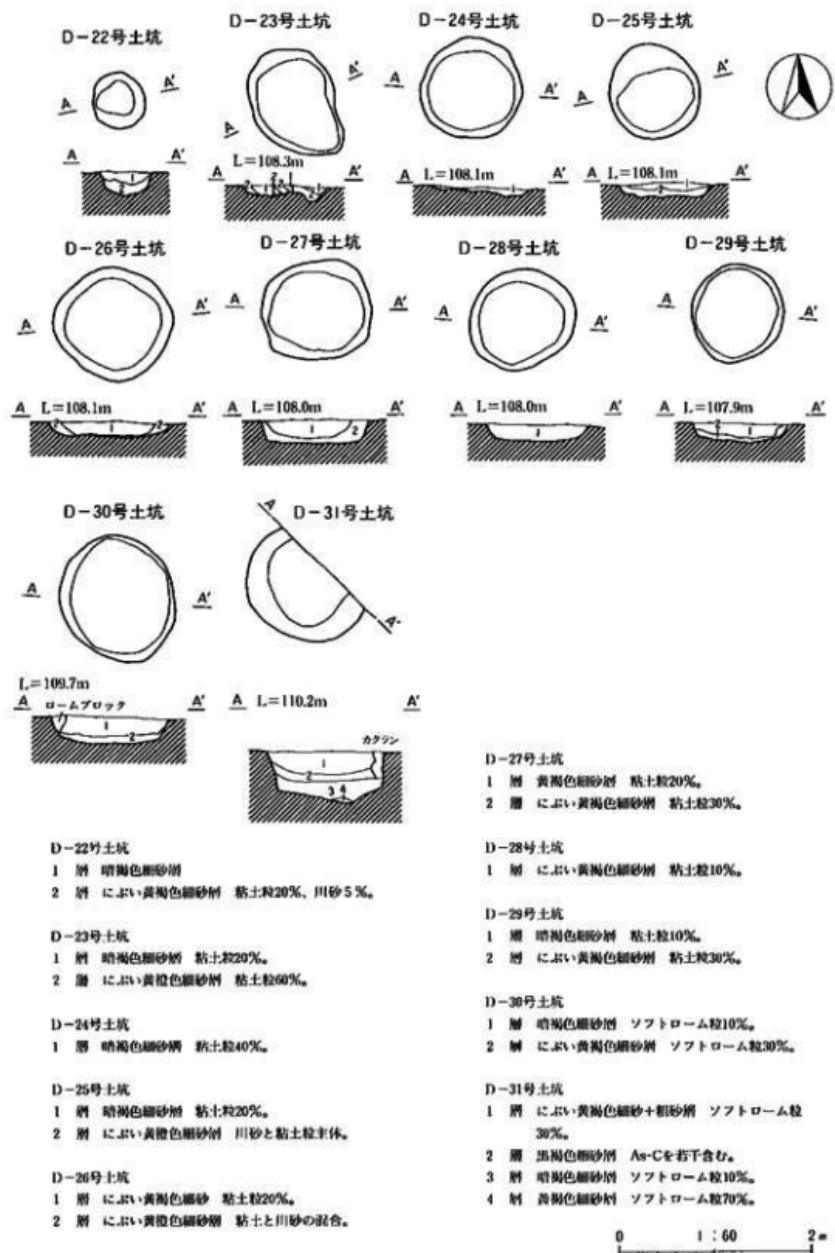


Fig. 28 D-22~31号土坑



Fig. 29 W-1~4・6・7・10~12・14~16号溝址

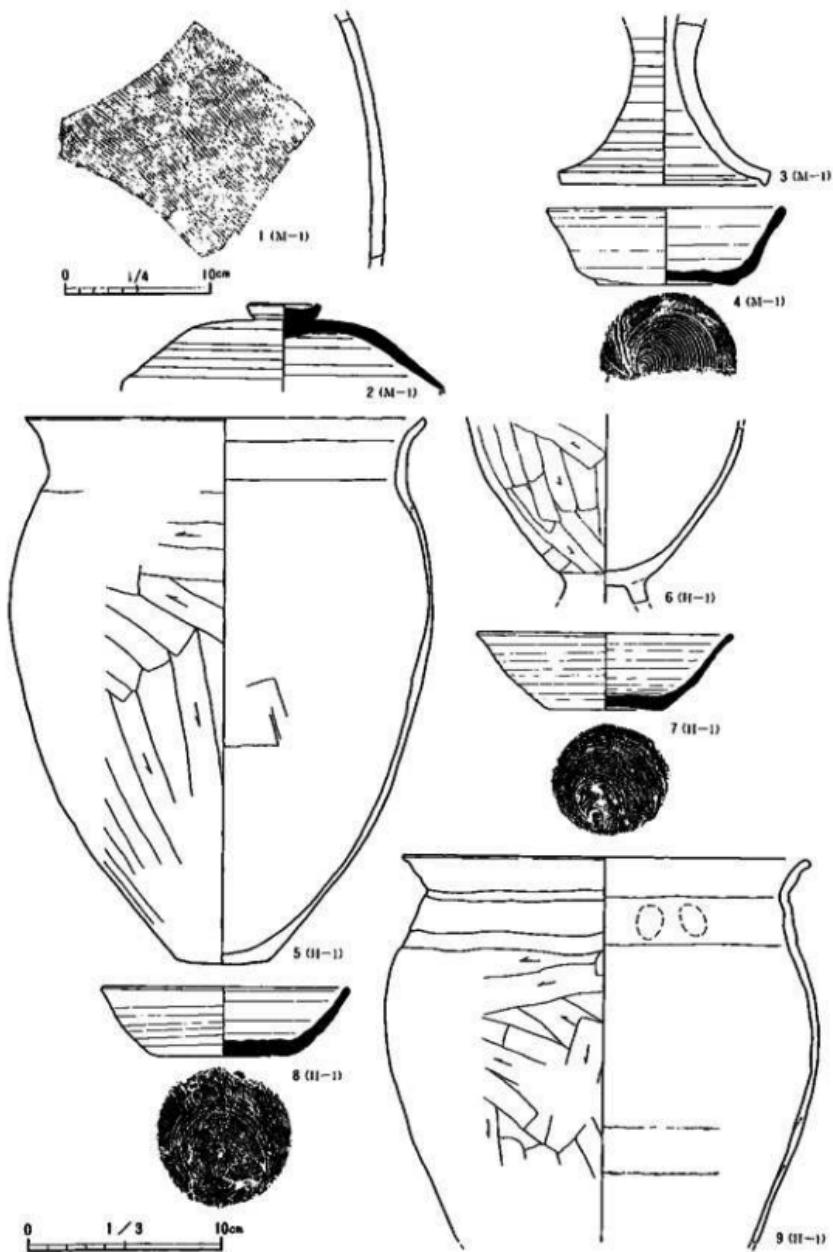


Fig. 30 古墳～奈良・平安時代の土器(1)

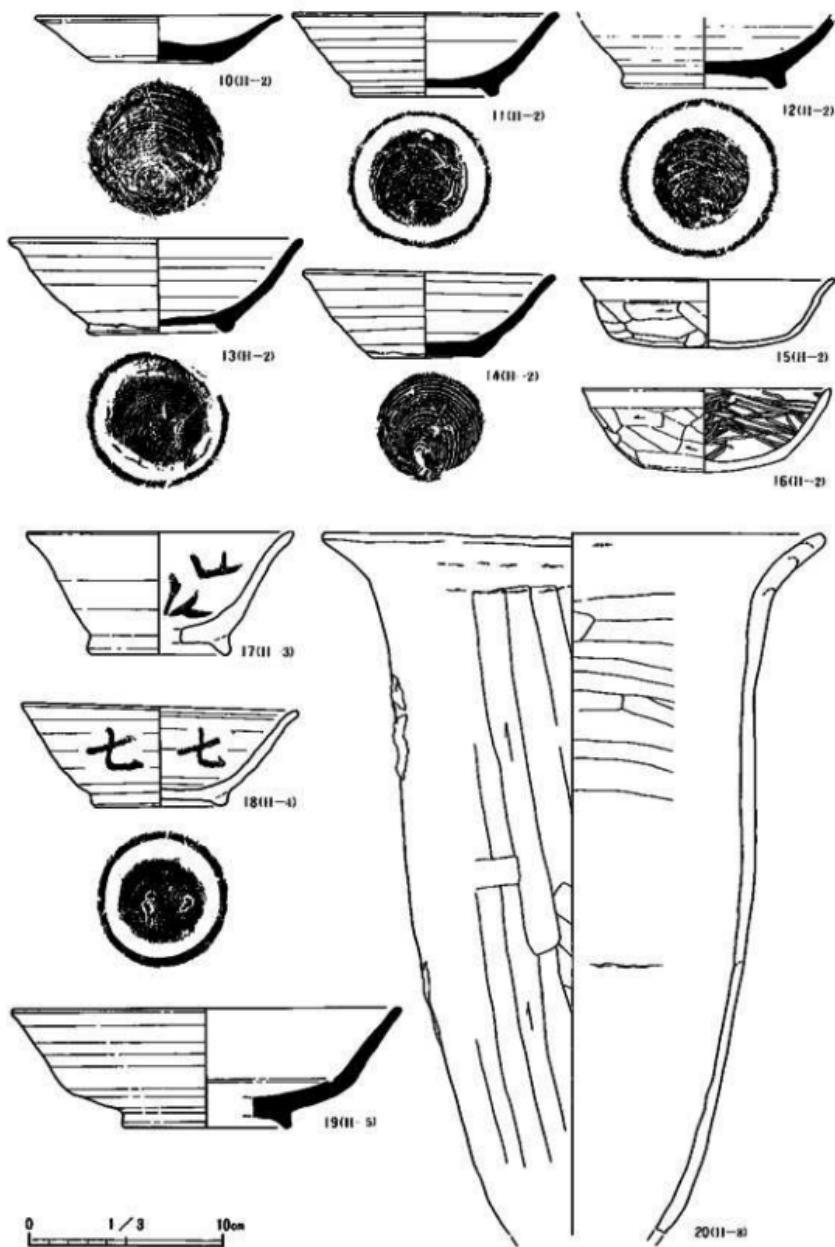


Fig. 31 古墳～奈良・平安時代の土器(2)

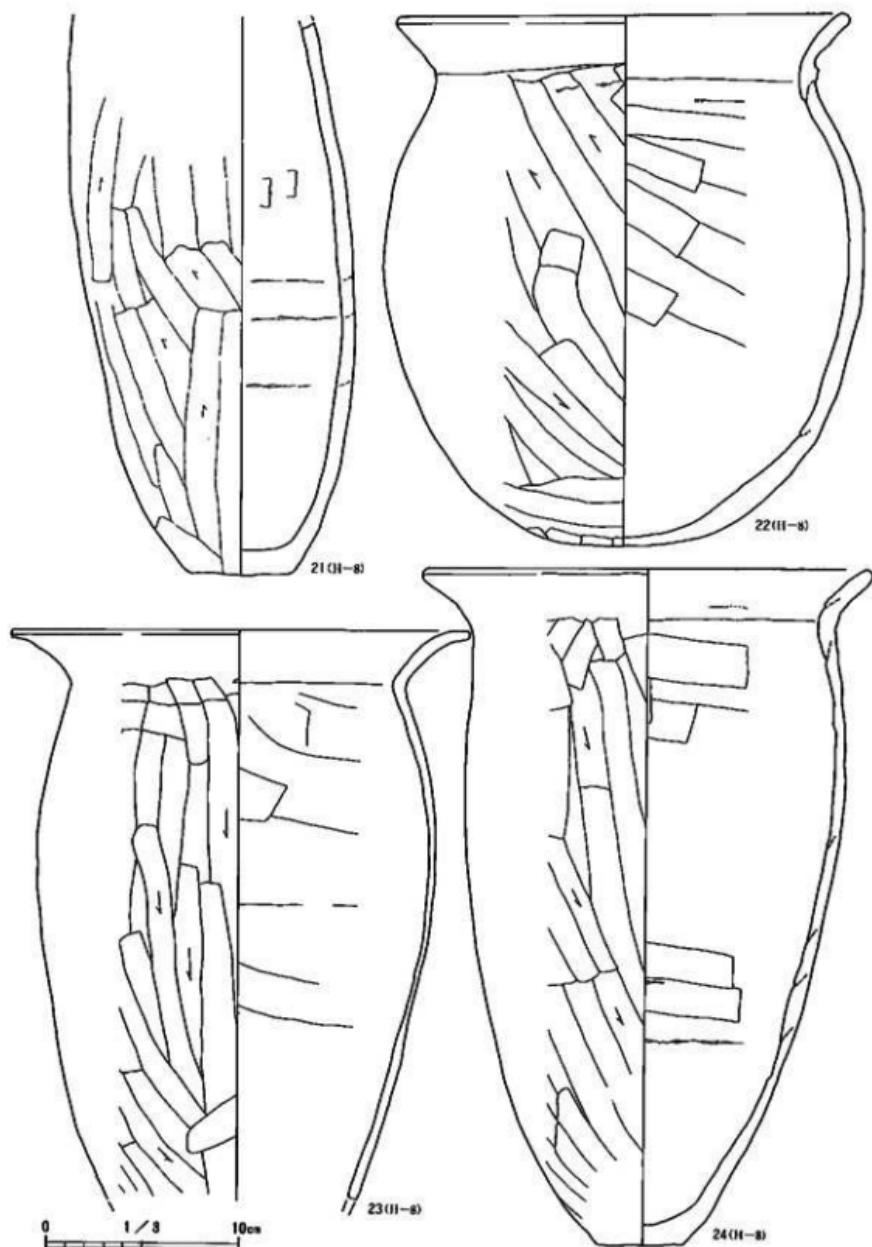
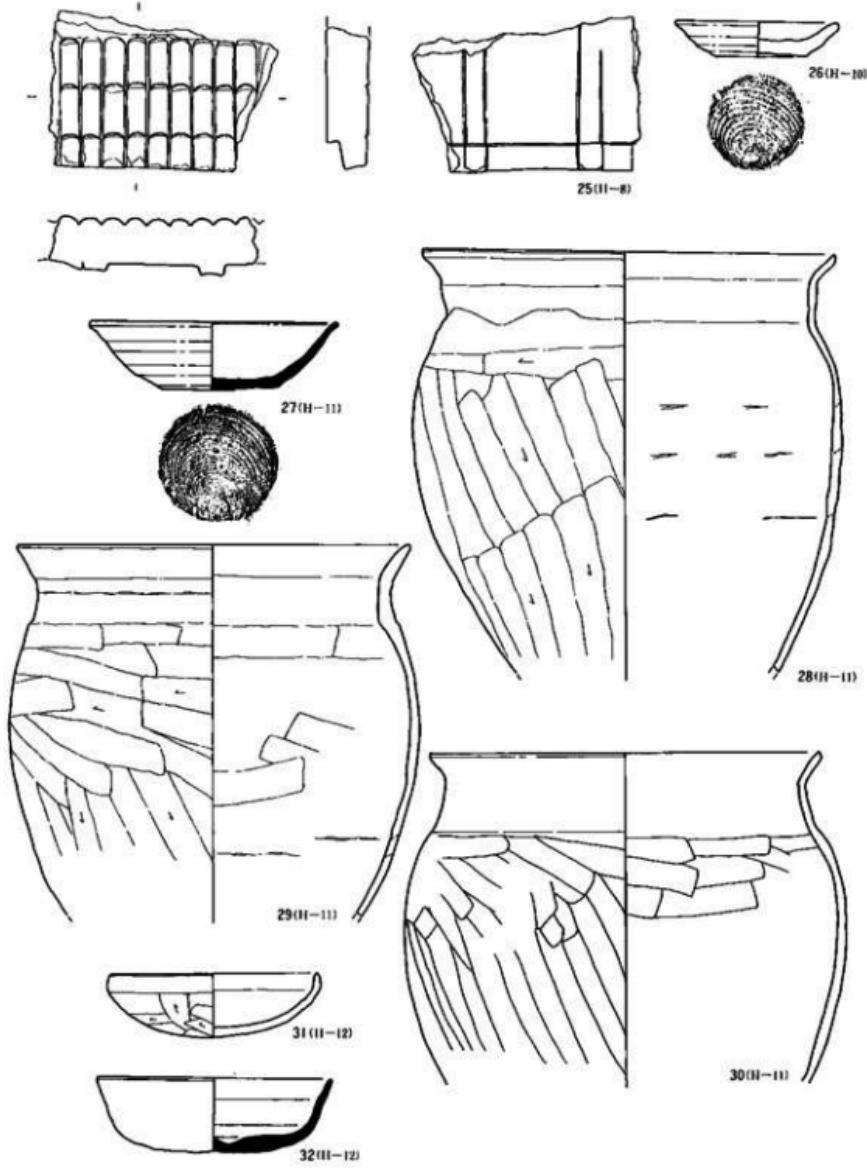


Fig. 32 古墳～奈良・平安時代の土器(3)



0 1 / 3 10cm

Fig. 33 古墳～奈良・平安時代の土器(4)

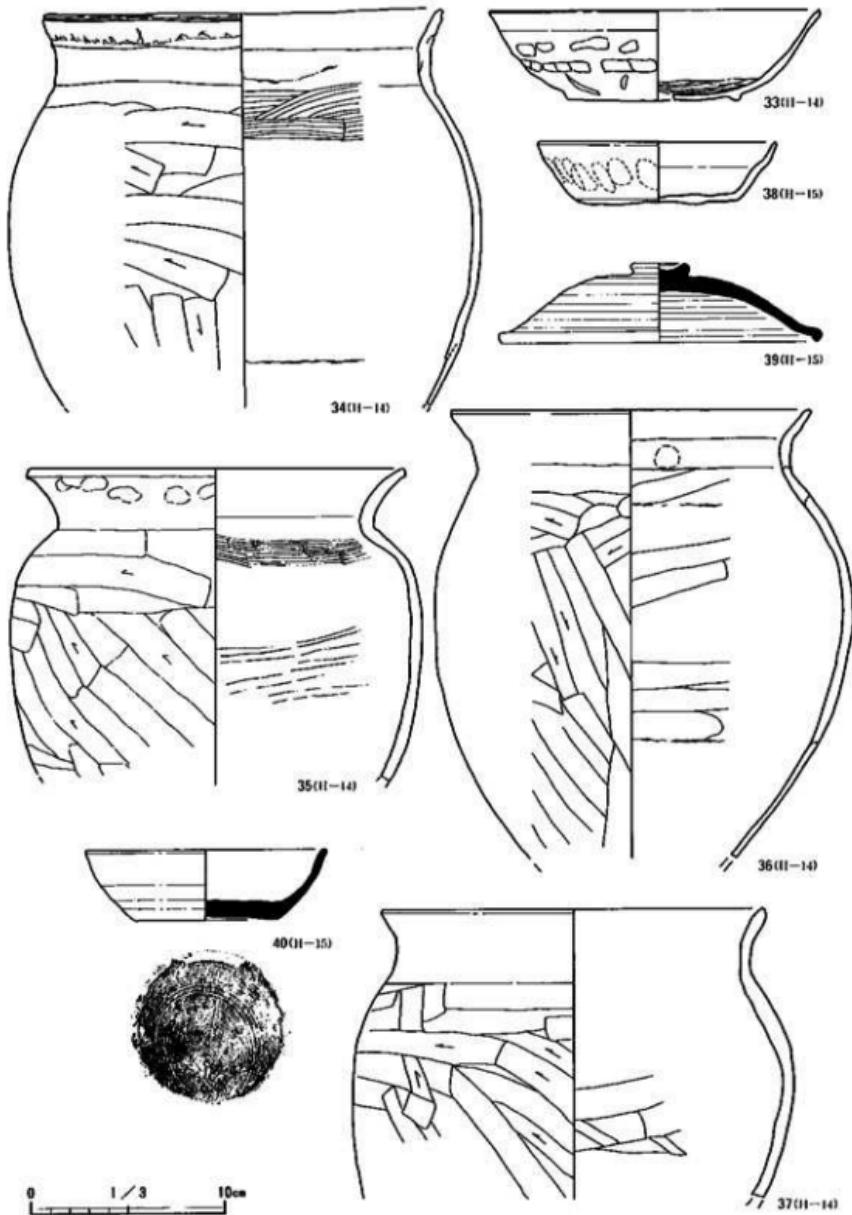


Fig. 34 古墳～奈良・平安時代の土器(5)

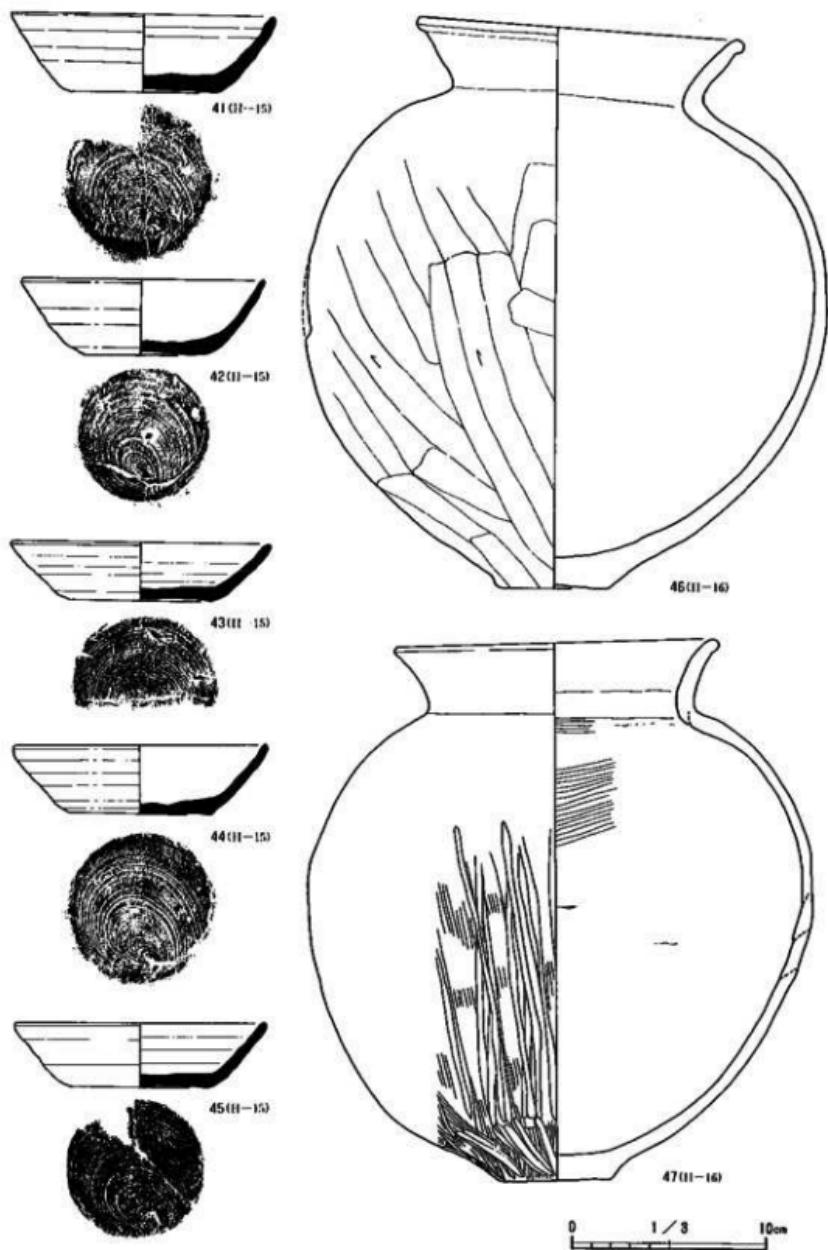


Fig. 35 古墳～奈良・平安時代の土器(6)

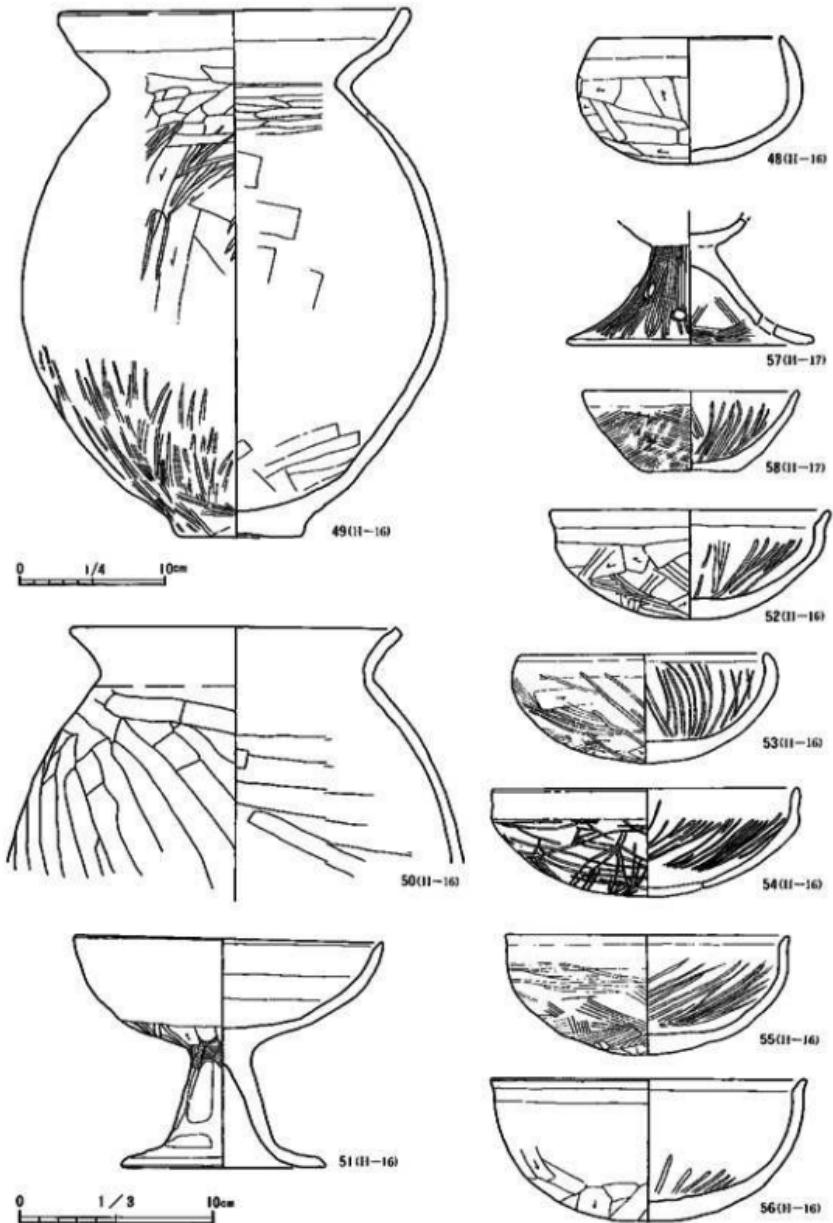


Fig. 36 古墳～奈良・平安時代の土器(7)

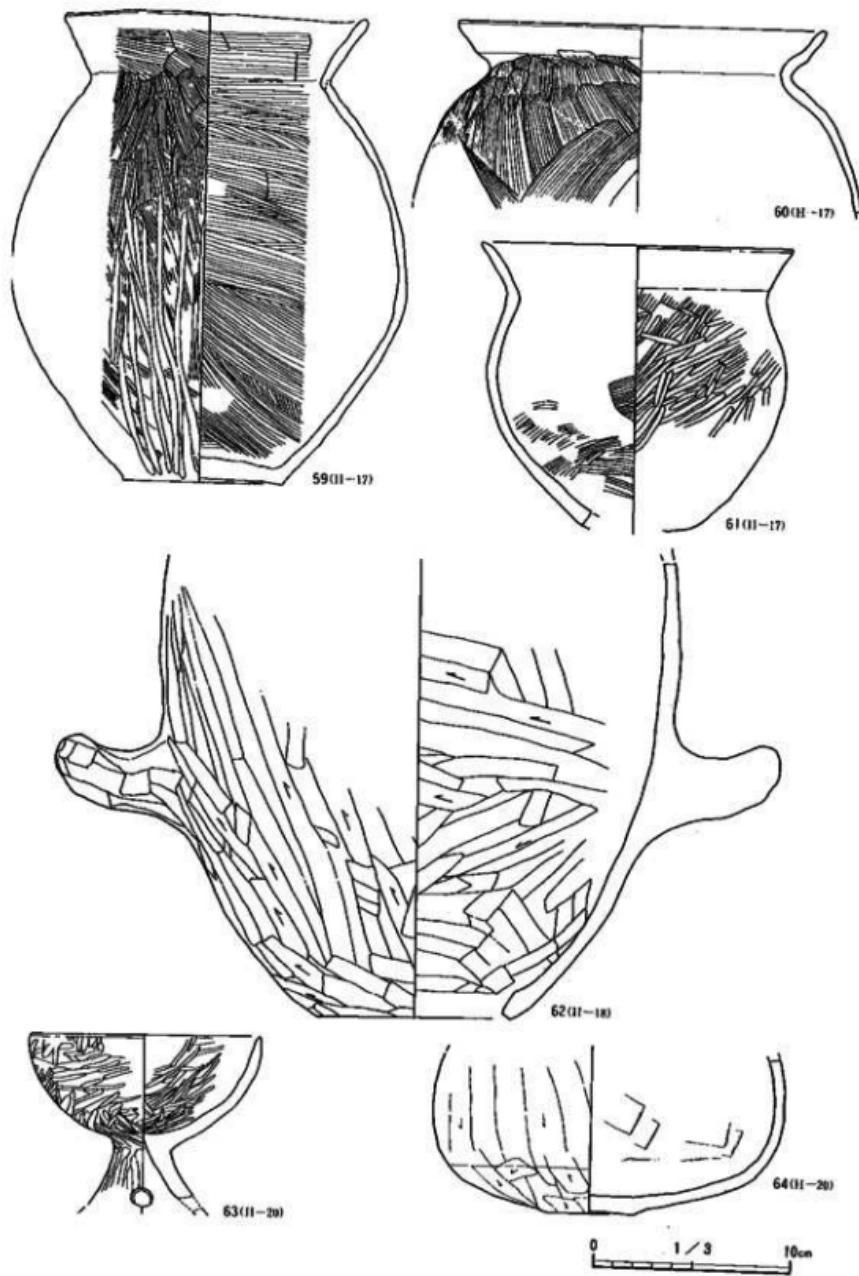
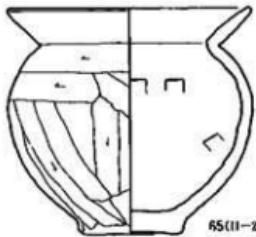
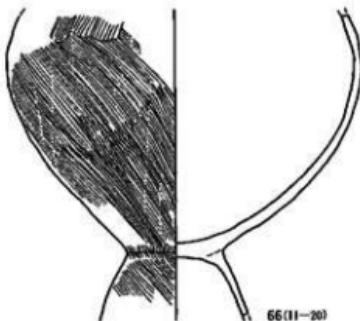


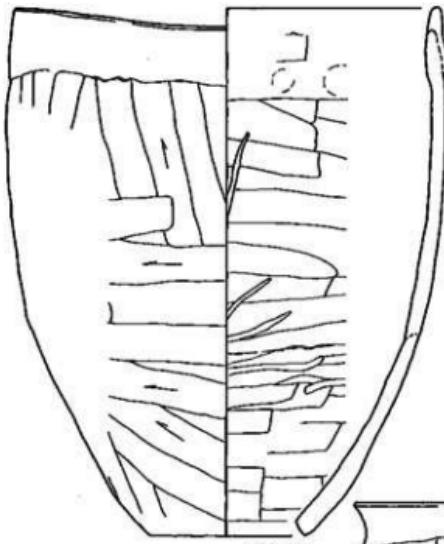
Fig. 37 古墳～奈良・平安時代の土器(8)



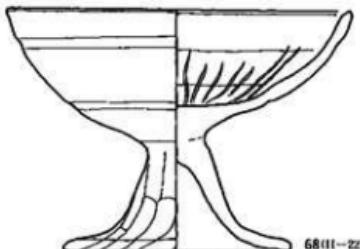
65(II-20)



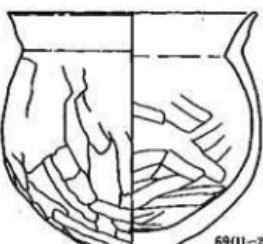
66(II-20)



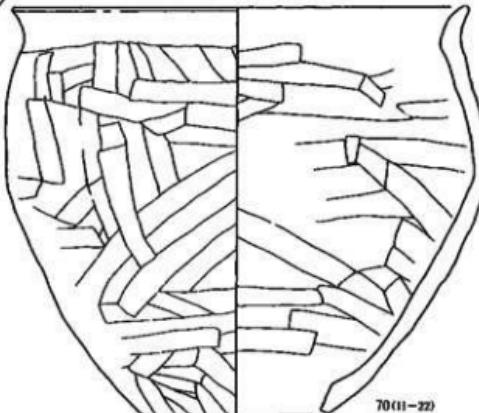
67(II-22)



68(II-22)



69(II-22)



70(II-22)

0 1 / 3 10cm

Fig. 38 古墳～奈良・平安時代の土器(9)

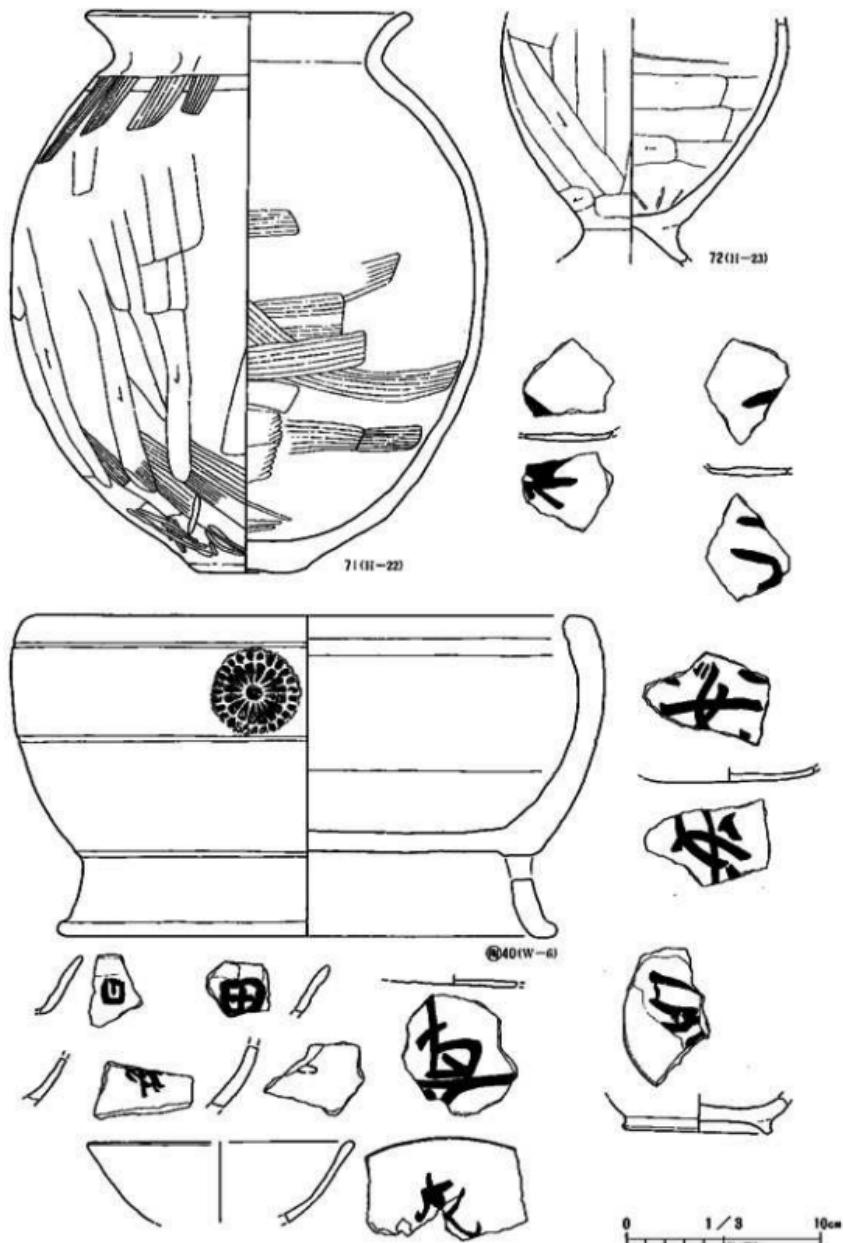
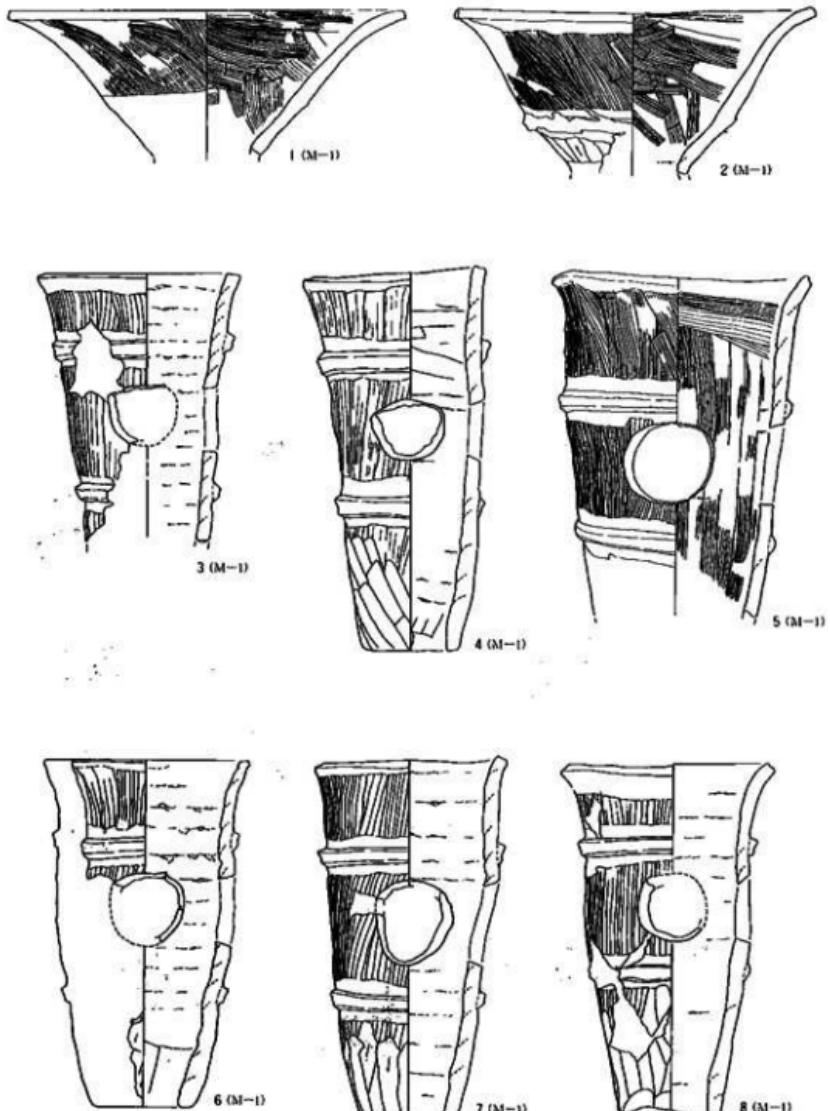


Fig. 39 古墳～奈良・平安時代の土器図



0 1/5 10cm

Fig. 40 古墳時代の埴輪(1)

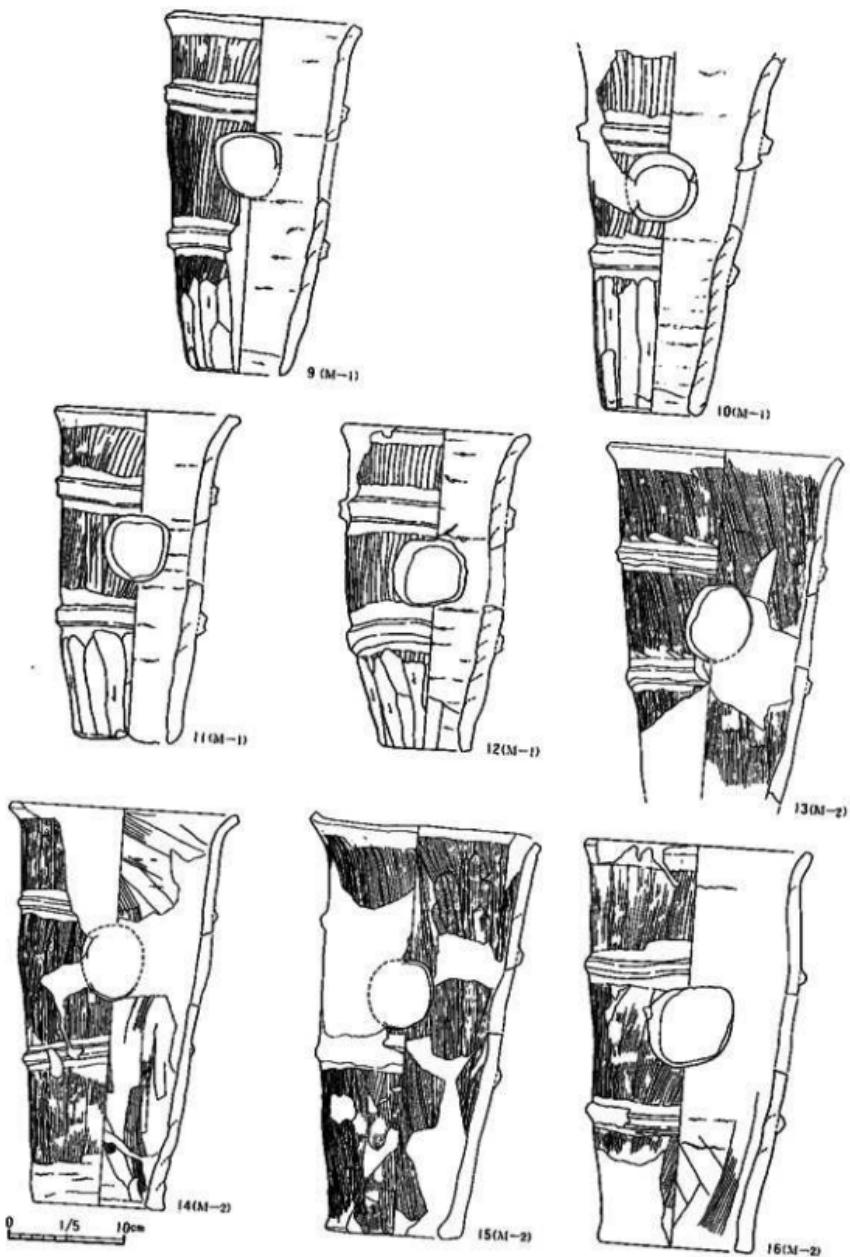


Fig. 41 古墳時代の埴輪(2)

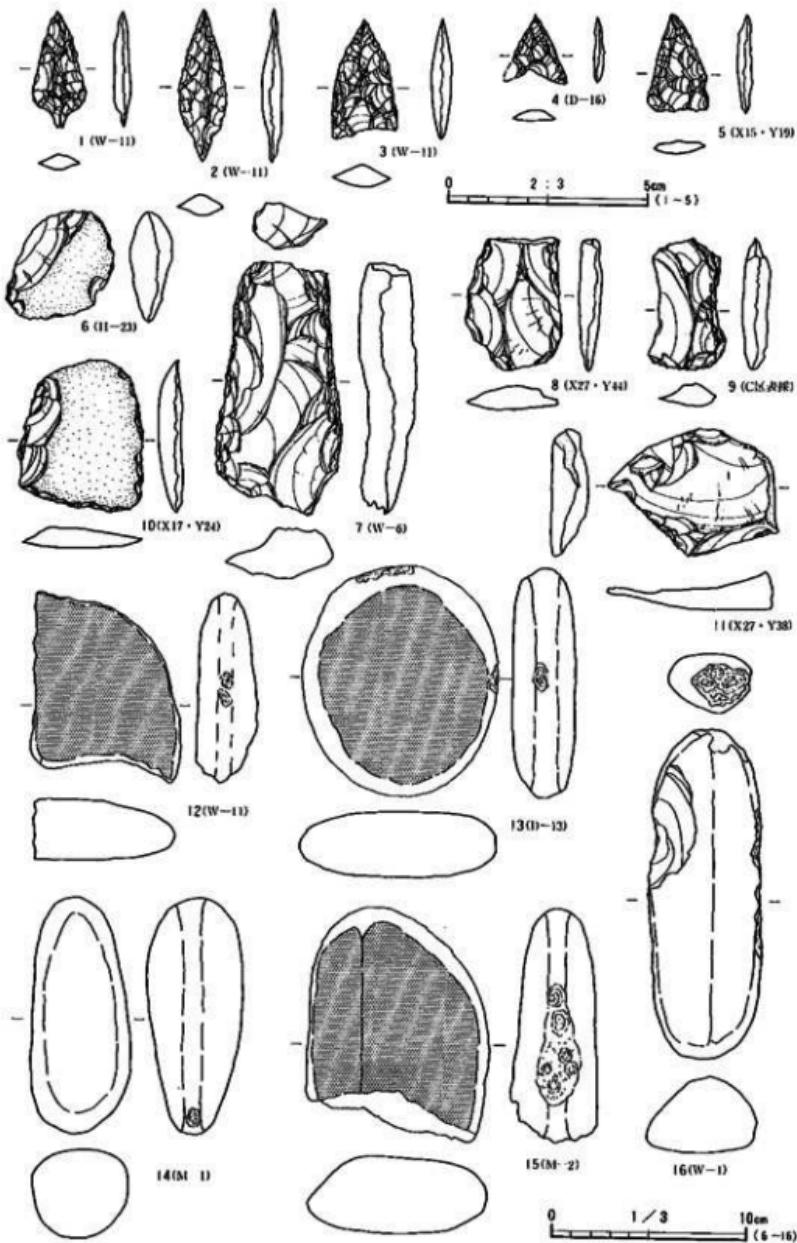


Fig. 42 石器・特殊遺物(1)

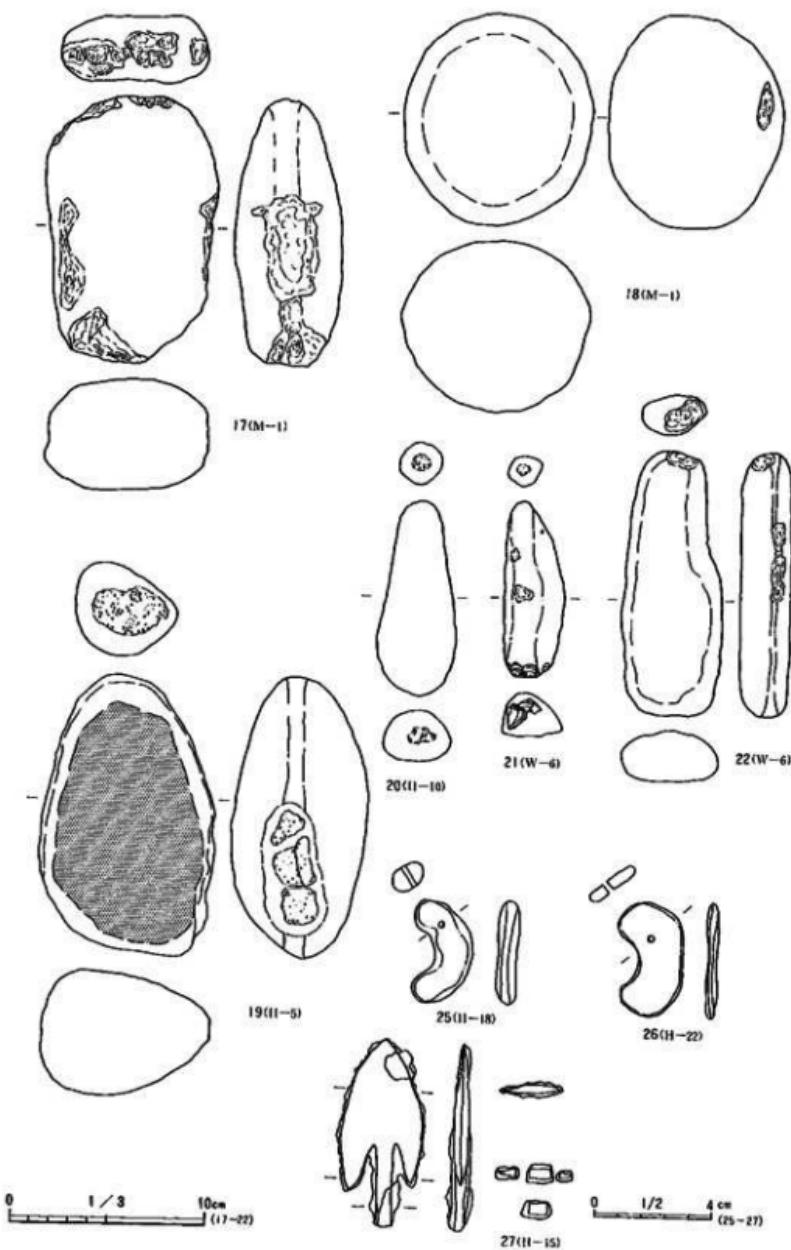


Fig. 43 石器・特殊遺物(2)

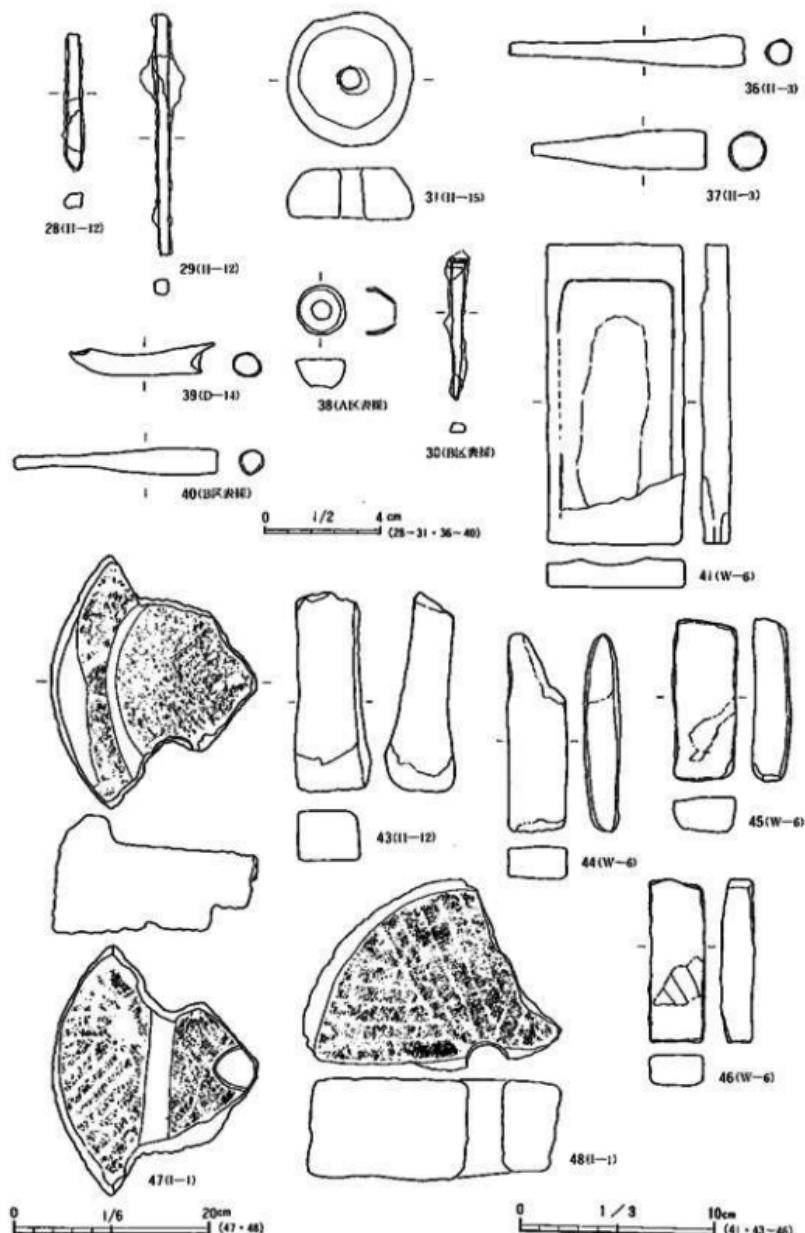


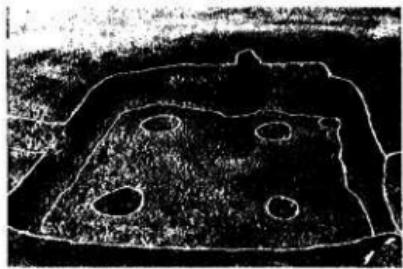
Fig. 44 石器・特殊遺物(3)



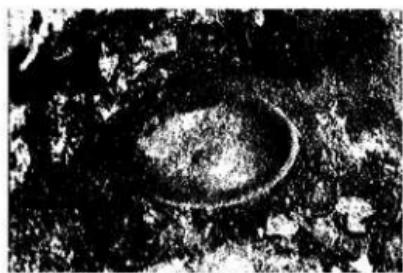
1. A区全景 (上空から)



2. A区深掘 (南東から)



3. H-1号住居址 (西から)



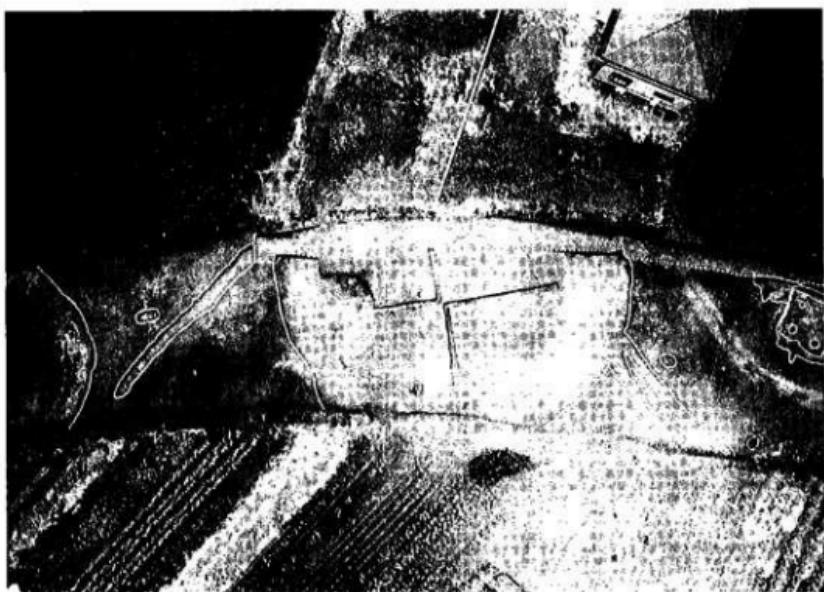
4. H-2号住居址出土物 (南東から)



1. W-6号墳址（東から）



2. W-6号墳出土遺物（南から）



3. M-1号墳（上空から）



4. M-1号墳出土遺物（北から）



5. M-1号墳出土遺物（北から）



1. M-1号墳全景（南東から）



2. M-2号墳全景（南東から）



3. M-3号墳周囲（南から）



4. W-7号墳跡全景（南西から）



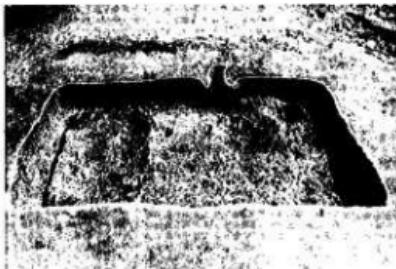
5. M-2号墳全景（上空から）



1. B区全景（上空から）



2. II-4号住居址（北西から）



3. II-6号住居址（北西から）



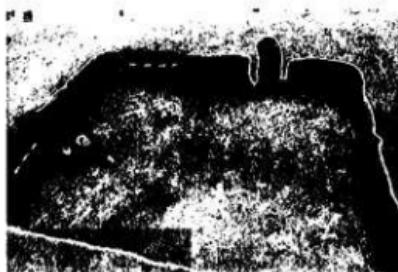
4. II-8号住居址（西から）



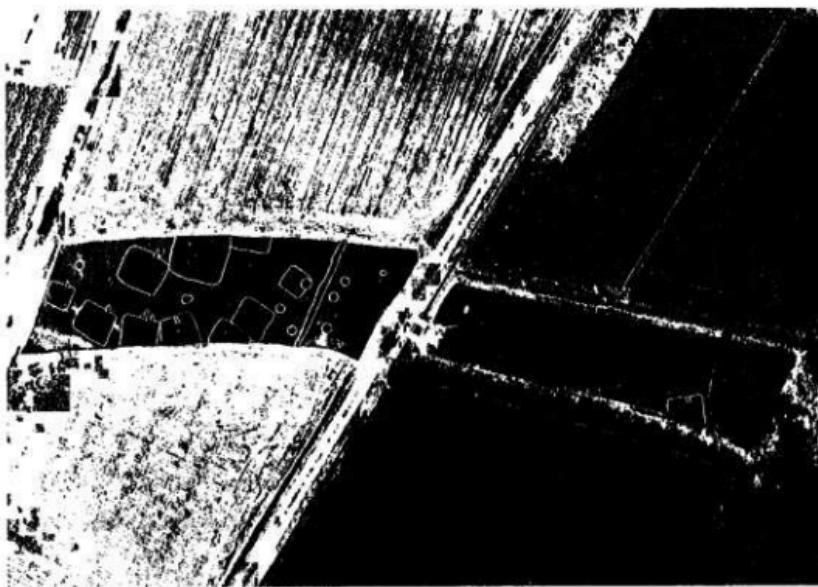
5. II-8号住居址出土遺物（西から）



1. II-9号住居址（北西から）



2. II-12号住居址（西から）



3. C区全景（上空から）



4. II-11号住居址（東から）



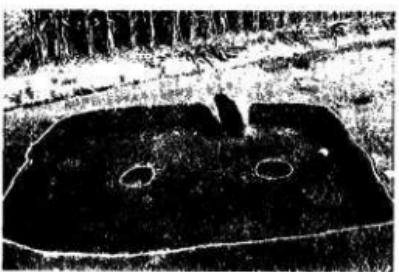
5. II-11号住居址出土遺物（南から）



1. H-14号住居址（西から）



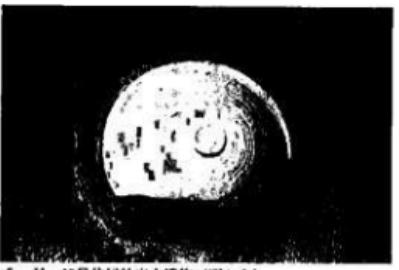
2. H-14号住居址竪（西から）



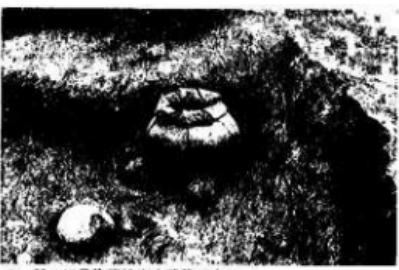
3. H-15号住居址（西から）



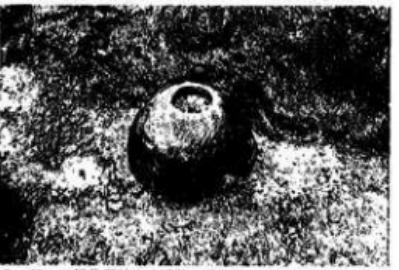
4. H-15号住居址竪（東から）



5. H-15号住居址出土遺物（西から）



6. H-16号住居址出土遺物（南から）



7. H-16号住居址出土遺物（北西から）



8. H-14号住居址貯藏穴出土遺物（西から）



1. H-16号居住址縄内出土遺物（内から）



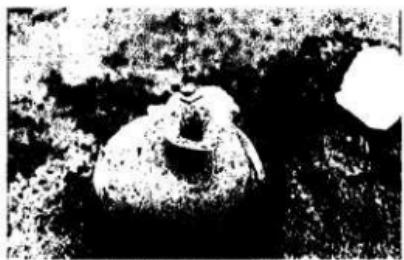
2. H-16号居住址（西から）



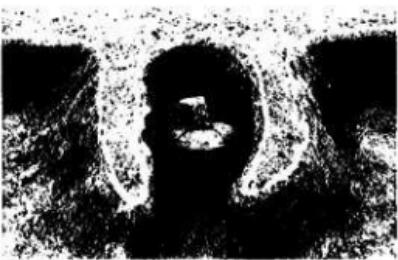
3. H-17号居住址（南から）



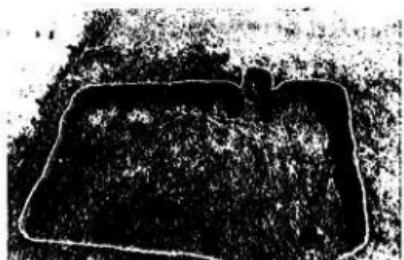
4. H-17号居住址出土遺物（南西から）



5. H-20号居住址出土遺物（南から）



6. H-22号居住址（内から）



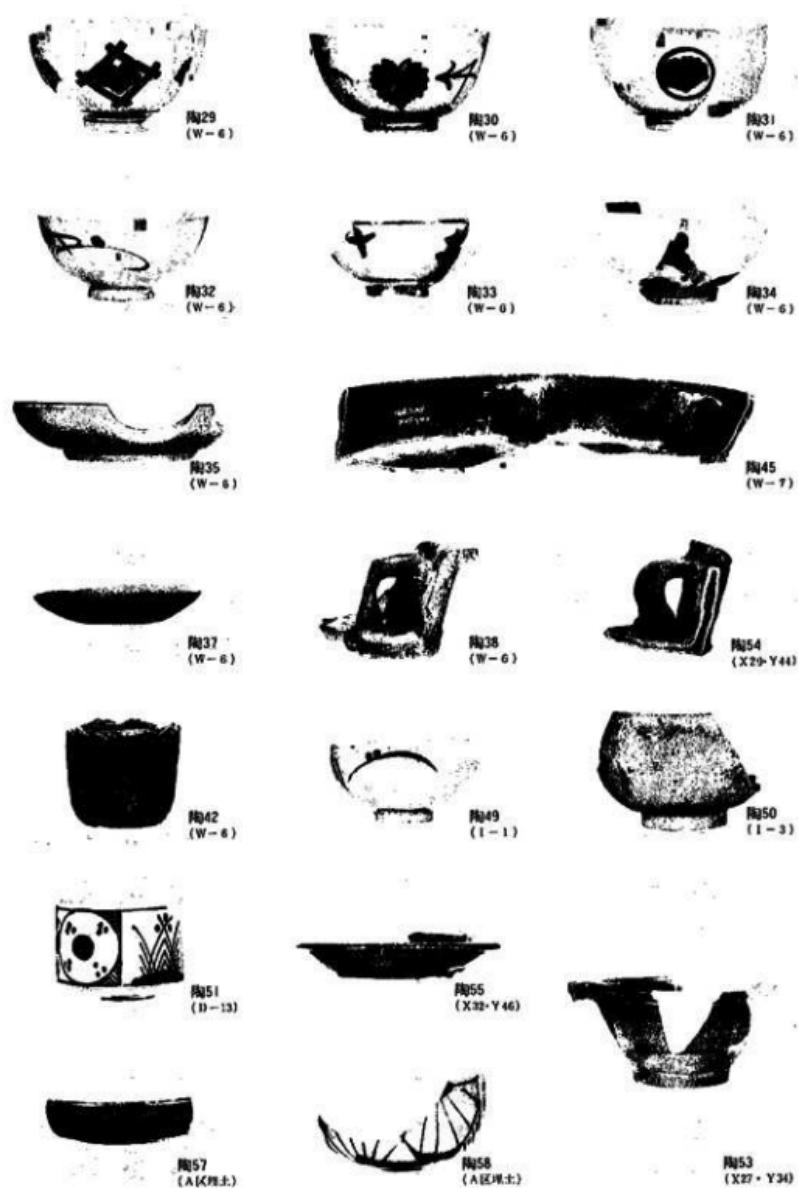
7. H-23号居住址（西から）



8. H-8号居住址出土遺物（西から）

PL. 8







59
(B-II-7)



3
(M-1)



4
(M-1)



39
(W-6)



40
(W-6)



41
(W-6)



1
(B-1)



5
(B-1)



6
(B-1)



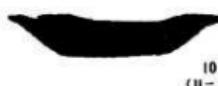
9
(B-1)



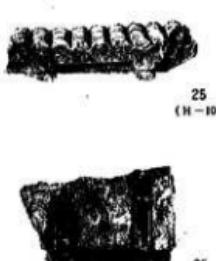
7
(B-1)

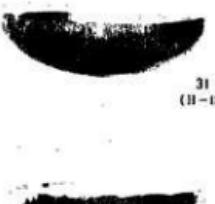


8
(B-1)



10
(B-2)

11
(H-2)13
(H-2)14
(H-2)15
(H-2)16
(H-2)17
(H-3)18
(H-4)19
(H-5)20
(H-8)21
(H-8)22
(H-8)25
(H-10)23
(H-8)24
(H-8)25
(H-10)

26
(H-10)27
(H-11)28
(H-11)30
(H-11)31
(H-12)34
(H-14)33
(H-14)38
(H-15)39
(H-15)36
(H-14)37
(H-14)40
(H-15)41
(H-15)42
(H-15)44
(H-15)



59
(H - 17)

61
(H - 17)



68
(II-17)



63
(II-20)



64
(II-20)



62
(II-18)



65
(II-20)



66
(II-20)



67
(II-22)



68
(II-22)



69
(II-22)



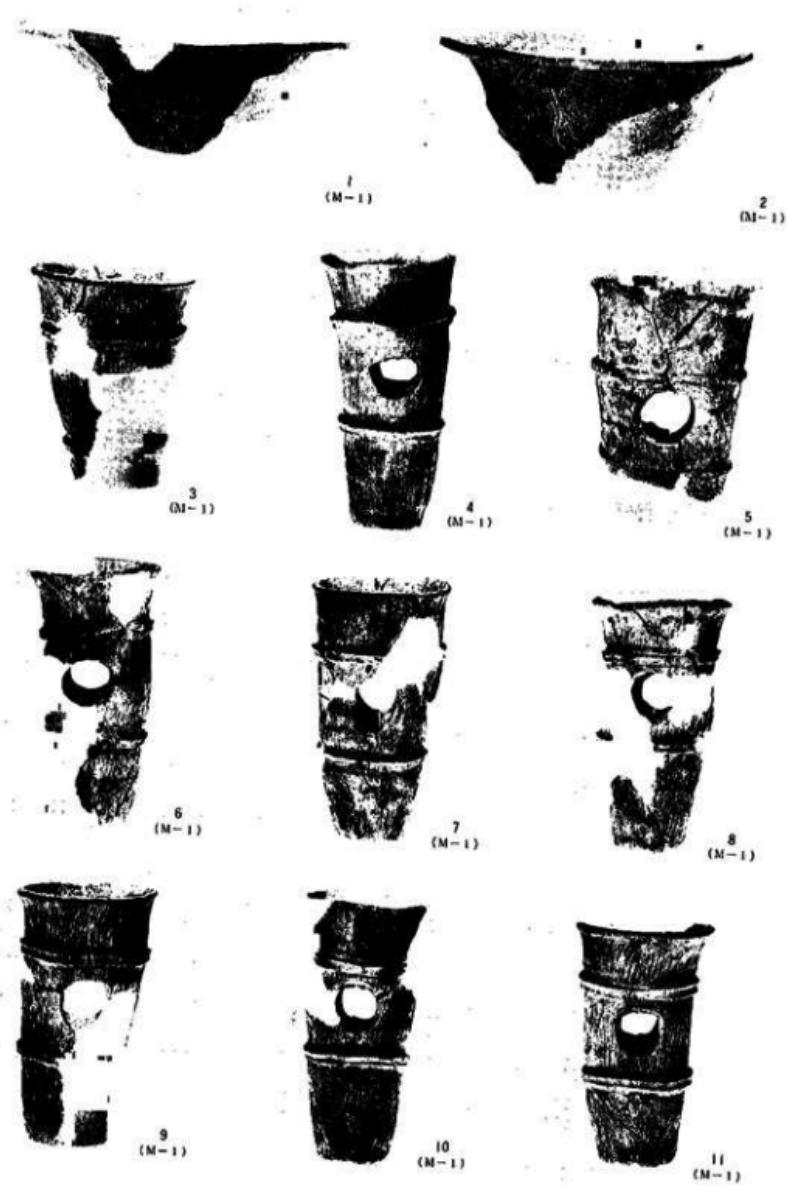
70
(II-22)

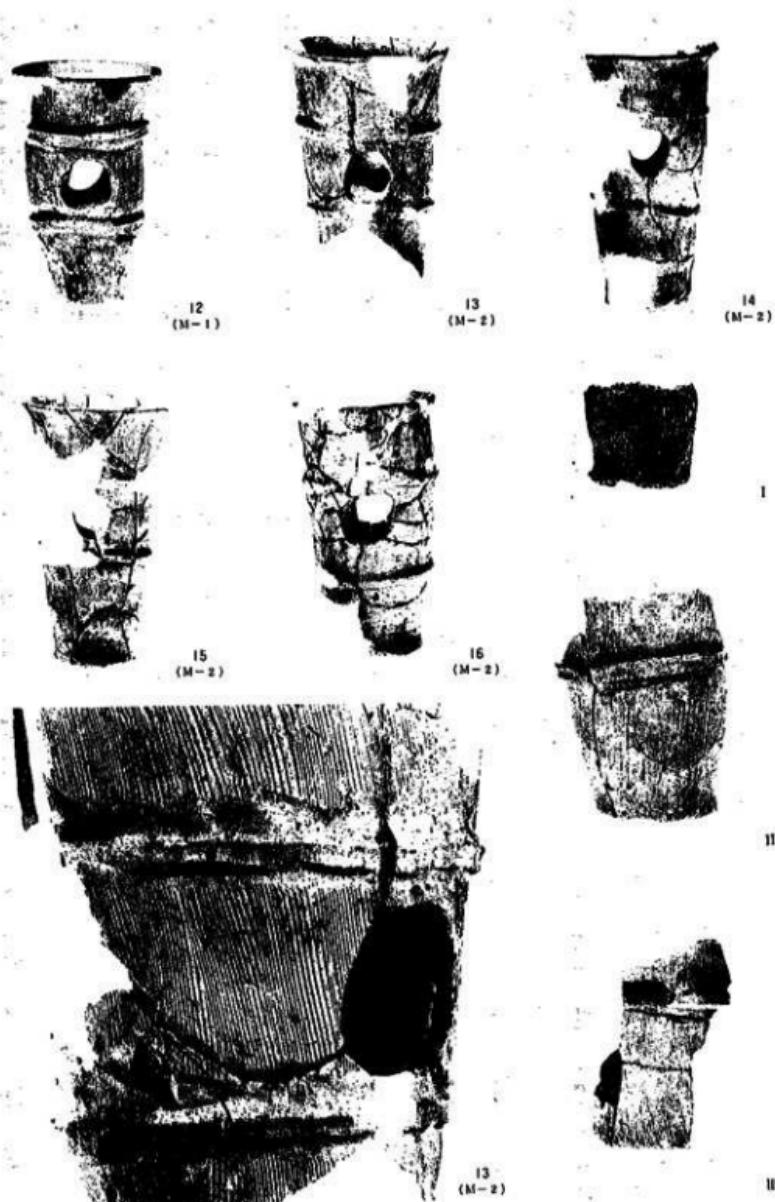


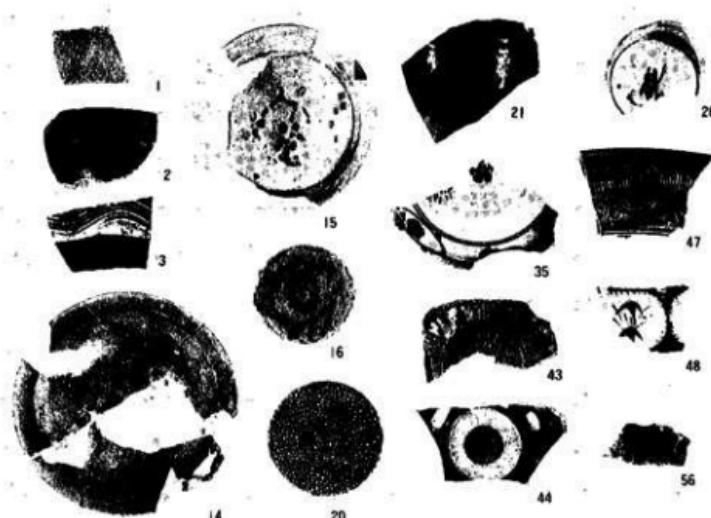
71
(II-22)



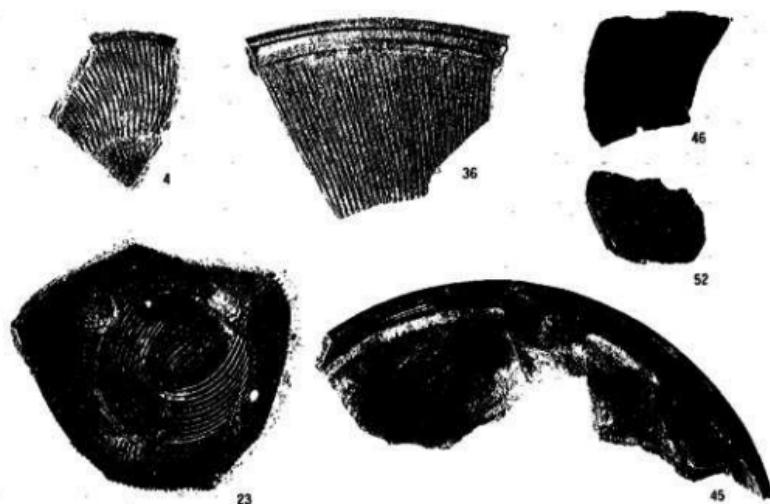
72
(II-22)



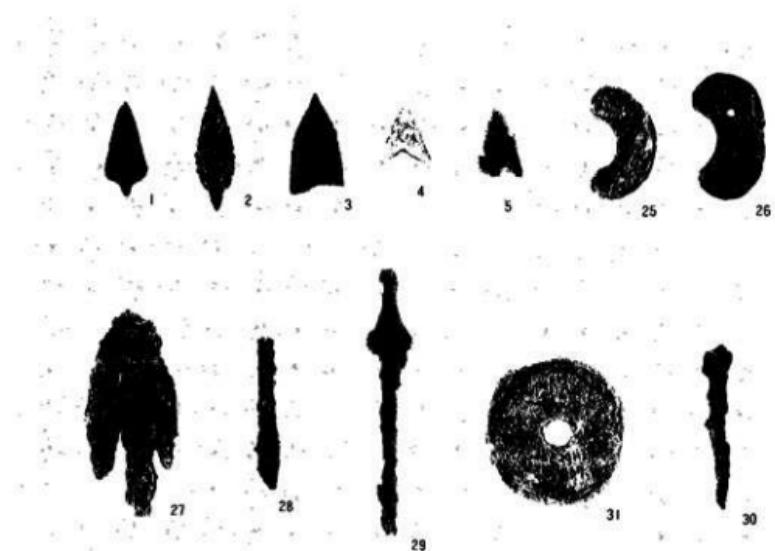




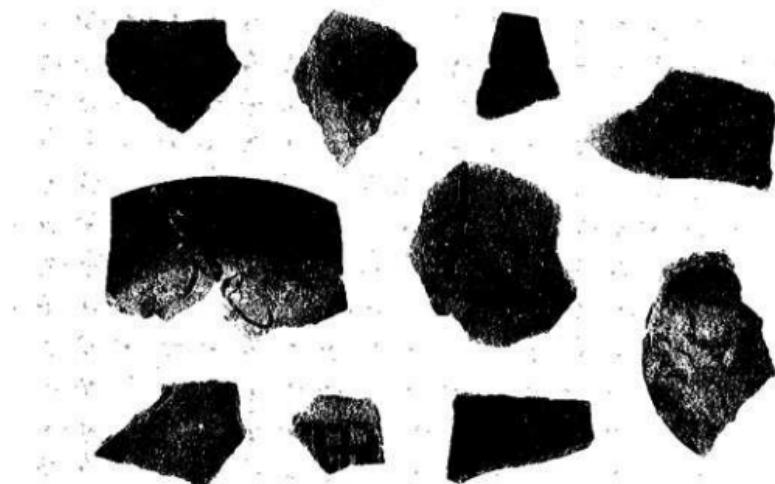
1. 近世陶器類



2. 近世陶器類



1. 石器、特殊遗物



2. 破片土器

抄
録

フリガナ	ジグリサンイセキ
書名	地田栗田遺跡
副書名	前橋市市道246号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	狩野吉弘 新井真典
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦1994年3月25日

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位 質		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 緯			
地田栗田	前橋市西大室町	10201	5E29	36°22'36"	139°11'18"	19930510 19931008	5,600m ²	市道246号 改良工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物
地田栗田遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	住居址 23軒	土師器・須恵器
		古墳時代	古墳 3基	埴輪
		近世	溝址 16条	陶磁器
		近世	井戸址 4基	陶磁器

地田栗 III 遺跡

1994年3月20日 印刷

1994年3月25日 発行

編集・発行 前橋市文化財発掘調査団

前橋市上泉町664-4

T E L. 0272-31-9531

印 刷 上海印刷工業株式会社

前橋市天川大島町305番地